家なき子（上）

マロ

楠山正雄訳

生い立ち

わたしは捨(す)て子(ご)だった。

でも八つの年まではほかの子どもと同じように、母親があると思っていた。それは、わたしが泣(な)けばきっと一人の女が来て、優(やさ)しくだきしめてくれたからだ。

その女がねかしつけに来てくれるまで、わたしはけっしてねどこにははいらなかった。冬のあらしがだんごのような雪をふきつけて窓(まど)ガラスを白くするじぶんになると、この女の人は両手の間にわたしの足をおさえて、歌を歌いながら暖(あたた)めてくれた。その歌の節(ふし)

も文句(もんく)も、いまに忘(わす)れずにいる。

わたしが外へ出て雌牛(めうし)の世話をしているうち、急に夕立がやって来ると、この女はわたしを探(さが)しに来て、麻(あさ)の前かけで頭からすっぽりくるんでくれた。

ときどきわたしは遊(あそ)び仲間(なかま)とけんかをする。そういうとき、この女の人はじゅうぶんわたしの言い分を聞いてくれて、たいていの場合、優(やさ)しいことばでなぐさめてくれるか、わたしの肩(かた)をもってくれた。

それやこれやで、わたしに物を言う調子、わたしを見る目つき、あまやかしてくれて、しかるにしても優(やさ)しくしかる様子から見て、この女の人はほんとうの母

親にちがいないと思っていた。

ところでそれがひょんな事情(じじょう)から、この女の人が、じつは養(やしな)い親(おや)でしかなかったということがわかったのだ。

わたしの村、もっと正しく言えばわたしの育てられた村は——というのが、わたしには父親や母親という者がないと同様に、自分の生まれた村というものがなかったのだから——で、とにかくわたしが子どもの時代を過(す)ごした村は、シャヴァノンという村で、それはフランスの中部地方でもいちばんびんぼうな村の一つであった。

なにしろ土地がいたってやせていて、どうにもしようのない場所であった。どこを歩いてみても、すきくわのはいった田畑というものは少なくて、見わたすかぎりヒースやえにしだのほか、ろくにしげるもののない草原で、そのあれ地を行きつくすと、がさがさした砂地（すなじ）の高原で、風にふきたわめられたやせ木立ちが、所どころひょろひょろと、いじけてよじくれたえだをのばしているありさまだった。

　そんなわけで、木らしい木を見ようとすると、丘（おか）を見捨（みす）てて谷間へと下りて行かねばならぬ。その谷川にのぞんだ川べりにはちょっとした牧草（ぼくそう）もあり、空をつ

くようなかしの木や、ごつごつしたくりの木がしげっていた。

その谷川の早い瀬(せ)の末(すえ)がロアール川の支流(しりゅう)の一つへ流れこんで行く、その岸の小さな家で、わたしは子どもの時代を送った。

八つの年まで、わたしはこの家で男の姿(すがた)というものを見なかった。そのくせ、『おっかあ』と呼(よ)んでいた人はやもめではなかった。夫(おっと)というのは石工(いしく)であったが、このへんのたいていの労働者(ろうどうしゃ)と同様パリへ仕事に行っていて、わたしが物心(ものごころ)ついてこのかた、つい一度も帰って来たことはなかった。ただおりふしこの村

へ帰って来る仲間の者に、便りをことづけては来た。
「バルブレンのおっかあ、こっちのもたっしゃだよ。相変わらずかせいでいる、よろしく言ってくれと言って、このお金を預けてよこした。数えてみてください」
これだけのことであった。おっかあも、それだけの便りで満足していた。ご亭主がたっしゃでいる、仕事もある、お金がもうかる——と、それだけ聞いて、満足していた。
このご亭主のバルブレンがいつまでもパリへ行っているというので、おかみさんと仲が悪いのだと思ってはならない。こうやって留守にしているのは、なにも

気まずいことがあるためではない。パリに滞在しているのは仕事に引き留められているためで、やがて年を取ればまた村へ帰って来て、たんまりかせいで来たお金で、おかみさんと気楽にくらすつもりであった。

十一月のある日のこと、もう日のくれに、見知らない一人の男がかきねの前に立ち止まった。そのときわたしは、門口でそだを折っていた。中にはいろうともしないで、かきねの上からぬっと頭を出してのぞきながら、その男はわたしに、「バルブレンのおっかあのうちはここかね」とたずねた。

わたしは、「おはいんなさい」と言った。

男は門(かど)の戸をきいきい言わせながらはいって来て、のっそり、うちの前につっ立った。

こんなよごれくさった男を見たことがなかった。なにしろ、頭のてっぺんから足のつま先まで板を張(は)ったようにどろをかぶっていた。それも半分まだかわききらずにいた。よほど長いあいだ、悪い道をやって来たにちがいない。

話し声を聞いて、バルブレンのおっかあはかけだして来た。そして、この男がしきいに足をかけようとするところへ、ひょっこり顔を出した。

「パリからことづかって来たが」と男は言った。

それはごくなんでもないことばだったし、もうこれまでも何べんとなく、それこそ耳にたこのできるほど聞き慣(な)れたものだったが、どうもそれが『ご亭主(ていしゅ)はたっしゃでいるよ。相変(あいか)わらずかせいでいるよ』という、いつものことばとは、なんだかちがっていた。

「おやおや。ジェロームがどうかしましたね」

と、おっかあは両手をもみながら声を立てた。

「ああ、ああ、どうもとんだことでね。ご亭主(ていしゅ)はけがをしてね。だが気を落としなさんなよ。けがはけがだが命には別状(べつじょう)がない。だが、かたわぐらいにはなるかもしれない。いまのところ病院にはいっている。わ

たしはちょうど病室でとなり合わせて、今度国へ帰るについて、ついでにこれだけの事をことづけてくれとたのまれたのさ。ところで、ゆっくりしてはいられない。まだこれから三里（約十二キロ）も歩かなくてはならないし、もうおそくもなっているからね」

でもおっかあは、もっとくわしい話が開きたいので、ぜひ夕飯（ゆうはん）を食べて行くようにと言ってたのんだ。道は悪いし、森の中にはおおかみが出るといううわさもある。あしたの朝立つことにしたほうがいい。

男は承知（しょうち）してくれた。そこで炉（ろ）のすみにすわりこんで、腹（はら）いっぱい食べながら、事件（じけん）のくわしい話をした。

バルブレンはくずれた足場の下にしかれて大けがをした。そのくせ、そこはだれも行く用事のない場所であったという証言（しょうげん）があったので、建物（たてもの）の請負人（うけおいにん）は一文の賠償金（ばいしょうきん）もしはらわないというのである。

「ご亭主（ていしゅ）も気（き）のどくな。運が悪かったのよ」

と、男は言った。

「まったく、運が悪かったのよ。世間にはわざとこんなことを種（たね）に、しこたませしめるずるい連中（れんちゅう）もあるのだが、おまえさんのご亭主（ていしゅ）ときては、一文にもならないのだからな」

「まったく運が悪い」と男はこのことばをくり返しな

がら、どろでつっぱり返っているズボンをかわかしていた。その口ぶりでは、手足の一本ぐらいたたきつぶされても、お金になればいいというらしかった。

「なんでもこれは、請負人を相手どって裁判所へ持ち出さなければうそだと、おれは勧めておいたよ」

　男は話のしまいに、こう言った。

「まあ。でも裁判なんということは、ずいぶんお金の要ることでしょう」

「そうだよ。だが勝てばいいさ」

　バルブレンのおっかあは、パリまで出かけて行こうかと思った。でも、それはずいぶんたいへんなこと

だった。道は遠いし、お金がかかる。

　そのあくる朝、わたしは村へ行ってぼうさんに相談した。ぼうさんは、まあ向こうへ行って役に立つかどうか、それがよくわかったうえにしないと、つまらないと言った。それでぼうさんが代筆をして、バルブレンのはいっている慈恵病院の司祭にあてて、手紙を出すことにした。その返事は二、三日して着いたが、バルブレンのおっかあは来るにはおよばない、だが、ご亭主が災難を受けた相手にかけ合うについて、入費のお金を送ってもらいたいというのであった。

　それからいく日もいく週間もたった。ときおり手紙

が届いて、そのたんびにもっと金を送れと言って来る。いちばんおしまいには、これまでの手紙よりまたひどくなって、もう金がないなら、雌牛のルセットを売っても、ぜひ金をこしらえろと言って来た。
いなかで百姓の仲間にはいってくらした者でなければ、『雌牛を売れ』ということばに、どんなにつらい、悲しい思いがこもっているかわからない。百姓にとって、雌牛のありがたさは、一とおりのものではなかった。いかほどびんぼうでも、家内が多くても、ともかくも雌牛が飼ってあるあいだは、飢えて死ぬことはないはずだ。

それにうちの雌牛は、なにより仲（なか）よしのお友だちであった。わたしたちが話をしたり、その背中（せなか）をさすってキッスをしてやったりすると、それはよく聞き分けて、優（やさ）しい目でじっと見た。つまりわたしたちはおたがいに愛（あい）し合っていたと言えば、それでじゅうぶんだ。けれどもいまはその雌牛（めうし）とも、わたしたちは別（わか）れなければならなかった。『雌牛を売る』それでなければ、もうご亭主（ていしゅ）を満足（まんぞく）させることはできなかった。

そこでばくろう（馬売買の商人）がやって来て、細かく雌牛のルセットをいじくり回した。いじくり回しながらしじゅう首をふって、これはまるで役に立たな

い。乳も出ないしバターも取れないと、さんざんなんくせをつけておいて、つまり引き取るには引き取るが、それもおっかぁが正直な、いい人で気のどくだから、引き取ってやるのだというのであった。
かわいそうに、ルセットも、自分がどうされるかさとったもののように、牛小屋から出るのをいやがって鳴き始めた。
「後ろへ回って、たたき出せ」とばくろうはわたしに言って、首の回りにかけていたむちをわたした。
「いいえ、そんなことをしてはいけない」とおっかぁはさけんだ。

それでルセットのはづな（馬の口につけて引くつな）をつかまえながら、優（やさ）しく言った。

「さあ、おまえ出ておくれ。ねえ、いいかい」

ルセットはそれをこばむことができなかった。それで往来（おうらい）へ出ると、ばくろうはルセットを車の後ろにしばりつけた。馬がとことこかけだすと、ルセットはいやでもあとからついて行かなければならなかった。

わたしたちはうちの中にはいったが、しばらくのあいだまだルセットの鳴き声が聞こえていた。

もう乳（ちち）もなければバターもない。朝は一きれのパン、晩（ばん）は塩（しお）をつけたじゃがいものごちそうであった。

雌牛(めうし)を売ってから四、五日すると、謝肉祭(しゃにくさい)が来た。一年まえのこの日には、バルブレンのおっかあが、わたしにどら焼(や)きと揚(あ)げりんごのごちそうをこしらえてくれた。それでたくさんわたしが食べると、おっかあはごきげんで、にこにこしてくれた。

けれどそのときは揚(あ)げ物(もの)の衣(ころも)がパン粉(こ)をとかす乳(ちち)や、揚げ物の油のバターをくれるルセットがいた。

もうルセットもいない、乳(ちち)もない、バターもない、これでは、謝肉祭(しゃにくさい)もなにもないと、わたしはつまらなそうに独(ひと)り言(ごと)を言った。

ところがおっかあはわたしをびっくりさせた。おっ

かあはいつも人から物を借りることをしない人ではあったが、おとなりへ行って乳を一ぱいもらい、もう一けんからバターを一かたまりもらって来て、わたしがお昼ごろうちへ帰って来ると、おっかあは大きな土なべにパン粉をあけていた。

「おや、パン粉」とわたしはそばへ寄って言った。

「ああ、そうだよ」と、おっかあはにっこりしながら答えた。「上等なパン粉だよ、ご覧、ルミ、いいかおりだろう」

わたしはこのパン粉をなんにするのか知りたいと思ったが、それをおしてたずねる勇気がなかった。そ

れにきょうが謝肉祭（しゃにくさい）だということを思い出させて、おっかあをふゆかいにさせたくなかった。

「パン粉（こ）でなにをこさえるのだったけね」とおっかぁはわたしの顔を見ながら聞いた。

「パンさ」

「それからほかには」

「パンがゆ」

「それからまだあるだろう」

「だって……ぼく知らないや」

「なあに、おまえは知っていても、かしこい子だからそれを言おうとしないのだよ。きょうが謝肉祭（しゃにくさい）で、ど

ら焼(や)きをこしらえる日だということを知っていても、バターとお乳(ちち)がないと思って、言いださずにいるのだよ。ねえ、そうだろう」
「だって、おっかあ」
「まあとにかく、きょうのせっかくの謝肉祭(しゃにくさい)を、そんなにつまらなくないようにしたつもりだよ。このはこの中をご覧(らん)」
　わたしはさっそくふたをあけると、乳(ちち)とバターと卵(たまご)と、おまけにりんごが三つ、中にはいっていた。
　わたしがりんごをそぐ（小さく切る）と、おっかあは卵(たまご)を粉(こな)に混(ま)ぜて衣(ころも)をしらえ、乳(ちち)を少しずつ混ぜて

いた。

衣がすっかり練(ね)れると、土(ど)なべのまま、熱灰(あつばい)の上にのせた。それでどら焼(や)きが焼け、揚(あ)げりんごが揚がるまでには、晩食(ばんしょく)のときまで待たなければならなかった。正直に言うと、わたしはそれからの一日が、それはそれは待ち遠しくって、何度も、何度も、おさらにかけた布(ぬの)を取ってみた。

「おまえ、衣(ころも)にかぜをひかしてしまうよ。そうするとうまくふくれないからね」とかの女はさけんだ。けれど、言うそばからそれはずんずんふくれて、小さなあわが上に立ち始めた。卵(たまご)と乳(ちち)がぷんとうまそうな

においを立てた。

「そだを少し持っておいで」とおっかあが言った。「いい火をこしらえよう」

　とうとう明かりがついた。

「まきを炉(ろ)の中へお入れ」

　かの女がこのことばを二度とくり返すまでもなく、わたしはさっきからこのことばの出るのをいまかいまかと待ちかまえていたのであった。さっそく赤いほのおがどんどん炉(ろ)の中に燃(も)え上がり、この光が台所じゅうを明るくした。

　そのときおっかあは、揚(あ)げなべをくぎから外(はず)して火

の上にのせた。

「バターをお出し」

ナイフの先でかの女はバターをくるみくらいの大きさに一きれ切ってなべの中へ入れると、じりじりとけ出してあわを立てた。

もうしばらくこのにおいもかがなかった。まあ、そのバターのいいにおいといったら。

わたしがそのじりじりこげるあまい音楽にむちゅうで聞きほれていたとき、裏庭（うらにわ）でこつこつ人の歩く足音がした。

せっかくのときにだれがじゃまに来たのだろう。

きっとおとなりからまきをもらいに来たのだ。

わたしはそんなことに気を取られるどころではなかった。ちょうどそのときバルブレンのおっかあが、大きな木のさじをはちに入れて、衣（ころも）を一さじ、おなべの中にあけていたのだもの。

するとだれかつえでことことドアをたたいた。ばたんと戸が開け放された。

「どなただね」とおっかあはふり向きもしないでたずねた。

一人の男がぬっとはいって来た。明るい火の光で、わたしはその男が大きなつえを片（かた）わきについているの

を見つけた。

「やれやれ、祭りのごちそうか。まあ、やるがいい」

とその男はがさつな声で言った。

「おやおやまあ」とバルブレンのおっかあが、あわてて
さげなべを下に置(お)いてさけんだ。

「まあジェローム、おまえさんだったの」

そのときおっかあはわたしのうでを引(ひ)っ張(ぱ)って、戸口に立ちはだかったままでいた男の前へ連(つ)れて行った。

「おまえのとっつぁんだよ」

養父(ようふ)

おっかあはご亭主(ていしゅ)にだきついた。わたしもそのあとから同じことをしようとすると、かれはつえをつき出してわたしを止めた。

「なんだ、こいつは……おめえいまなんとか言ったっけな」

「ええ、そう、でも……ほんとうはそうではないけれど……そのわけは……」

「ふん、ほんとうなものか。ほんとうなものか」

かれはつえをふり上げたままわたしのほうへ向かっ

て来た。思わずわたしは後じさりをした。

なにをわたしがしたろう。なんの罪があるというのだ。わたしはただだきつこうとしたのだ。

わたしはおずおずかれの顔を見上げたが、かれはおっかあのほうをふり向いて話をしていた。

「じゃあ感心に謝肉祭のお祝いをするのだな、まあけっこうよ。おれは腹が減っているのだ。晩飯はなんのごちそうだ」とかれは言った。

「どら焼きとりんごの揚げ物をこしらえているところですよ」

「そうらしいて。だが何里も遠道をかけて来た者に、

まさかどら焼きでごめんをこうむるつもりではあるまい」
「ほかになんにもないんですよ。なにしろおまえさんが帰るとは思わなかったからね」
「なんだ、なんにもない。夕飯にはなにもないのか」
とかれは台所を見回した。
「バターがあるぞ」
かれは天井をあお向いて見た。いつも塩ぶたがかかっていたかぎが目にはいったが、そこにはもう長らくなんにもかかってはいなかった。ただねぎとにんにくが二、三本なわでしばってつるしてあるだけであっ

た。

「ねぎがある」とかれは言って、大きなつえでなわをたたき落とした。「ねぎが四、五本にバターが少しあれば、けっこうなスープができるだろう。どら焼（や）きなぞは下ろして、ねぎをなべでいためろ」

どら焼きをなべから出してしまえというのだ。

でも一言も言わずにバルブレンのおっかあはご亭主（ていしゅ）の言うとおりに、急いで仕事に取りかかった。ご亭主は炉（ろ）のすみのいすにこしをかけていた。

わたしはかれがつえの先で追い立てた場所から、そのまま動き得（え）なかった。食卓（しょくたく）に背中（なか）を向けたまま、

わたしはかれの顔を見た。
かれは五十ばかりの意地悪らしい顔つきをした、ごつごつした様子の男であった。その頭はけがをしたため、少し右の肩のほうへ曲がっていた。かたわになったので、よけいこの男の人相を悪くした。
バルブレンのおっかあはまたおなべを火の上にのせた。
「おめえ、それっぱかりのバターでスープをこしらえるつもりか」とかれは言いながら、バターのはいったさらをつかんで、それをみんなおなべの中へあけてしまった。もうバターはなくなった……それで、もうど

ら焼(や)きもなくなったのだ。

これがほかの場合だったら、こんな災難(さいなん)に会えば、どんなにくやしかったかしれない。だが、わたしはもうどら焼(や)きもりんごの揚(あ)げ物(もの)も思わなかった。わたしの心の中にいっぱいになっている考えは、こんなに意地の悪い男が、いったいどうしてわたしの父親だろうかということであった。

「ぼくのとっつぁん」――うっとりとわたしはこのことばを心の中でくり返した。

いったい父親というものはどんなものだろう、それをはっきりと考えたことはなかった。ただぼんやり、

それはつまり、母親の声の大きいのくらいに考えていた。ところが、いま天から降(ふ)って来たこの男を見ると、わたしはひじょうにいやだったし、こわらしかった（おそろしかった）。

　わたしがかれにだきつこうとすると、かれはつえでわたしをつきのけた。なぜだ。これがおっかあなら、だきつこうとする者をつきのけるようなことはしなかった。どうして、おっかあはいつだってわたしをしっかりとだきしめてくれた。

「これ、でくのぼうのようにそんな所につっ立っていないで、来て、さらでもならべろ」とかれは言った。

わたしはあわててそのとおりにしようとして、危なくたおれそこなった。スープはでき上がった。バルブレンのおっかあはそれをさらに入れた。

するとかれは炉ばたから立ち上がって、食卓の前にこしをかけて食べ始めた。合い間合い間には、じろじろわたしの顔を見るのであった。わたしはそれが気味が悪くって、食事がのどに通らなかった。わたしも横目でかれを見たが、向こうの目と出会うと、あわてて目をそらしてしまった。

「こいつはいつもこのくらいしか食わないのか」とかれはふいにこうたずねた。

「きっとおなかがいいんですよ」
「しょうがねえやつだなあ。こればかりしかはいらないようじゃあ」
バルブレンのおっかあは話をしたがらない様子であった。あちらこちらと働（はたら）き回って、ご亭主（ていしゅ）のお給仕（きゅうじ）ばかりしていた。
「てめえ、腹（はら）は減（へ）らねえのか」
「ええ」
「うん、じゃあすぐとこへはいってねろ。ねたらすぐねつけよ。早くしないとひどいぞ」
おっかあはわたしに、なにも言わずに言うとおりに

しろと目で知らせた。しかしこの警告（けいこく）を待つまでもなかった。わたしはひと言も口答えをしようとは思わなかった。

たいていのびんぼう人の家がそうであるように、わたしたちの家の台所も、やはり寝部屋（ねべや）をかねていた。炉（ろ）のそばには食事の道具が残（のこ）らずあった。食卓（しょくたく）もパンのはこもなべも食器（しょっき）だなもあった。そうして、部屋（へや）の向こうの角（かど）が寝部屋であった。一方の角にバルブレンのおっかあの大きな寝台（ねだい）があった。その向こうの角のくぼんだおし入れのような所にわたしの寝台があって、赤い模様（もよう）のカーテンがかかっていた。

わたしは急いでねまきに着かえて、ねどこにもぐりこんだ。けれど、とても目がくっつくものではなかった。わたしはひどくおどかされて、ひじょうにふゆかいであった。

どうしてこの男がわたしのとっつぁんだろう。ほんとうにそうだったら、なぜ人をこんなにひどくあつかうのだろう。

わたしは鼻をかべにつけたまま、こんなことを考えるのはきれいにやめて、言いつかったとおり、すぐねむろうと骨(ほね)を折(お)ったがだめだった。まるで目がさえてねつかれない。こんなに目のさえたことはなかった。

どのくらいたったかわからないが、しばらくしてだれかがわたしの寝台（ねだい）のそばに寄（よ）って来た。そろそろと引きずるような重苦しい足音で、それがおっかあでないということはすぐにわかった。

わたしはほおの上に温かい息を感じた。

「てめえ、もうねむったのか」とするどい声が言った。

わたしは返事をしないようにした。「ひどいぞ」と言ったおそろしいことばが、まだ耳の中でがんがん聞こえていた。

「ねむっているんですよ」とおっかあが言った。「あの子はとこにはいるとすぐに目がくっつくのだから、

だいじょうぶなにを言っても聞こえやしませんよ」

わたしはむろん、「いいえ、ねむっていません」と言わねばならないはずであったが、言えなかった。わたしはねむれと言いつけられた。それをまだねむらずにいた。わたしが悪かった。

「それでおまえさん、裁判のほうはどうなったの」とおっかあが言った。

「だめよ。裁判所ではおれが足場の下にいたのが悪いと言うのだ」そう言ってかれはこぶしで食卓をごつんと打って、なんだかわけのわからないことを言って、しきりにののしっていた。

「裁判(さいばん)には負けるし、金はなくなるし、かたわにはなるし、びんぼうがじろじろ面(つら)をねめつけて（にらみつけて）いる。それだけでもまだ足りねえつもりか、うちへ帰って来ればがきがいる。なぜおれが言ったとおりにしなかったのだ」

「でもできなかったもの」

「孤児院(こじいん)へ連(つ)れて行くことができなかったのか」

「だってあんな小さな子を捨(す)てることはできないよ。自分の乳(ちち)で育ててかわいくなっているのだもの」

「あいつはてめえの子じゃあねえのだ」

「そうさ。わたしもおまえさんの言うとおりにしよう

と思ったのだけれど、ちょうどそのとき、あの子が加減(かげん)が悪くなったので」

「加減が悪く」

「ああ、だからどうにもあすこへ連(つ)れては行けなかったのだよ。死んだかもしれないからねえ」

「だがよくなってから、どうした」

「ええ、すぐにはよくならなかったしね、やっといいと思うと、また病気になったりしたものだから。かわいそうにそれはひどくせきをして、聞いていられないようだった。うちのニコラぼうもそんなふうにして死んだのだからねえ。わたしがこの子を孤児院(こじいん)に送れば

やっぱり死んだかもしれないよ」
「だが……あとでは」
「ああ、だんだんそのうちに時がたって、延（の）び延びになってしまったのだよ」
「いったいいくつになったのだ」
「八つさ」
「うん、そうか。じゃあ、これからでもいいや。どうせもっと早く行くはずだったのだ。だが、いまじゃあ行くのもいやがるだろう」
「まあ、ジェローム、おまえさん、いけない……そんなことはしないでおくれ」

「いけない、なにがいけないのだ。いつまでもああしてうちに置けると思うか」

しばらく二人ともだまり返った。わたしは息もできなかった。のどの中にかたまりができたようであった。

しばらくして・バルブレンのおっかあが言った。

「まあ、パリへ出て、おまえさんもずいぶん人が変わったねえ。おまえさん、行くまえにはそんなことは言わない人だったがねえ」

「そうだったかもしれない。だが、パリへ行っておれの人が変わったかしれないが、そこはおれを半殺しにもした。おれはもう働くことはできない。もう金は

ない。牛は売ってしまった。おれたちの口をぬらすことさえおぼつかないのに、おたがいの子でもないがきを養（やしな）うことができるか」
「あの子はわたしの子だよ」
「あいつはおれの子でもないが、きさまの子でもないぞ。それにぜんたい百姓（ひゃくしょう）の子どもじゃあない。びんぼう人の子どもじゃあない。きゃしゃすぎて物もろくに食えないし、手足もあれじゃあ働（はたら）けない」
「あの子は村でいちばん器量（きりょう）よしの子どもだよ」
「器量がよくないとは言いやしない。だがじょうぶな子ではないと言うのだ。あんなひょろひょろした肩（かた）を

したこぞうが労働者になれると思うか。ありゃあ町の子どもだ。町の子どもを置く席はないのだ」

「いいえ、あの子はいい子ですよ。りこうで、物がわかって、それで優しいのだから、あの子はわたしたちのために働いてくれますよ」

「だが、さし当たりは、おれたちがあいつのために働いてやらなければならない。それはまっぴらだ」

「もしかあの子のふた親が引き取りに来たらどうします」

「あいつのふた親だと。いったいあいつにはふた親があったのか。あればいままでに訪ねて来そうなものだ。

あいつのふた親が訪ねて来て、これまでの養育料（よういくりょう）をはらって行くなどと考えたのが、ずいぶんばかげきっていた。気ちがいじみていた。あの子がレースのへりつきのやわらかい産着（うぶき）を着ていたからといって、ふた親があいつを訪ねに来ると思うことができるか。それに、もう死んでいるのだ。きっと」

「いいや、そんなことはない。いつか訪（たず）ねて来るかもしれない……」

「女というやつはなかなか強情（ごうじょう）なものだなあ」

「でも訪ねて来たら」

「ふん、そうなりゃ孤児院（こじいん）へ差（さ）し向けてやる。だがも

う話はたくさんだ。おれはあしたは村長さんの所へあいつを連れて行って相談する。今夜はこれからフランスアの所へ行って来る。一時間ばかりしたら帰って来るからな」

そのあいだにわたしはさっそく寝台の上で起き上がって、おっかあを呼んだ。

「ねえ、おっかあ」

かの女はわたしの寝台のほうへかけてやって来た。

「ぼくを孤児院へやるの」

「いいえ、ルミぼう、そんなことはないよ」

かの女はわたしにキッスをして、しっかりとうでに

だきしめた。そうするとわたしもうれしくなって、ほおの上のなみだがかわいた。

「じゃあおまえ、ねむってはいなかったのだね」とかの女は優（やさ）しくたずねた。

「ぼく、わざとしたんじゃないから」

「わたしは、おまえをしかっているのではない。じゃあ、あの人の言ったことを聞いたろうねえ」

「ええ、あなたはぼくのおっかあではないんだって……そしてあの人もぼくのとっつぁんではないんだって」

このあとのことばを、わたしは同じ調子では言わな

かった。なぜというと、この婦人（ふじん）がわたしの母親でないことを知ったのは情（なさ）けなかったが、同時にあの男が父親でないことがわかったのは、なんだか得意（とくい）でうれしかった。このわたしの心の中の矛盾（むじゅん）はおのずと声に現（あらわ）れたが、おっかあはそれに気がつかないらしかった。

「まあわたしはおまえにほんとうのことを言わなければならないはずであったけれど、おまえがあまりわたしの子どもになりすぎたものだから、ついほんとうの母親でないとは言いだしにくかったのだよ。おまえ、ジェロームの言ったことをお聞きだったろう。あの人がおまえをある日パリのブルチュイー町の並木通（なみきどお）りで

拾って来たのだよ。二月の朝早くのことで、あの人が仕事に出かけようとするとちゅうで、赤んぼうの泣(な)き声(ごえ)を聞いて、おまえをある庭の門口(かどぐち)で拾って来たのだ。あの人はだれか人を呼(よ)ぼうと思って見回しながら、声をかけると、一人の男が木のかげから出て来て、あわててにげ出したそうだよ。おまえ［＃「おまえ」は底本では「おえ」］を捨(す)てた男が、だれか拾うか見届(みとど)けていたとみえる。おまえがそのとき、だれか拾ってくれる人が来たと感じたものか、あんまりひどく泣(な)くものだから、ジェロームもそのまま捨てても帰れなかった。それでどうしようかとあの人も困(こま)っていると、ほかの

職人たちも寄って来て、みんなはおまえを警察へ届けることに相談を決めた。おまえはいつまでも泣きやまなかった。かわいそうに寒かったにちがいない。けれど、それから警察へ連れて行って、暖かくしてあげてもまだ泣いていた。それで今度はおなかが減っているのだろうというので、近所のおかみさんをたのんで乳を飲ました。まあ、まったくおなかが減っていたのだよ。

やっとおなかがいっぱいになると、みんなは炉の前へ連れて行って、着物をぬがしてみると、なにしろきれいなうすもも色をした子どもで、りっぱな産着にく

るまっていた。警部（けいぶ）さんは、こりゃありっぱなうちの子をぬすんで捨（す）てたものだと言って、その着物の細かいこと、子どもの様子などをいちいち書き留（と）めて、いつどういうふうにして拾い上げたかということまで書き入れた。それでだれか世話をする者がなければ、さしずめ孤児院（こじいん）へやらなければなるまいが、こんなりっぱなしっかりした子どもだ、これを育てるのはむずかしくはない。両親もそのうちきっと探（さが）しに来るだろう。探し当てればじゅうぶんのお礼もするだろうから、と署長（しょちょう）さんがお言いなすった。このことばにひかれて、ジェロームはわたしが引き取りましょうと言ったのだ

よ。ちょうどそのじぶん、わたしは同い年の赤んぼうを持っていたから、二人の子どもを楽に育てることができた。ねえ、そういうわけで、わたしがおまえのおっかあになったのだよ」

「まあ、おっかあ」

「ああ、ああ、それで三月(みつき)目の末(すえ)にわたしは自分の子どもを亡(な)くした。そこでわたしはいよいよおまえがかわいくなって、もう他人の子だなんという気がしなくなりました。でもジェロームは相変(あいか)わらずそれを忘(わす)れないでいて、三年目の末になっても、両親が引き取りに来ないというので、もうおまえを孤児院(こじいん)へやると

言って聞かないので困（こま）ったよ。だからなぜわたしがあの人の言うとおりにしなかった、と言われていたのをお聞きだったろう」

「まあ、ぼくを孤児院（こじいん）へなんかやらないでください」

とわたしはさけんで、かの女にかじりついた。

「どうぞどうぞおっかあ、後生（ごしょう）だから孤児院へやらないでください」

「いいえ、おまえ、どうしてやるものか、わたしがよくするからね。ジェロームはそんなにいけない人ではないのだよ。あの人はあんまり苦労（くろう）をたくさんして、気むずかしくなっているだけなのだからね。まあ、わ

たしたちはせっせと働(はたら)きましょう。おまえも働くのだよ」

「ええ、ええ、ぼくはしろということはなんでもきっとしますから、孤児院(こいじん)へだけはやらないでください」

「おお、おお、それはやりはしないから、その代わりすぐねむると言ってやくそくをおし。あの人が帰って来て、おまえの起きているところを見るといけないからね」

おっかあはわたしにキッスして、かべのほうへわたしの顔を向けた。

わたしはねむろうと思ったけれども、あんまりひど

く感動させられたので、静（しず）かにねむりの国にはいることができなかった。
　じゃあ、あれほど優（やさ）しいバルブレンのおっかあは、わたしのほんとうの母さんではなかったのか。するといったいほんとうの母さんはだれだろう。いまの母さんよりもっと優しい人かしら。どうしてそんなはずがありそうもない。
　だがほんとうの父さんなら、あのバルブレンのように、こわい目でにらみつけたり、わたしにつえをふり上げたりしやしないだろうと思った……。
　あの男はわたしを孤児院（こじいん）へやろうとしている。母さ

んにはほんとうにそれを引き止める力があるだろうか。

この村に二人、孤児院から来た子どもがあった。この子たちは、『孤児院の子』と呼ばれていた。首の回りに番号のはいった鉛の札をぶら下げていた。ひどいみなりをして、よごれくさっていた。ほかの子たちがみんなでからかって、石をぶつけたり、迷い犬を追って遊ぶように追い回したりした。迷い犬にだれも加勢する者がないのだ。

ああ、わたしはそういう子どものようになりたくない。首の回りに番号札を下げられたくない。わたしの歩いて行くあとから、『やいやい孤児院のがき、やいや

い捨(す)て子(ご)』と言ってののしられたくない。

それを考えただけでも、ぞっと寒気(さむけ)がして、歯ががたがた鳴りだす。わたしはねむることができなかった。

やがてバルブレンも、また帰って来るだろう。

でも幸せと、ずっとおそくまでかれは帰って来なかった。そのうちにわたしもとろろとねむ気(け)がさして来た。

ヴィタリス親方の一座(いちざ)

その晩一晩、きっと孤児院へ連れて行かれたゆめばかりを見ていたにちがいない。朝早く目を開いても、自分がいつもの寝台にねているような気がしなかった。わたしは目が覚めるとさっそく寝台にさわったり、そこらを見回したり、いろいろ試してみた。ああ、そうだ、わたしはやはりバルブレンのおっかあのうちにいた。

　バルブレンはその朝じゅう、なにもわたしに言わなかった。わたしはかれがもう孤児院へやる考えを捨てたのだと思うようになった。きっとバルブレンのおっかあが、あくまでわたしをうちに置くことに決めたの

であろう。

けれどもお昼ごろになると、バルブレンがわたしに、ぼうしをかぶってついて来いと言った。

わたしは目つきで母さんに救いを求めてみた。かの女もご亭主に気がつかないようにして、いっしょに行けと目くばせした。わたしは従った。かの女は行きがけにわたしの肩をたたいて、なにも心配することはないからと知らせた。

なにも言わずにわたしはかれについて行った。

うちから村まではちょっと一時間の道であった。そのとちゅう、バルブレンはひと言もわたしに口をきか

なかった。かれはびっこ引き引き歩いて行った。おりふしふり返って、わたしがついて来るかどうか見ようとした。

どこへいったいわたしを連(つ)れて行くつもりであろう。わたしは心の中でたびたびこの疑問(ぎもん)をくり返してみた。バルブレンのおっかあがいくらだいじょうぶだと目くばせして見せてくれても、わたしにはなにか一大事が起こりそうな気がしてならないので、どうしてにげ出そうかと考えた。

わたしはわざとのろのろ歩いて、バルブレンにつかまらないようにはなれていて、いざとなればほりの中

にでもとびこもうと思った。

はじめはかれも、あとからわたしがとことこついて来るので、安心していたらしかった。けれどもまもなく、かれはわたしの心の中を見破（みやぶ）ったらしく、いきなりわたしのうで首をとらえた。

わたしはいやでもいっしょにくっついて歩かなければならなかった。

そんなふうにして、わたしたちは村にはいった。すれちがう人がみんなふり返って目を丸（まる）くした。それはまるで、山犬がつなで引かれて行くていさいであった。

わたしたちが村の居酒屋（いざかや）の前を通ると、入口に立っ

ていた男がバルブレンに声をかけて、中にはいれと言った。バルブレンはわたしの耳を引っ張って、先にわたしを中へつっこんでおいて、自分もあとからはいって、ドアをぴしゃりと立てた。

わたしはほっとした。

そこは危険な場所とは思われなかった。それに先からわたしは、この中がいったいどんな様子になっているのだろうと思っていた。

旅館御料理カフェー・ノートルダーム。中はどんなにきれいだろう。よく赤い顔をした人がよろよろ中から出て来るのをわたしは見た。表のガラス戸は歌を歌

う声や話し声で、いつもがたがたふるえていた。この赤いカーテンの後ろにはどんなものがあるのだろうと、いつもふしぎに思っていた。それをいま見ようというのである……

バルブレンはいま声をかけた亭主（ていしゅ）と、食卓（しょくたく）に向かい合ってこしをかけた。わたしは炉（ろ）ばたにこしをかけてそこらを見回した。

わたしのいたすぐ向こうのすみには、白いひげを長く生やした背（せい）の高い老人（ろうじん）がいた。かれはきみょうな着物を着ていた。わたしはまだこんな様子の人を見たことがなかった。

長い髪（かみ）の毛（け）をふっさりと肩（かた）まで垂（た）らして、緑と赤の羽根（はね）でかざったねずみ色の高いフェルト帽（ぼう）をかぶっていた。ひつじの毛皮の毛のほうを中に返して、すっかりからだに着こんでいた。その毛皮服にはそではなかったが、肩（かた）の所に二つ大きな穴（あな）をあけて、そこから、もとは緑色だったはずのビロードのそでをぬっと出していた。ひつじの毛のゲートルをひざまでつけて、それをおさえるために、赤いリボンをぐるぐる足に巻きつけていた。

　かれは長ながといすの上に横になって、下あごを左の手に支（ささ）えて、そのひじを曲げたひざの上にのせてい

た。

わたしは生きた人で、こんな静かな落ち着いた様子の人を見たことがなかった。まるで村のお寺の聖徒の像のようであった。

老人の回りには三びきの犬が、固まってねていた。白いちぢれ毛のむく犬と、黒い毛深いむく犬、それにおとなしそうなくりくりした様子の灰色の雌犬が一ぴき。白いむく犬は巡査のかぶる古いかぶと帽をかぶって、皮のひもをあごの下に結えつけていた。

わたしがふしぎそうな顔をしてこの老人を見つめているあいだに、バルブレンと居酒屋の亭主は低い声で

ここそこ話をしていた。わたしのことを話しているのだということがわかった。

バルブレンはわたしをこれから村長のうちへ連れて行って、村長から孤児院に向かって、わたしをうちへ置く代わりに養育料が請求してもらうつもりだと言った。

これだけを、やっとあの気のどくなバルブレンのおっかあが夫に説いて承諾させたのであった。けれどわたしは、そうしてバルブレンがいくらかでも金がもらえれば、もうなにも心配することはないと思っていた。

その老人（ろうじん）はいつかすっかりわきで聞いていたとみえて、いきなりわたしのほうに指さしして、耳立つほどの外国なまりでバルブレンに話しかけた。

「その子どもがおまえさんのやっかい者なのかね」

「そうだよ」

「それでおまえさんは孤児院（こじいん）が 養育料（よういくりょう） をしはらうと思っているのかね」

「そうとも。この子は両親がなくって、そのためにおれはずいぶん金を使わされた。お上（かみ）からいくらでもはらってもらうのは当たり前だ」

「それはそうでないとは言わない。だが、物は正しい

からといってきっとそれが通るものとはかぎらない」

「それはそうさ」

「それそのとおり。だからおまえさんが望んでおいでのものも、すらすらと手にはいろうとはわたしには思えないのだ」

「じゃあ孤児院へやってしまうだけだ。こちらで養いたくないものを、なんでも養えという法律はないのだ」

「でもおまえさんははじめにあの子を養いますといって引き受けたのだから、そのやくそくは守らなければならない」

「ふん、おれはこの子を養いたくないのだ。だからどのみちどこへでもやっかいばらいをするつもりでいる」

「さあ、そこで話だが、やっかいばらいをするにも、手近なしかたがあると思う」老人はしばらく考えて、「おまけに少しは金にもなるしかたがある」と言った。

「そのしかたを教えてくれれば、おれは一ぱい買うよ」

「じゃあさっそく一ぱい買うさ。もう相談は決まったから」

「だいじょうぶかえ」

「だいじょうぶよ」

老人は立ち上がって、バルブレンの向こうに席をしめた。ふしぎなことには、老人が立ち上がると、ひつじの毛皮服がむずむず動いて、むっくり高くなった。たぶん、もう一ぴき犬をうでの下にかかえているのだとわたしは思った。

この人たちは、いったいわたしをどうしようというのだろう。わたしの心臓がまたはげしく打ち始めた。わたしはちっとも老人から目をはなすことができなかった。

「おまえさんはこの子のためにだれか金を出さない以上、自分のうちに置いて養っていることはいやだ

という、それにちがいないのだろう」

「それはそのとおりだ……そのわけは……」

「いや、わけはどうでもよろしい。それはわたしにかかわったことではない。それでもうこの子が要らないというのなら、すぐわたしにください。わたしが引き受けようじゃないか」

「おや、おまえさんはこの子を引き受けると言うのかね」

「だっておまえさんはこの子をほうり出したいんだろう」

「おまえさんにこんなきれいな子をやるのかえ。この

子は村でもいちばんかわいい子だ。よく見てくれ」
「よく見ているよ」
「ルミ、ここへ来い」
わたしは食卓（しょくたく）に進み寄（よ）った。ひざはふるえていた。
「これこれぼうや、こわがることはないよ」と老人（ろうじん）は言った。
「さあ、よく見てくれ」とバルブレンは言った。
「わたしはこの子をいやな子だとは言いやしない。またそれならば欲（ほ）しいとも言わない。こっちは化け物は欲しくはないのだ」
「いやはや、こいつがいっそ二つ頭の化け物か、また

は一寸法師（いっすんぼうし）ででもあったなら……」

「だいじにして孤児院（こじいん）にやりはしないだろう。香具師（やし）に売っても見世物に出しても、その化け物のおかげでお金もうけができようさ。だが子どもは一寸法師でもなければ、化け物でもない。だから見世物にすることはできない。この子はほかの子どもと同じようにできている。なんの役にも立たない」

「仕事はできるよ」

「いや、あまりじょうぶではないからなあ」

「じょうぶでないと、とんでもない話だ。……だれにだって負けはしないのだ。あの足を見なさい。あのと

おりしっかりしている。あれよりすらりとした足を見たことがあるかい……」
バルブレンはわたしのズボンをまくり上げた。
「やせすぎている」と老人は言った。
「それからうでを見ろ」とバルブレンは続けた。
「うでも同様だ。――まあこれでもいいが、苦しいことや、つらいことにはたえられそうもない」
「なに、たえられない。ふん、手でさわって調べてみるがいい」
老人はやせこけた手で、わたしの足にさわってみながら、頭をふったり、顔をしかめたりした。

このまえ、ばくろうが来たときも、こんなふうであったことを、わたしは見て知っていた。その男もやはり牛のからだを手でさわったりつねったりしてみて、頭をふった。この牛はろくでもない牛だ、とても売り物にはならない、などと言ったが、でも牛を買って連れて行った。

この老人もたぶんわたしを買って連れて行くだろう。ああバルブレンのおっかあ。バルブレンのおっかあ。

不幸にもここにはおっかあはいなかった。だれもわたしの味方になってくれる者がなかった。

わたしが思い切った子なら、なあにきのうはバルブ

レンも、わたしを弱い子で、手足がか細くて役に立たぬと非難（ひなん）したのではないかと言ってやるところであった。でもそんなことを言ったら、どなりつけられて、げんこをいただくに決まっているから、わたしはなにも言わなかった。

「まあつまり当たり前の子どもさね。それはそうだが、やはり町の子だよ。百姓（ひゃくしょう）仕事にはたしかに向いてはいないようだ。試（ため）しに畑をやらしてごらん、どれほど続（つづ）くかさ」

「十年は続くよ」

「なあにひと月も続（つづ）くものか」

「まあ、このとおりだ。よく見てくれ」

わたしは食卓のはしの、ちょうどバルブレンと老人の間にすわっていたものだから、あっちへつかれ、こっちへおされて、いいようにこづき回された。

「さあ、まずこれだけの子どもとして」と老人は最後に言った。「つまりわたしが引き受けることにしよう。もちろん買い切るのではない、ただ借りるのだ。その借り賃に年に二十フラン出すことにしよう」

「たった二十フラン」

「どうして高すぎると思うよ。それも前ばらいにするからね。ほんとうの金貨を四枚にぎったうえに、やっ

かいばらいができるのだからね」と老人は言った。

「だがこの子をうちに置けば、孤児院から毎月十フランずつくれるからな」

「まあくれてもせいぜい七フランか十フランだね。それはよくわかっているよ。だがその代わり食べさせなければならないからね」

「その代わり働きもするさ」

「おまえさんがほんとにこの子が働けると思うなら、なにも追い出したがることはないだろう。ぜんたい捨て子を引き取るというのは、その養育料をはらってもらうためではない、働かせるためなのだ。それか

ら金を取り上げこそすれ、給金なしの下男下女に使うのだ。だからそれだけの役に立つものなら、おまえさんはこの子をうちに置くところなのだ」

「とにかく、毎月十フランはもらえるのだから」

「だが孤児院で、いや、そんならこの子はおまえさんには預けない、ほかへ預けると言ったらどうします。つまりなんにもおまえさんは取れないではないか。わたしのほうにすればそこは確かだ。おまえさんの苦労はただ金を受け取るために、手を出しさえすればいいのだ」

老人はかくしを探って、なめし皮の財布を引き出し

た。その中から四枚、金貨をつかみ出して、食卓の上にならべ、わざとらしくチャラチャラ音をさせた。

「だが待てよ」とバルブレンが言った。「いつかこの子のふた親が出てくるかもしれない」

「それはかまわないじゃないか」

「いや、育てた者の身になればなにもかまわなくはないさ。またそれを思わなければ、初めっからだれが世話をするものか」

「それを思わなければ初めっからだれが世話をするものか」――このことばで、わたしはいよいよバルブレンがきらいになった。なんという悪い人間だろう。

「なるほど、だがこの子のふた親がもう出て来ないだろうとあきらめたからこそ、おまえさんもこの子をほうり出そうと言うのだろう。ところで、どうかしたひょうしでこののちそのふた親が出て来たとして、それはおまえさんの所へこそまっすぐに行こうが、わたしの所へは来ないだろう。だれもわたしを知らないのだから」と老人（ろうじん）は言った。

「でもおまえさんがそのふた親を見つけ出したらどうする」

「なるほどそういう場合には、わたしたちで利益（りえき）を分けるのだね。ところで、ひとつ、きばってさしあたり

三十フラン分けてあげようよ」
「四十フランにしてもらおう」
「いいや、この子の使い道はそこいらが相応な値段だ」
「おまえさん、この子をなんに使おうというのだ。足といえばこのとおりしっかりしたいい足をしているし、うでといえばこのとおりりっぱないいうでをしている。いま言ったことをどこまでもくり返して言うが、この子をいったいどうしようというのだ」
　そのとき老人はあざけるようにバルブレンの顔を見て、それからちびちびコップを干した。
「つまりわたしの相手になってもらうのだ。わたしは

年を取ってきたし、夜なんぞはまことにさびしくなった。くたびれたときなんぞ、子どもがそばにいてくれるといいおとぎになるのだ」

「なるほど、それにはこの子の足はじゅうぶんたっしゃだから」

「おお、それだけではだめだ。この子はまたおどりをおどって、はね回って、遠い道を歩かなければならない。つまりこの子はヴィタリス親方の一座（いちざ）の役者になるのだ」

「その一座はどこにある」

「もうご推察（すいさつ）あろうが、そのヴィタリス親方はわたし

だ。さっそくここで一座をお目にかけよう」

　こう言ってかれはひつじの毛皮服のふところを開けて、左のうでにおさえていたきみょうな動物を引き出した。それが、さっきからたびたび毛皮を下から持ち上げた動物であったのだ。だがそれは想像（そうぞう）したように、犬ではなかった。

　わたしはこのきみょうな動物を生まれて初（はじ）めて見たとき、なんと名のつけようもなかった。

　わたしはびっくりしてながめていた。

　それは金筋（きんすじ）をぬいつけた赤い服を着ていたが、うでと足はむき出しのままであった。実際（じっさい）それは人間と同

じうでと足で、前足ではなかった。黒い毛むくじゃらの皮をかぶっていて、白くももも色でもなかった。にぎりこぶしぐらいの大きさの黒い頭をして、縦(たて)につまった顔をしていた。横へ向いた鼻の穴(あな)が開いていて、くちびるが黄色かった。けれどもとりわけわたしをおどろかしたのは、くちゃくちゃとくっついている二つの目で、それは鏡(かがみ)のようにぴかぴかと光った。

「いやあ、みっともないさるだな」とバルブレンがさけんだ。

ああ、さるか。わたしはいよいよ大きな目を開いた。それではこれがさるであったのか。わたしはまださる

を見たことはなかったが、話には聞いていた。じゃあこの子どものようなちっぽけな動物が、さるだったのか。

「さあ、これが一座の花形で」とヴィタリス親方が言った。「すなわちジョリクール君であります。さあさあジョリクール君」と動物のほうを向いて、「お客さまにおじぎをしないか」

　さるは指をくちびるに当てて、わたしたちに一人一人キッスをあたえるまねをした。

「さて」とヴィタリスはことばを続けて、白のむく犬のほうに手をさしのべた。「つぎはカピ親方が、ご

臨席(りんせき)の貴賓諸君(きひんしょくん)に一座(いちざ)のものをご紹介(しょうかい)申しあげる光栄(こうえい)を有せられるでしょう」

このまぎわまでぴくりとも動かなかった白のむく犬が、さっそくとび上がって、後足で立ちながら、前足を胸(むね)の上で十文字に組んで、まず主人に向かっててい ねいにおじきをすると、かぶっている巡査(じゅんさ)のかぶと帽(ぼう)が地べたについた。

敬礼(けいれい)がすむとかれは仲間(なかま)のほうを向いて、かたっぽの前足でやはり胸をおさえながら、片足(かたあし)をさしのべて、みんなそばに寄(よ)るように合図をした。

白犬のすることをじっと見つめていた二ひきの犬は、

すぐに立ち上がって、おたがいに前足を取り合って、交際社会（社交界）の人たちがするように厳かに六歩前へ進み、また三足あとへもどって、代わりばんこにご臨席の貴賓諸君に向かっておじぎをした。

そのときヴィタリス親方が言った。

「この犬の名をカピと言うのは、イタリア語のカピターノをつめたので、犬の中の頭ということです。いちばんかしこくって、わたしの命令を代わってほかのものに伝えます。その黒いむく毛の若いハイカラさんは、ゼルビノ侯ですが、これは優美という意味で、よく様子をご覧なさい、いかにもその名前のとおりだ。

さてあのおしとやかなふうをした歌い雌犬はドルス夫人です。あの子はイギリス種で、名前はあの子の優しい気だてにちなんだものだ。こういうりっぱな芸人ぞろいで、わたしは国じゅうを流して回ってくらしを立てている。いいこともあれば悪いこともある、まあ何事もそのときどきの回り合わせさ。おおカピ……」

カピと呼ばれた犬は前足を十文字に組んだ。

「カピ、あなた、ここへ来て、ぎょうぎのいいところをお目にかけてください。わたしはこの貴人たちにいつもていねいなことばを使っています――さあ、この玉のような丸い目をしてあなたを見てござる小さいお

子さんに、いまは何時だか教えてあげてください」

カピは前足をほどいて、主人のそばへ行って、ひつじの毛皮服のふところを開け、そのかくしを探って大きな銀時計を取り出した。かれはしばらく時計をながめて、それから二声しっかり高く、ワンワンとほえた。それから、今度は三つ小声でちょいとほえた。時間は二時四十五分であった。

「はいはい、よくできました」とヴィタリスは言った。「ありがとうございます、カピさん。それで今度は、ドルス夫人になわとびおどりをお願いしてもらいましょうか」

カピはまた主人のかくしを探(さぐ)って一本のつなを出し、軽くゼルビノに合図をすると、ゼルビノはすぐにかれの真向(まむ)かいに座(ざ)をしめた。カピがなわのはしをほうってやると、二ひきの犬はひどくまじめくさって、それを回し始めた。

つなの運動が規則(きそく)正しくなったとき、ドルスは輪(わ)の中にとびこんで、優(やさ)しい目で主人を見ながら軽快(けいかい)にとんだ。

「このとおりずいぶんりこうです」と老人(ろうじん)は言った。

「それも比(くら)べるものができるとなおさらりこうが目立って見える。たとえばここにあれらと仲間(なかま)になって、

ばかの役を務(つと)める者があれば、いっそうそれらの値打(ねう)ちがわかるのだ。そこでわたしはおまえさんのこの子どもが欲(ほ)しいというのだ。あの子にばかの役を務めてもらって、いよいよ犬たちのりこうを目立たせるようにするのだ」

「へえ、この子がばかを務(つと)めるのかね」とバルブレンが口を入れた。

老人(ろうじん)は言った。「ばかの役を務めるには、それだけりこうな人間が入りようなのだ。この子なら少ししこめばやってのけよう。さっそく試(ため)してみることにします。この子がじゅうぶんりこうな子なら、わたしと

いっしょにいればこの国ばかりか、ほかの国ぐにまで見て歩けることがわかるはずだ。だがこのままこの村にいたのでは、せいぜい朝から晩まで同じ牧場で牛やひつじの番人をするだけだ。この子がわからない子だったら、泣いてじだんだをふむだろう。そうすればわたしは連れては行かない。それで孤児院に送られて、ひどく働かされて、ろくろく食べる物も食べられないだろう」

わたしも、そのくらいのことがわかるだけにはかしこかった。それにこの親方のお弟子たちはとぼけていてなかなかおもしろい。あれらといっしょに旅をする

のは、ゆかいだろう。だがバルブレンのおっかあは……おっかあに別れるのはつらいなあ……

でもそれをいやだと言ってみたところで、バルブレンのおっかあとこの先いることはできない。やはり孤児院に送られなければならない。

わたしはほんとに情けなくなって、目にいっぱいなみだをうかべていた。するとヴィタリス老人が軽くなみだの流れ出したほおをつついた。

「ははあおこぞうさん、大さわぎをやらないのはわけがわかっているのだな。小さい胸で思案をしているのだな。それであしたは……」

「ああ、おじさん、どうぞぼくをおっかあの所へ置(お)いてください。どうぞ置いてください」とわたしはさけんだ。

カピが大きな声でほえたので、じゃまされてわたしはそれから先が言えなかった。そのとたん犬はジョリクールのすわっていた食卓(しょくたく)のほうへとび上がった。例(れい)のさるはみんながわたしのことで気を取られているすきをねらって、す早く酒をいっぱいついである主人のコップをつかんで、飲み干(ほ)そうとしたのだ。けれどもカピは目早くそれを見つけて止めたのであった。

「ジョリクールさん」とヴィタリスが厳(きび)しい声で言っ

た。「あなたは食いしんぼうのうえにどろぼうです。あそこのすみに行ってかべのほうを向いていなさい。ゼルビノさん、あなたは番をしておいでなさい。動いたらぶっておやり。さてカピさん、あなたはいい犬です。前足をお出しなさい。握手をしましょう」

　さるは息づまったような鳴き声を出して、すごすごすみのほうへ行った。幸せな犬は得意な顔をして前足を主人に出した。

「さて」と老人はことばをついで、「先刻の話にもどりましょう。ではこの子に三十フラン出すことにしよう」

「いや、四十フランだ」
そこでおし問答が始まった。だが老人（ろうじん）はまもなくやめて、「子どもにはおもしろくない話です。外へ出て遊ばせてやるがよろしい」と言った。そうしてバルブレンに目くばせをした。
「よし、じゃあ裏（うら）へ行っていろ。だがにげるな。にげるとひどい目に会わせるから」
バルブレンがこう言うと、わたしはそのとおりにするほかはなかった。それで裏庭へ出るには出たが、遊ぶ気にはなれない。大きな石にこしをかけて考えこんでいた。

あの人たちはわたしのことを相談している。どうするつもりだろう。

心配なのと寒いのとでわたしはふるえていた。二人は長いあいだ話していた。わたしはすわって待っていたが、かれこれ一時間もたってバルブレンが裏へ出て来た。

かれは一人であった。あのじいさんにわたしを手わたすつもりで連れて来たのだな。

「さあ帰るのだ」とかれは言った。

なに、うちへ帰る。――そうするとバルブレンのおっかあに別れないでもすむのかな。

わたしはそう言ってたずねたかったけれども、かれがひどくきげんが悪そうなのでえんりょした。
それで……だまってうちのほうへ歩いた。
けれどもうちまで行き着くまえに、先に立って歩いていたバルブレンはふいに立ち止まった。そうして乱暴（らんぼう）にわたしの耳をつかみながらこう言った。
「いいかきさま、ひと言でもきょう聞いたことをしゃべったらひどい目に会わせるから。わかったか」

おっかあの家

「おや」とバルブレンのおっかあはわたしたちを見て言った。「村長さんはなんと言いましたえ」

「会わなかったよ」

「どうして会わなかったのさ」

「うん、おれはノートルダームで友だちに会った。外へ出るともうおそくなった。だからあしたまた行くことにした」

それではバルブレンは犬を連れたじいさんと取り引きをすることはやめたとみえる。

うちへ帰える道みちもわたしはこれがこの男の手で

はないかと疑(うたが)っていたが、いまのことばでその疑(うたが)いは消えて、ひとまず心が落ち着いた。またあした村へ行って村長さんを訪(たず)ねるというのでは、きっとじいさんとのやくそくはできなかったにちがいない。

　バルブレンにはいくらおどかされても、わたしは一人にさえなったら、おっかあにきょうの話をしようと思っていたが、とうとうバルブレンはその晩(ばん)一晩じゅううちをはなれないので話す機会(きかい)がなかった。

　すごすごねどこにもぐりながら、あしたは話してみようと思っていた。

　けれどそのあくる日起き上がると、おっかあの姿(すがた)

が見えない。わたしがそのあとを追ってうちじゅうをくるくる回っているのを見て、なにをしているとバルブレンは聞いた。

「おっかあ」

「ああ、それなら村へ行った。昼過ぎでなければ帰るものか」

おっかあはまえの晩、村へ行く話はしなかった。それでなぜというわけはないが、わたしは心配になってきた。わたしたちが昼過ぎから出かけるというのに、どうして待っていないのだろう。わたしたちの出かけるまえにおっかあは帰って来るかしらん。

なぜというしっかりしたわけはないのだが、わたしはたいへんおどおどしだした。

バルブレンの顔を見るとよけいに心配が積（つ）もるばかりであった。その目つきからにげるためにわたしは裏（うら）の野菜畑（やさいばたけ）へかけこんだ。

畑といってもたいしたものではなかった。それへなんでもうちで食べる野菜物（やさいもの）は残（のこ）らずじゃがいもでもキャベツでも、にんじんでも、かぶでも作りこんであった。それはちょっとの空き地もなかったのであるが、それでもおっかあはわたしに少し地面を残（のこ）しておいてくれたので、わたしはそこへ雌牛（めうし）を飼（か）いながら野でつ

んで来た草や花を、ごたごた植えこんだ。わたしはそれを『わたしの畑』と呼(よ)んでだいじにしていた。

　わたしがいろいろな草花を集めては、植えつけたのは去年の夏のことであった。それが芽(め)をふくのはこの春のことであろう。早ざきのものでも冬の終わるのを待たなければならなかった。これから続(つづ)いておおい芽を出しかけている。

　もう黄ずいせんもつぼみを黄色くふくらましていたし、リラの花も芽を出していた。さくらそうもしわだらけな葉の中からかわいいつぼみをのぞかせている。

　どんな花がさくだろう。

それを楽しみにして、わたしは毎日出てみた。

それからまたわたしのだいじにしていた畑の一部には、だれかにもらったためずらしい野菜(やさい)を植えている。それは村でほとんど知っている者のない『きくいも』というものであった。なんでもいい味のもので、じゃがいもと、ちょうせんあざみと、それからいろいろの野菜(やさい)をいっしょにした味がするのであった。わたしはそっとこの野菜をじょうずに作って、おっかあをおどろかそうと思っていた。ただの花だと思わせておいて、そっと実のなったところを引きぬいて、ないしょで料理(りょうり)をして、いつも同じようなじゃがいもにあきあき

しているおっかあに食べさせて、『まあルミ、おまえはなんて器用な子だろう』と感心させてやろう。

　こんなことを思い思いこのときも、まだ芽が出ないかと思って、種のまいてある地べたに鼻をくっつけて調べていた。ふと気がつくとバルブレンがかんしゃく声で呼びたてているので、びっくりしてうちへはいった。まあどうだろう。おどろいたことには、炉の前にヴィタリス老人と犬たちが立っているではないか。

　すぐとわたしはバルブレンがわたしをどうするつもりだということがわかった。老人がやはりわたしを連れて行くのだ。それをおっかあがじゃましないように

村へ出してやったのだ。

もうバルブレンになにを言ってもむだだということがわかっているから、わたしはすぐと老人のほうへかけ寄った。

「ああ、ぼくを連れて行かないでください。後生ですから、連れて行かないでください」とわたしはしくしく泣きだした。

すると老人は優しい声で言った。「なにさ、ぼうや、わたしといればつらいことはないよ。わたしは子どもをぶちはしない。仲間には犬もいる。わたしと行くのがなぜ悲しい」

「おっかあが……」

「どうせきさまはここには置(お)けないのだ」とバルブレンはあらあらしく言って、耳を引(ひ)っ張(ぱ)った。

「このだんなについて行くか、孤児院(こじいん)へ行くか、どちらでもいいほうにしろ」

「いやだいやだ、おっかあ、おっかあ」

「やい、それだとおれはどうするか見ろ」とバルブレンがさけんだ。「思うさまひっぱたいて、このうちから追い出してくれるぞ」

「この子は母親に別(わか)れるのを悲しがっているのだ。それをぶつものではない。優(やさ)しい心だ。いいことだ」

「おまえさんがいたわると、よけいほえやがる」
「まあ、話を決めよう」
そう言いながら、老人は五フランの金貨を八枚テーブルの上にのせた。バルブレンはそれをさらいこむようにしてかくしに入れた。
「この子の荷物は」と老人が言った。
「ここにあるさ」とバルブレンが言って、青いもめんのハンケチで四すみをしばった包みをわたした。
中にはシャツが二枚と、麻のズボンが一着あるだけであった。
「それではやくそくがちがうじゃないか。着物がある

という話だったが、これはぼろばかりだね」
「こいつはほかにはなにもないのだ」
「この子に聞けば、きっとそうではないと言うにちがいないが、そんなことを争っているひまがない。もう出かけなければならないからな。さあおいで、こぞうさん、おまえの名はなんと言うんだっけ」
「ルミ」
「そうか、よしよし、ルミ。包みを持っておいで。先へおいで、カピ。さあ、行こう、進め」
わたしは哀訴するように両手を老人に出した。それからバルブレンにも出した。けれども二人とも顔をそ

むけた。しかも、老人はわたしのうで首をつかまえようとした。

わたしは行かなければならない。

ああ、このうちにもお別(わか)れだ。いよいよそのしきいをまたいだとき、からだを半分そこへ残(のこ)して行くようにわたしは思った。

なみだをいっぱい目にうかべて［#「うかべて」は底本では「うがべて」］わたしは見回したが、手近にはだれもわたしに加勢(かせい)してくれる者がなかった。往来(おうらい)にもだれもいなかった。牧場(ぼくじょう)にもだれもいなかった。

わたしは呼(よ)び続(つづ)けた。

「おっかあ、おっかあ」

けれどだれもそれに答える者はなかった。わたしの声はすすり泣きの中に消えてしまった。

わたしは老人について行くほかはなかった。なにしろうで首をしっかりおさえられているのだから。

「さようなら、ごきげんよう」とバルブレンがさけんだ。

かれはうちの中へはいった。

ああ、これでおしまいである。

「さあ、行こう、ルミ、進め」と老人が言って。わたしのひじをおさえた。

わたしたちはならんで歩いた。幸せとかれはそう早く歩かなかった。たぶんわたしの足に合わせて歩いてくれたのであろう。

わたしたちは坂を上がって行った。ふり返るとバルブレンのおっかあのうちがまだ見えたが、それはだんだんに小さく小さくなっていった。この道はたびたび歩いた道だから、もうしばらくはうちが見えて、それから最後(さいご)の四つ角を曲がるともう見えなくなることをわたしはよく知っていた。行く先は知らない国である。後ろをふり返ればきょうの日まで幸福な生活を送ったうちがあった。おそらく二度とそれを見ることはない

であろう。
幸い坂道は長かったが、それもいつか頂上に来た。
老人はおさえた手をゆるめなかった。
「少し休ましてくださいな」とわたしは言った。
「うん、そうだなあ」とかれは答えた。
かれはやっとわたしをはなしてくれた。
けれどカピに目くばせをすると、犬もそれをさとった様子がわたしには見えた。
それですぐと、ひつじ飼いの犬のように、一座の先頭からはなれてわたしのそばへ寄って来た。
わたしがにげ出しでもすれば、すぐにかみついてく

るにちがいない。
　わたしは草深い小山の上に登ってこしをかけると、犬も後ろについていた。
　わたしはなみだにくもった目で、バルブレンのおっかあのうちを探した。
　下には谷があって、所どころに森や牧場があった。それからはるか下にいままでいたうちが見えた。黄色いささやかなけむりが、そこのけむり出しからまっすぐに空へ立ちのぼって、やがてわたしたちのほうへなびいて来た。
　気の迷いか、そのけむりはうちのかまどのそばでか

ぎ慣(な)れたかしの葉のにおいがするようであった。

それは遠方でもあり、下のほうになってはいたが、なにもかもはっきり見えた。ただなにかがたいへん小さく見えたのは言うまでもない。

ちりづかの植えにうちの太ったためんどりがかけ回っていたが、いつものように大きくは見えなかった。うちのめんどりだということを知っていなかったら、小さなはとだと思ったかもしれない。うちの横には、わたしが馬にしていつも乗った曲がったなしの木が、小川のこちらには、わたしが水車をしかけようとして大さわぎをしてきずきかけたほりわりが見えた。まあ、

その水車にはずいぶんひまをかけたが、とうとう回らなかった。わたしの畑も見えた。ああ、わたしのだいじな畑が。

　わたしの花がさいてもだれが見るだろう。わたしの『きくいも』をだれが食べるだろう。きっとそれはバルブレンだ。あの悪党(あくとう)のバルブレンだ。もう一足(あし)往来(おうらい)へ出れば、わたしの畑もなにもかもかくれてしまうのだ。

　ふと村からわたしのうちのほうへ通う往来の上に、白いボンネットが見えて、木の間にちらちら見えたりかくれたりしていた。

それはずいぶん遠方であったから、ぽっちり白く、春のちょうちょうのように見えただけであった。けれど目よりも心はするどくものを見るものだ。わたしは、それがバルブレンのおっかあであることを知った。確(たし)かにおっかあだ、とわたしは思いこんでいた。

「さて出かけようか」と老人(ろうじん)が言った。

「ああ、いいえ、後生(ごしょう)ですからも少し」

「じゃあ話とはちがって、おまえは、から（ぜんぜん）、足がだめだな。もうつかれてしまったのか」

わたしは答えなかった。ただながめていた。

やはりそれはバルブレンのおっかあであった。それはおっかあのボンネットであった。水色の前だれであった。足早に、気がせいているように、うちに向かって行くのであった。

白いボンネットはまもなくうちの前に着いた。戸をおし開けて、急いで庭にはいって行った。

わたしはすぐにとび上がって、土手の上に立ち上がった。そばにいたカピがおどろいてとびついて来た。

おっかあはいつまでもうちの中にはいなかった。まもなく出て来て、両うでを広げながら、あちこちと庭の中をかけ回っていた。

かの女はわたしを探(さが)しているのだ。
わたしは首を前に延(の)ばして、ありったけの声でさけんだ。
「おっかあ、おっかあ」
けれどもそのさけび声は空に消えてしまった、小川の水音に消されてしまった。
「どうしたのだ。おまえ、気がちがったのか」とヴィタリスは言った。
わたしは答えなかった。わたしの目はまたバルブレンのおっかあをじっと見ていた。けれども向こうではわたしが上にいるとは知らないから、あお向いては見

なかった。そうして庭をぐるぐる回って、往来（おうらい）へ出て、きょろきょろしていた。

もっと大きな声でわたしはさけんだ。けれども、初（はじ）めの声と同様にむだであった。

そのうち老人（ろうじん）もやっとわかったとみえて、やはり土手に登って来た。かれもまもなく白いボンネットを見つけた。

「かわいそうに、この子は」とかれはそっと独（ひと）り言（ごと）を言った。

「おお、わたしを帰してください」と、わたしはいまの優（やさ）しいことばに乗（の）って、泣（な）き声（ごえ）を出した。

けれどもかれはわたしの手首をおさえて、土手を下りて往来（おうらい）へ出た。

「さあ、だいぶ休んだから、もう出かけるのだ」と、かれは言った。

わたしはぬけ出そうともがいたけれども、かれはしっかりわたしをおさえていた。

「さあカピ、ゼルビノ」と、かれは犬のほうを見ながら言った。

二ひきの犬がぴったりわたしにくっついた。カピは後ろに、ゼルビノは前に。

二足（ふたあし）三足（みあし）行くと、わたしはふり向いた。

わたしたちはもう坂の曲がり角を通りこした。もう谷も見えなければ家も見えなくなった。ただ遠いかなたに遠山（とおやま）がうすく青くかすんでいた。果（は）てしもない空の中にわたしの目はあてどなく迷（まよ）うのであった。

とちゅう

四十フラン出して子どもを買ったからといって、その人は鬼（おに）でもなければ、その子どもの肉を食べようとするのでもなかった。ヴィタリス老人（ろうじん）はわたしを食べ

ようという欲（よく）もなかったし、子どもを買ったが、その人は悪人ではなかった。

わたしはまもなくそれがわかった。

ちょうどロアール川とドルドーニュ川と、二つの谷を分かった山の頂上（ちょうじょう）で、かれはふたたびわたしの手首をにぎった。その山を南へ下り始めて十五分も行ったころ、かれは手をはなした。

「まああとからぽつぽつおいで。にげることはむだだよ。カピとゼルビノがついているからな」

わたしたちはしばらくだまって歩いていた。

わたしはふとため息を一つした。

「わしにはおまえの心持ちはわかっているよ」と老人は言った、「泣きたいだけお泣き。だがまあ、これがおまえのためにはいいことだということを考えるようにしてごらん。あの人たちはおまえのふた親ではないのだ、おっかあはおまえに優しくはしてくれたろう。それでおまえも好いていたから、それでそんなに悲しく思うのだろう。けれどもあの人は、ご亭主がおまえをうちに置きたくないと言えば、それを止めることはできなかったのだ。それにあの男だって、なにもそんなに悪い男というのでもないかもしれない。あの男はからだを悪くして、もうほかの仕事ができなくなってい

る。かたわのからだでは食べてゆくだけに骨が折れるのだ。そのうえおまえを養っていては、自分たちが飢えて死ななければならないと思っているのだ。そこでおまえにひとつ心得てもらいたいことがある。世の中は戦争のようなもので、だれでも自分の思うようにはゆかないものだということだ」

そうだ、老人の言ったことはほんとうであった。貴い経験から出た訓言（教訓）であった。でもその訓言よりももっと力強い一つの考えしか、わたしはそのとき持っていなかった。それは『別れのつらさ』ということであった。

わたしはもう二度とこの世の中で、いちばん好(す)きだった人に会うことができないのだ。こう思うとわたしは息苦しいように感じた。

「まあ、わたしの言ったことばをよく考えてごらん。おまえはわたしといれば不幸(ふしあわ)せなことはないよ」と老人(ろうじん)は言った。「孤児院(こいじん)などへやられるよりはいくらましだかしれない。それで言っておくが、おまえはにげ出そうとしてもだめだよ。そんなことをすれば、あのとおりの広野原(ひろのはら)だ。カピとゼルビノがすぐとおまえをつかまえるから」

こう言ってかれは目の前のあれた高原(こうげん)を指さした。

そこにはやせこけたえにしだが、風のまにまに波のようにうねっていた。

にげ出す――わたしはもうそんなことをしようとは思わなかった。にげていったいどこへわたしは行こう。この背（せい）の高い老人（ろうじん）は、ともかく親切（しんせつ）な主人であるらしい。

わたしは一息にこんなに歩いたことはなかった。ぐるりに見るものはあれた土地と小山ばかりで、村を出たらば向こうはどんなに美しかろうと思ったほど、この世界は美しくはなかった。

老人（ろうじん）はジョリクールを肩（かた）の上に乗せたり、背嚢（はいのう）の中

に入れたりして、しじゅう規則正しく、大またに歩いていた。三びきの犬はあとからくっついて来た。
ときどき老人はかれらに優しいことばをかけていた。フランス語で言うこともあったし、なんだかわからないことばで言うこともあった。
かれも犬たちもくたびれた様子がなかった。だがわたしはつかれた。足を引きずって、この新しい主人にくっついて歩くのが精いっぱいであった。けれども休ませてくれとは言いだし得なかった。
「おまえがくたびれるのは木のくつのせいだよ」とかれは言った。「いずれユッセルへ着いたらくつを買っ

てやろう」

　このことばはわたしに元気をつけてくれた。わたしはしじゅうくつが欲しいと思っていた。村長のむすこも、はたごやのむすこもくつを持っていた。それだから日曜というとかれらはお寺へ来て石のろうかをすべるように走った。それをわれわれほかのいなかの子どもは、木ぐつでがたがた、耳の遠くなるような音をさせたものだ。

「ユッセルまではまだ遠いんですか」

「ははあ、本音（ほんね）をふいたな」とヴィタリスが笑（わら）いながら言った。「それではくつが欲（ほ）しいんだな。よしよし、

わたしはやくそくをしよう。それも大きなくぎを底(そこ)に打ったやつをなぁ。それからビロードの半ズボンとチョッキとぼうしも買ってやる。それでなみだが引っこむことになるだろう。なあ、そうしてもらおうじゃないか。そしてあと六マイル（約四十キロ）歩いてくれるだろうなあ」

底(そこ)にくぎを打ったくつ、わたしは得意(とくい)でたまらなかった。くつをはくことさええらいことなのに、おまけにくぎを打ってある。わたしは悲しいことも忘(わす)れてしまった。

くぎを打ったくつ、ビロードの半ズボンに、チョッ

キに、ぼうし。

　まあバルブレンのおっかあがわたしを見たらどんなにうれしがるだろう。どんなに得意になるだろう。けれども、なるほどくつとビロードがこれから六マイル歩けばもらえるというやくそくはいいが、わたしの足はそんな遠方まで行けそうにもなかった。

　わたしたちが出かけたときに青あおと晴れていた空が、いつのまにか黒い雲にかくれて、細かい雨がやがてぽつぽつ落ちて来た。

　ヴィタリスはそっくりひつじの毛皮服にくるまっているので、雨もしのげたし、さるのジョリクールも、

一しずく雨がかかるとさっそくかくれ家(が)ににげこんだ。けれども犬とわたしはなんにもかぶるものがないので、まもなく骨(ほね)まで通るほどぬれた。でも犬はぬれてもときどきしずくをふり落とすくふうもあったが、わたしはそんなことはできなかった。下着までじくじくにぬれ通って、骨まで冷(ひ)えきっていた。

「おまえ、じきかぜをひくか」と主人は聞いた。

「知りません。かぜをひいた覚(おぼ)えがないから」

「それはたのもしいな。だがこのうえぬれて歩いてもしようがないことだから、少しでも早くこの先の村へ行って休むとしよう」

ところがこの村には一けんも宿屋（やどや）というものはなかった。当たり前の家ではじいさんのこじきの、しかも子どもに三びきの犬まで引き連（つ）れて、ぬれねずみになった同勢（どうぜい）をとめようという者はなかった。

「うちは宿屋（やどや）じゃないよ」

こう言ってどこでも戸を立てきった。わたしたちは一けん一けん聞いて歩いて、一けん一けん断（ことわ）られた。

これから四マイル（約六キロ）ユッセルまで一休みもしないで行かなければならないのか。暗さは暗し、雨はいよいよ冷（つめ）たく骨身（ほねみ）に通った。ああ、バルブレンのおっかあのうちがこいしい。

やっとのことで一けんの百姓家(ひゃくしょうや)がいくらか親切があって、わたしたちを納屋(なや)にとめることを承知(しょうち)してくれた。でもねるだけはねても、明かりをつけることはならないという言いわたしであった。

「おまえさん、マッチを出しなさい。あしたたつとき返してあげるから」とその百姓家(ひゃくしょうや)の主人はヴィタリス老人(ろうじん)に言った。

それでもとにかく、風雨を防(ふせ)ぐ屋根だけはできたのであった。

老人(ろうじん)は食料(しょくりょう)なしに旅をするような不注意(ふちゅうい)な人ではなかった。かれは背中(せなか)にしょっていた背嚢(はいのう)から一かた

まりのパンを出して、四きれにちぎった。

さてこのときわたしははじめて、かれがどういうふうにして、仲間(なかま)の規律(きりつ)を立てているかということを知った。さっきわれわれが一けん一けん宿(やど)を探(さが)して歩いたとき、ゼルビノがある家にはいったが、さっそくかけ出して来たとき、パンの切れを口にくわえていた。

そのとき老人(ろうじん)はただ、

「よしよし、ゼルビノ……今夜は覚(おぼ)えていろ」とだけ言った。

わたしはもうゼルビノのどろぼうをしたことは忘(わす)れて、ヴィタリスがパンを切る手先をぼんやり見ていた。

ゼルビノはしかしひどくしょげていた。

ヴィタリスとわたしはとなり合ってジョリクールをまん中に置(お)いて、二つあるわらのたばの上、かれ草のたばの上にこしをかけて、三びきの犬はその前にならんでいた。カピとドルスは主人の顔をじっと見つめているのに、ゼルビノは耳を立ててしっぽを足の間に入れて立っていた。

老人(ろうじん)は命令(めいれい)するような調子で言った。「どろぼうは仲間(なかま)をはずれて、すみに行かなければならんぞ。夕食なしにねむらなければならんぞ」

ゼルビノは席(せき)を去って、指さされたほうへすごすご

出て行った。それでかれ草の積んである下にもぐりこんで、姿が見えなくなったが、その下で悲しそうにくんくん泣いている声が聞こえた。

老人はそれからわたしにパンを一きれくれて、自分の分を食べながら、ジョリクールとカピとドルスに、小さく切って分けてやった。

どんなにわたしはバルブレンのおっかあのスープがこいしくなったろう。それにバターはなくっても、暖かい炉の火がどんなにいい心持ちであったろう。夜着の中に鼻をつっこんでねた小さな寝台がこいしいな。

もうすっかりくたびれきって、足は木ぐつですれて痛(いた)んだ。着物はぬれしょぼたれているので、冷(つめ)たくってからだがふるえた。夜中になってもねむるどころではなかった。

「歯をがたがた言わせているね。おまえ寒いか」と老人(ろうじん)が言った。

「ええ、少し」

わたしはかれが背嚢(はいのう)を開ける音を聞いた。

「わたしは着物もたんとないが、かわいたシャツにチョッキがある。これを着てまぐさの下にもぐっておいで。じきに暖(あたた)かになってねむられるよ」

でも老人が言ったようにそうじき暖かにはならなかった。わたしは長いあいだわらのとこの上でごそごそしながら、苦しくってねむられなかった。もうこれから先はいつもこんなふうにくらすのだろうか。ざあざあ雨の降る中を歩いて、寒さにふるえながら、物置きの中にねて、夕食にはたった一きれの固パンを分けてもらうだけであろうか。スープもない。だれもかわいがってくれる者もない。だきしめてくれる者もない。バルブレンのおっかあももうないのだ。

　わたしの心はまったく悲しかった。なみだが首を流れ落ちた。

そのときふと暖(あたた)かい息が顔の上にかかるように思った。

わたしは手を延(の)ばすと、カピのやわらかい毛が手にさわった。かれはそっと草の上を音のしないように歩いて、わたしの所へやって来たのだ。わたしのにおいを優(やさ)しくかぎ回る息が、わたしのほおにも髪(かみ)の毛(け)にもかかった。

この犬はなにをしようというのであろう。

やがてかれはわたしのすぐそばのわらの上に転(ころ)げて、それはごく静(しず)かにわたしの手をなめ始めた。

わたしもうれしくなって、わらのとこの上に半分起

き返って、犬の首を両うでにかかえて、その冷たい鼻にキッスした。かれはわずか息のつまったような泣き声を立てたが、やがて手早く前足をわたしの手に預けて、じっとおとなしくしていた。

わたしはつかれも悲しみも忘れた。息苦しいのどがからっとして、息がすうすうできるようになった。ああ、わたしはもう一人ではなかった。わたしには友だちがあった。

初舞台

そのあくる日は早く出発した。

空は青あおと晴れて、夜中のから風がぬかるみをかわかしてくれた。小鳥が林の中でおもしろそうにさえずっていた。三びきの犬はわたしたちの回りにもつれていた。ときどきカピが後足で立ち上がって、わたしの顔を見ては二、三度続けてほえた。かれの心持ちはわたしにはわかっていた。

「元気を出せ、しっかり、しっかり」

こう言っているのであった。

かれはりこうな犬であった。なんでもわかるし、人

にわからせることも知っていた。この犬の尾(お)のふり方にはたいていの人の舌(した)や口で言う以上(いじょう)の頓知(とんち)と能弁(のうべん)がふくまれていた。わたしとカピの間にはことばは要(い)らなかった。初(はじ)めての日からおたがいの心持ちはわかっていた。

わたしはこれまで村の外には出たことがなかったし、初(はじ)めて町を見るのはなにより楽しみであった。

でもユッセルの町は子どもの目にそんなに美しくはなかったし、それに町の塔(とう)や古い建物(たてもの)などよりも、もっと気になるのはくつ屋の店であった。

老人(ろうじん)がやくそくをしたくぎを打ったくつのある店は

どこだろう。

わたしたちがユッセルの古い町を通って行ったとき、わたしはきょろきょろそこらを見回した。ふと老人は市場（いちば）の後ろの一けんの店にはいった。店の外に古い鉄砲（てっぽう）だの、金モールのへりのついた服だの、ランプだの、さびたかぎだのがつるしてあった。

わたしたちは三段（だん）ほど段を下りてはいってみると、それはもう屋根がふけてからのち、太陽の光がついぞ一度もさしこまなかったと思われる大きな部屋（へや）にはいった。

くぎを打ったくつなんぞを、どうしてこんな気味の

悪い所で売っているだろう。

けれども老人（ろうじん）にはわかっていた。それでまもなくわたしは、これまでの木ぐつの十倍（ばい）も重たい、くぎを打ったくつをはくことになった。うれしいな。

老人の情（なさ）けはそれだけではなかった。かれはわたしに水色ビロードの上着と、毛織（けお）りのズボンと、フェルトぼうしまで買ってくれた。かれのやくそくしただけの品は残（のこ）らずそろった。

まあ、麻（あさ）の着物のほか着たことのなかったわたしにとって、ビロードの服のめずらしかったこと。それにくつは。ぼうしは。わたしはたしかに世界じゅうでい

ちばん幸福な、いちばん気前のいい大金持ちであった。ほんとうにこの老人(ろうじん)は世界じゅうでいちばんいい人でいちばん情(なさ)け深い人だと思われた。

もっともそのビロードは油じみていたし、毛織(けお)りのズボンはかなり破(やぶ)れていた。それにフェルトぼうしのフェルトもしたたか雨によごれて、もとの色がなんであったかわからないくらいであった。けれどもわたしはむやみにうれしくって、品物のよしあしなどはわからなかった。

ところで宿屋(やどや)に帰ってから、さっそくこのきれいな着物を着たいとあせっていたわたしをびっくりさせも

し、つまらなくもさせたことは、老人がはさみでそのズボンのすそをわたしのひざの長さまで切ってしまったことであった。

わたしは丸い目をしてかれの顔を見た。

「これはおまえをほかの子どもと同じように見せないためだよ。フランスではおまえはイタリアの子どものようなふうをするのだ。イタリアではフランスの子どものようなふうをするのだ」とかれは説明した。

わたしはいよいよびっくりしてしまった。

「わたしたちは芸人だろう。なあ。それだから当たり前の人のようなふうをしてはならないのだ。われわれ

がここらのいなかの人間のようなふうをして歩いたら、だれが目をつけると思うか。わたしたちはどこでも立ち止まれば、回りに人を集めなければならない。困ったことには、なんでもていさいを作るということが、この世の中でかんじんなことなのだよ」

こういうわけで、わたしは朝まではフランスの子どもであったが、その晩（ばん）はもうイタリアの子どもになっていた。

ズボンはやっとひざまで届（とど）いた。老人（ろうじん）はくつ下にひもをぬいつけて、フェルトぼうしの上にはいっぱいに赤いリボンを結（むす）びつけた。それから毛糸の花でおかざ

りをした。

わたしはほかの人がどう思うかは知らないが、正直に言えば自分ながらなかなかりっぱになったと思った。親友のカピも同じ考えであったから、しばらくわたしの顔をじっと見て、満足（まんぞく）したふうで前足を出した。

わたしはカピの賛成（さんせい）を得（え）たのでうれしかった。それというのが、わたしが着物を着かえている最中（さいちゅう）、例（れい）のジョリクールめが、わたしのまん前にべったりすわって、大げさな身ぶりで、さんざんひとのするとおりのまねをして、すっかり仕度ができると、今度はおしりに手を当て、首をちぢめて、あざけるように笑（わら）ったの

で、一方にそういう実意のある賛成者のできたのがよけいにうれしかったのである。

　いったいさるが笑うか笑わないかということは、学問上の問題だそうだ。わたしは長いあいだジョリクールと仲よくくらしていたが、かれはたしかに笑った。しかもどうかすると人をばかにした笑い方をしたものだ。もちろんかれは人間のようには笑わなかった。けれどもなにかおもしろいことがあると、口を曲げて、目をくるくるやって、あのしっぽをす早く働かせる。そうしてまっ黒な目はぴかぴか光って、火花がとび出すかと思われた。

「さあ仕度ができたら」と最後にぼうしを頭にかぶると老人が言った。「わたしたちはいよいよ仕事にかからなければならない。あしたは市の立つ日だから、おまえは初舞台を務めなければならない」

初舞台。初舞台とはどんなことだろう。

老人はそこで、この初舞台というのは、三びきの犬とジョリクールを相手に芝居をすることだと教えてくれた。

「でもぼく、どうして芝居をするのか知りません」と、わたしはおどおどしながらさけんだ。

「それだから、わたしが教えてあげようというのだよ。

教わらなけりゃわかりゃしない。この動物どももいっしょうけんめい自分の役をけいこしたものだ。カピが後足で立つのでも、ドルスがなわとびの芸当をやるのでも、みんなけいこをして覚えたのだ。ずいぶん骨の折れたことではあったが、その代わりご覧、あのとおりかしこくなっている。おまえも、これからいろいろの役を覚えるためにはよほど勉強が要る。とにかく仕事にかかろう」

　これまでわたしは仕事といえば、畑にくわを入れるとか、石を切るとか、木をかるとかいうほかにはないように思っていた。

「さてわたしたちのやる狂言は、『ジョリクール氏の家来、一名とんだあほうの取りちがえ』というのだ。それはこういう筋だ。ジョリクール氏はこれまで一人家来を使っていた。それはカピという名前で、ジョリクール氏はこの家来に満足していたのだが、年を取ったのでひまを取ろうとする。それでカピは主人にひまを取るまえに、代わりの家来を見つけるやくそくをする。さてその後がまの家来というのは、犬ではなくって子どもなのだ。ルミと名乗るいなかの子どもなのだ」

「やあ、ぼくと同じ名前の……」

「いや、同じ名前ではない、それがおまえなんだ。おまえはジョリクール氏の所へ奉公口を探しにいなかから出て来たのだ」

「おさるに家来はないでしょう」

「そこが芝居だよ。さておまえはいきなり村からとび出して来た。それでおまえの新しい主人はおまえをあほうだと思う」

「おお、ぼく、そんなことといやです」

「人が笑いさえすれば、そんなことはどうでもいいじゃないか。さておまえは初めてこのだんなの所へ家来になってやって来た。そして食事のテーブルごしら

えを言いつけられる。それ、ちょうどそこに、芝居に使うテーブルがある。さあ、仕度におかかり」

このテーブルの上には、おさらに、コップに、ナイフが一本、フォークが一本、白いテーブルかけが一枚置いてあった。

どうしてこれだけのものをならべようか。

わたしはそれを考えて、両手をつき出してテーブルによっかかって、ぽかんと口を開けたまま、なにから手をつけていいか困っていると、親方は両手を打って、腹をかかえて笑いだした。

「うまいうまい。それこそ本物だ」とかれはさけんだ。

「わたしが先に使っていた子どもは狡猾そうな顔つきで、どうだ、あほうのまねはうまかろうと言わないばかりであった。おまえのはそれがいかにも自然でいい。どうしてすばらしいものだ」

「でもぼく、どうしていいのかわからないんです」

「それだからそんなにうまくやれるのだ。おまえに芝居がわかるとかえって、いま思っているようなことをわざとするようになるだろう。なんでもいまのどうしていいかわからずに困っている心持ちを忘れないようにしてやれば、いつも上出来だよ。つまり役の性根は、さると人間が、主人と家来と身分を取りかえたつ

いでに、ばかをりこうと取りかえて、とんだあほうの取りちがえ、これが芝居のおかしいところなのだ」

『ジョリクール氏の家来』は大芝居というのではなかったから、二十分より長くは続かなかった。ヴィタリスはわたしたちにたびたびそれをくり返させた。わたしは主人がずいぶんしんぼう強いのでおどろいた。これまで村でよく動物をしこむところを見たが、ひどくしかったり、ぶったりしてやっとしこむのであった。ずいぶんけいこは長くやったが、親方は一度もおこったこともなければ、しかったこともなかった。

「さあ、もう一度やり直しだ」とかれは厳しい声で言っ

て、いけないところを直した。「カピ、それはいけません。ジョリクール、気をつけないとしかりますぞ」

これがすべてであった。しかしそれでじゅうぶんであった。

わたしを教えながらかれは言った。「なんでもけいこには犬をお手本にするがいい。犬とさるとを比べてごらん。ジョリクールはなるほどはしっこいし、ちえもあるけれども、注意もしないし、従順（じゅうじゅん）でもないのだ。かれは教えられたことはわけなく覚（おぼ）えるが、すぐそれを忘（わす）れてしまう。それにかれは言われたことをわざとしない。かえってあべこべなことをしたがる。そ

れはこの動物の性質だ。だからわたしはあれに対してはおこらない。さるは犬と同じ良心を持たない。あれには義務ということばの意味がわかっていない。それが犬におとるところだ。わかったかね」

「ええ」

「おまえはりこうで注意深い子だ。まあなんによらずすなおに、自分のしなければならないことをいっしょうけんめいにするのだ。それを一生覚えておいで」

こういう話をしているうち、わたしは勇気をふるい起こして、芝居のけいこのあいだなによりわたしをびっくりさせたことについてかれに質問した。どうし

てかれが犬やさるやわたしに対してあんなにしんぼう強くやれるのであろうか。

かれはにっこり笑(わら)った。「おまえは百姓(ひゃくしょう)たちの仲間(なかま)にいて、手あらく生き物を取りあつかっては、言うことを聞かないと棒(ぼう)でぶつようなところばかり見てきたのだろう。だがそれは大きなまちがいだよ。手あらくあつかったところでいっこう役に立たない。優(やさ)しくしてやればたいていはうまくゆくものだ。だからわたしは動物たちに優しくするようにしている。むやみにぶてばかれらはおどおどするばかりだ。ものをこわがるとちえがにぶる。それに教えるほうでかんしゃく

を起こしては、ついいつもの自分とはちがったものになる。それではいまおまえに感心されたようなしんぼう力は出なかったろう。他人を教えるものは自分を教えるものだということがこれでわかる。わたしが動物たちに教訓をあたえるのは、同時にわたしがかれらから教訓を受けることになるのだ。わたしはあれらのちえを進めてやったが、あれらはわたしの品性を作ってくれた」

わたしは笑った。それがわたしにはきみょうに思われた。でもかれはなお続けた。

「おまえはそれをきみょうだと思うか。犬が人間に

教訓を授けるのはきみょうだろう。だがこれはほんとうだよ。
　すると主人が犬をしこもうと思えば、自分のことをかえりみなければならない。その飼い犬を見れば主人の人がらもわかるものだ。悪人の飼っている犬はやはり悪ものだ。強盗の犬はどろぼうをする。ばかな百姓が飼い犬はばかで、もののわからないものだ。親切な礼儀正しい人は、やはり気質のいい犬を飼っている」
　わたしはあしたおおぜいの前に現れるということを思うと、胸がどきどきした。犬やさるはまえからも

う何百ぺんとなくやりつけているのだから、かえってわたしよりえらかった。わたしがうまく役をやらなかったら、親方はなんと言うだろう。見物はなんと言うだろう。

わたしはくよくよ思いながらうとうとねいった。そのゆめの中で、おおぜいの見物が、わたしがなんてばかだろうと言って、腹をかかえて笑うところを見た。

あくる日になると、いよいよわたしは心配でおどおどしながら、芝居をするはずのさかり場まで行列を作って行った。

親方が先に立って行った。背の高いかれは首をまっ

すぐに立て、胸（むね）を前へつき出して、おもしろそうにふえでワルツをふきながら、手足で拍子（ひょうし）をとって行った。その後ろにカピが続（つづ）いた。イギリスの大将（たいしょう）の軍服（ぐんぷく）をまねた金モールでへりをとった赤い上着を着、鳥の羽根（はね）でかざったかぶとをかぶったジョリクールがその背中（せなか）にいばって乗っていた。

ゼルビノとドルスが、ほどよくはなれてそのあとに続いた。

わたしがしんがりを務（つと）めていた。わたしたちの行列は親方の指図どおり適当（てきとう）な間をへだてて進んだので、かなり人目に立つ行列になった。

なによりも親方のふくするどいふえの音(ね)にひかれて、みんなうちの中からかけ出して来た。とちゅうの家の窓(まど)という窓はカーテンが引き上げられた。

子どもたちの群(む)れがあとからかけてついて来た。やがて広場に着いたじぶんには、わたしたちの行列に、はるか多い見物の行列がつながって、たいした人だかりであった。

わたしたちの芝居小屋(しばいごや)はさっそくできあがった。四本の木になわを結(むす)び回して、その長方形のまん中にわたしたちは陣取(じんど)ったのである。

番組の第一は犬の演(えん)じるいろいろな芸当(げいとう)であった。

わたしは犬がなにをしているかまるっきりわからなかった。わたしはもう心配で心配で自分の役を復習（ふくしゅう）することにばかり気を取られていた。わたしが記憶（きおく）していたことは、親方がふえをそばへ置（お）き、ヴァイオリンを取り上げて、犬のおどりに合わせてひいたことで、それはダンス曲であることもあれば、静（しず）かな悲しい調子の曲であることもあった。なわ張（ば）りの外に見物はぞろぞろ集まっている。わたしはこわごわ見回すと、数知れないひとみの光がわたしたちの上に集まっていた。

一番の芸当（げいとう）が終わると、カピが歯の間にブリキのぼんをくわえて、お客さまがたの間をぐるぐる回りを始

めた。見物の中で銭（ぜに）を入れない者があると、立ち止まって二本の前足をこのけちんぼうなお客のかくしに当てて、三度ほえて、それから前足でかくしを軽くたたいた。それを見るとみんな笑（わら）いだして、うれしがってときの声を上げた。

じょうだんや、嘲笑（ちょうしょう）のささやきがそこここに起こった。

「どうもりこうな犬じゃないか。あいつは金を持っている人といない人を知っている」

「そら、ここに手をかけた」

「出すだろうよ」

「出すもんか」
「おじさんから遺産（いさん）をもらったくせに、けちな男だなあ」
さてとうとう銀貨（ぎんか）が一枚（まい）おく深（ふか）いかくしの中からほり出されて、ぼんの中にはいることになった。そのあいだ親方は一言（ごん）もものは言わずに、カピのぼんを目で見送りながら、おもしろそうにヴァイオリンをひいた。まもなくカピが得意（とくい）らしくぼんにいっぱいお金を入れて帰って来た。
いよいよ芝居（しばい）の始まりである。
「さてだんなさまがたおよびおくさまがたに申し上げ

ます」

親方は、片手に弓、片手にヴァイオリンを持って、身ぶりをしながら口上を述べだした。

「これより『ジョリクール氏の家来。一名とんだあほうの取りちがえ』と題しまするゆかいな喜劇をごらんにいれたてまつります。わたくしほどの芸人が、手前みそに狂言の功能をならべたり、一座の役者のちょうちん持ちをして、自分から品を下げるようなことはいたしませぬ。ただ一言申しますることは、どうぞよくよくお目止められ、お耳止められ、お手拍子ごかっさいのご用意を願っておくことだけでございます。始

まり」

親方はゆかいな喜劇だと言ったが、じつはだんまりの身ぶり狂言にすぎなかった。それもそのはずで、立役者の二人まで、ジョリクールも、カピもひと言も口はきけなかったし、第三の役者のわたしもふた言とは言うことがなかった。

けれども見物に芝居をよくわからせるために、親方は芝居の進むにつれて、かどかどを音楽入りで説明した。

そこでたとえば勇ましい戦争の曲をひきながら、かれはジョリクール大将が登場を知らせた。大将はイ

ンドの戦争でたびたび功名(こうみょう)を現(あらわ)して、いまの高い地位(ちい)にのぼったのである。これまで大将はカピという犬の家来を一人使っていたが、出世していてお金が取れて、ぜいたくができるようになったので、人間の家来をかかえようと思っている。長いあいだ動物が人間の奴隷(どれい)であったけれども、それがあべこべになるときが来たのである。

家来の来るのを待つあいだに、大将は葉巻(はまき)をふかしながらあちこちと歩き回る。見物の顔にかれがたばこのけむりをふっかけるふうといったら、見物(みもの)であった。なかなか来ないのでじれて、人間がかんしゃくを

起こすときのように目玉をくるくる回し始める。くちびるをかむ。じだんだをふむ。三度目にじだんだをふんだときに、わたしがカピに連れられて舞台に現れることになる。

わたしが役を忘れていれば犬が教えてくれるはずになっていた。

やがてころ合いのじぶんに、かれは前足をわたしのはうへ出して、大将がわたしを紹介した。

大将はわたしを見ると、がっかりしたふうで両手を上げた。なんだ、これがわざわざ連れて来た家来かい。それからかれは歩いて来て、わたしの顔をぶえん

りょにながめた。そうして肩をそびやかしながら、わたしの回りを歩き回っていた。その様子がそれはこっけいなので、だれもふき出さずにはいられなかった。見物がなるほど、このさるはわたしをあほうだと思っているなとなっとくする。そうして見物もやはりわたしをあほうだと思いこんでしまう。

芝居がまたいかにもわたしのあほうさの底が知れないようにできていた。することなすことにさるはかしこかった。

いろいろとわたしを試験をしてみた末、大将はかわいそうになって、とにかく朝飯を食べさせることに

する。かれはもう朝飯の仕度のできているテーブルを指さして、わたしにすわれといって合図をした。

「大将の考えでは、この家来にまあなにか食べるものでも食べさしたら、これほどあほうでもなくなるだろうというのですが、さて、どんなものでしょうか」と、ここで親方が口上（こうじょう）をはさんだ。

　わたしは小さなテーブルに向かってこしをかけた。テーブルの上には食器（しょっき）がならんで、さらの上にナプキンが置（お）いてあった。このナプキンをわたしはどうすればいいのだろう。

　カピがその使い方を手まねで教えてくれた。しばら

くしげしげとながめたあとで、わたしはナプキンで鼻をかんだ。

そのとき大将が腹をかかえて大笑いをした。そうしてカピはわたしのあほうにあきれ返って、四つ足ででんぐり返しを打った。

わたしはやりそこなったことがわかったので、またナプキンをながめて、それをどうすればいいかと考えていた。

やがて思いついたことがあって、わたしはそれを丸く巻いてネクタイにした。大将がもっと笑った。カピがまたでんぐり返しを打った。

そのうちとうとうがまんがしきれなくなって、大将がわたしをいすから引きずり下ろして、自分が代わりにこしをかけて、わたしのためにならべられている朝飯(あさめし)を食べだした。

ああ、かれのナプキンをあつかうことのうまいこと。いかにも上品に軍服(ぐんぷく)のボタンの穴(あな)にナプキンをはさんでひざの上に広げた。それからパンをさいて、お酒を飲む優美(ゆうび)なしぐさといったらない。けれどいよいよ食事がすんで、かれが小ようじを言いつけて、器用(きよう)に歯をせせって（つついて）見せたとき、割(わ)れるほど大かっさいがほうぼうに起こって、芝居(しばい)はめでたくまい納(おさ)め

た。

「なんというあほうな家来だろう。なんというかしこいさるだろう」

宿屋（やどや）に帰る道みち、親方はわたしをほめてくれた。

わたしはもうりっぱな喜劇役者（きげきやくしゃ）になって、主人からおほめのことばをいただいて、得意（とくい）になるほどになったのである。

読み書きのけいこ

ヴィタリス親方の小さな役者の一座（いちざ）は、どうしてなかなかたっしゃぞろいにはちがいなかったが、その曲目はそうたくさんはなかったから、長く同じ町にいることはできなかった。

ユッセルに着いて三日目には、また旅に出ることになった。

今度はどこへ行くのだろう。

わたしはもう大胆（だいたん）になって、こう質問（しつもん）を親方に発してみた。

「おまえはこのへんのことを知っているか」と、かれはわたしの顔を見ながら言った。

「いいえ」
「じゃあなぜ、どこへ行くと言って聞くのだ」
「知りたいと思って」
「なにを知りたいのだ」
わたしはなんと答えていいかわからないので、だまっていた。
「おまえは本を読むことを知っているか」
かれはしばらく考え深そうにわたしの顔を見て、こうたずねた。
「いいえ」
「本にはこれからわたしたちが旅をして行く土地の名

やむかしあったいろいろなことが書いてある。一度もそこへ来たことがなくっても、本を読めばまえから知ることができる。これから道みち教えてあげよう。それはおもしろいお話を聞かせてもらうようなものだ」

わたしはまるっきりものを知らずに育った。もっともたったひと月村の学校に行ったことがあった。けれどその月じゅうわたしは一度も本を手に持ったことはなかった。わたしがここに話をしている時代には、フランスに学校のあることをじまんにしない村がたくさんあった。よし学校の先生のいる所でも、その人はなんにも知らないか、さもなければなにかほかに仕事が

あって、預(あずか)った子どもの世話をろくろくしない者が多かった。

わたしたちの村の学校の先生がやはりそれであった。それは先生がものを知らないというのではないが、わたしが学校に行っているひと月じゅうかれはただの一課(か)をすら教えなかった。かれはほかにすることがあった。その先生は商売がくつ屋であった。いやだれもそこから皮のくつを買う者がなかったから、ほんとうは木ぐつ屋だと言ったほうがいい。かれは一日こしかけにこしをかけて木ぐつにするけやきやくるみの木をけずっていた。そういうわけでわたしはなにも学校では

教わらなかったし、ＡＢＣ（アベセ）をすら教わらなかった。
「本を読むってむずかしいことでしょうか」
わたしはしばらく考えながら歩いて、こう聞いた。
「頭のにぶい者にはむずかしいが、それよりも習いたい気のない者にはもっとむずかしい。おまえの頭はにぶいかな」
「ぼくは知りません。けれども教えてくだされば習いたいと思います」
「よしよし、考えてみよう。まあ、ゆっくり教えてあげよう。たっぷりひまはあるからね」
たっぷりひまがあるからゆっくりやろう。なぜすぐ

に始めないのだろう。わたしは本を読むことを習うのがどんなにむずかしいか知らなかった。もう本を開ければすぐに中に書いてあることがわかるように思っていた。

そのあくる日歩いて行くとちゅう、親方はこしをかがめて、ほこりをかぶった板きれを拾い上げた。

「はら、これがおまえの習う本だ」とかれは言った。

なにこの板きれが本だとは。わたしはじょうだんを言っているのだろうと思って、かれの顔を見た。けれどかれはいっこうにまじめな顔をしていた。わたしは木ぎれをじっと見た。

それはうでぐらい長さがあって、両手をならべたくらいはばがあった。そのうえには字も絵も書いてはなかった。

　わたしはからかわれるような気がした。

「あすこの木のかげへ行って休んでからにしよう。そこでどういうふうにわたしがこれを使って、本を読むことを教えるか、話してあげよう」と親方は言って、わたしのびっくりしたような顔を笑(わら)いながら見た。

　わたしたちは木のかげへ来ると、背嚢(はいのう)を地べたに下ろして、そろそろひなぎくのさいている青草の上にすわった。ジョリクールはくさりを解(と)いてもらったので、

さっそく木の上にかけ上がって、くるみを落とすときのように、こちらのえだからあちらのえだをゆすぶってさわいでいた。犬たちはくたびれて回りに丸(まる)くなっていた。

親方はかくしからナイフを出して、いまの板きれの両側(りょうがわ)をけずって、同じ大きさの小板を十二本こしらえた。

「わたしはこの一本一本の板に一つずつの字をほってあげる」とかれはわたしの顔を見ながら言った。わたしはじっとかれから目を放さなかった。「おまえはこの字を形で覚(おぼ)えるのだ。それを一目見てなんだという

ことがわかれば、それをいろいろに組み合わせてことばにするけいこをするのだ。ことばが読めるようになれば、本を習うことができるのだ」

やがてわたしのかくしはその小さな木ぎれでいっぱいになった。それでＡＢＣ(アベセ)の字を覚(おぼ)えるのにひまはかからなかったけれども、読むことを覚えるのは別(べつ)の仕事であった。なかなか早くはいかないので、ときにはなぜこんなものを教わりたいと言いだしたかと思って、後悔(こうかい)した。でもこれは、わたしがなまけ者でもなく、負けおしみが強かったからである。

わたしに字を教えながら親方は、それをいっしょに

カピにも教えてみようかと思い立った。犬は時計から時間を探し出すことを覚えたくらいだから、文字を覚えられないことはなかった。それでカピとわたしは同級生になって、いっしょにけいこを始めた。犬はもちろん口で言えないから、木ぎれが残らず草の上にまき散らされると、かれは前足で、言われた文字をその中から拾い出して来なければならなかった。

　はじめはわたしもカピよりはずっと進歩が早かった。けれどわたしは理解こそ早かったが、物覚えは、犬のほうがよかった。犬は一度物を教わると、いつもそれを覚えて忘れることがなかった。わたしがまちがうと

親方はこう言うのである。
「カピのはうが先に読むことを覚えるよ、ルミ」
そう言うとカピはわかったらしく、得意になってしっぽをふった。
そこでわたしはくやしくなって気を入れて勉強した。それで犬がやっと自分の名前の四つの字を拾い出してつづることしかできないのに、わたしはとうとう本を読むことを覚えた。
「さて、おまえはことばを読むことは覚えたが、どうだね、今度は譜を読むことを覚えては」と親方が言った。

「譜を読むことを覚えると、あなたのように歌が歌えますか」とわたしは聞いた。

「ああ。そうするとおまえもわたしのように歌が歌いたいと思うのかい」と親方が答えた。

「とてもそんなによくはできそうもないと思いますけれども、少しは歌いたいと思います」

「じゃあわたしが歌を歌うのを聞くのは好きかい」

「ええ、わたしは、なによりそれが好きです。それはうぐいすの歌よりずっと好きです。けれどもまるでうぐいすの歌とはちがいますね。あなたが歌っておいでになると、ぼくは歌のとおりに泣きたくなることもあ

るし、笑（わら）いたくなることもあります。ばかだと思わないでください。あなたが静（しず）かにさびしい歌をお歌いになると、わたしはまたバルブレンのおっかあの所へ帰ったような気がするのです。目をふさいで聞いていると、またうちにいるおっかあの姿（すがた）が目にうかびますけれども、歌はイタリア語だからわかりません」

わたしはあお向いてかれを見た。かれの目にはなみだがあふれていた。そのときわたしはことばを切って、

「気にさわったのですか」とたずねた。

かれは声をふるわせながら言った。「いいや、気にさわるなんということはないよ。それどころかおまえ

は、わたしを遠い子どもだったむかしにもどしてくれた。そうだ、ルミや、わたしは歌を教えてあげよう。そうしておまえは情け深いたちだから、やはりその歌で人を泣かせることもできるし、人にほめられるようにもなるだろう」

かれは言いかけてふとやめた。わたしはかれがそのとき、そのうえに言うことを好まないらしいのがわかった。わたしにはかれがそんなに悲しく思うわけがわからなかった。でもあとになって、それはある悲しい事情から初めてわかった。いずれわたしの話の進んだとき、それを言うおりがあるであろう。

そのあくる日、かれは小さく木を切って文字を作ったと同様に音譜（おんぷ）をこしらえた。音譜はＡＢＣ（アベセ）より入りくんでいた。今度は習うのにもいっそう骨（ほね）も折（お）れたし、たいくつでもあった。あれほど犬に対してしんぼうのいい親方も、一度ならずわたしにはかんにんの緒（お）を切ったこともあった。かれはさけんだ。

「畜生（ちくしょう）に対しては、かわいそうな、口のきけないものだと思ってがまんするけれど、おまえではまったく気ちがいにさせられる」と、こうかれは言って、芝居（しばい）のように両手を空に上げて、急にまた下に下ろして、は

げしくももを打った。

　自分がおもしろいと思うと、まねをしてはおもしろがっているジョリクールは、今度も主人の身ぶりをまねていた。毎日わたしのけいこのときに、さるはいつもそばにいるので、わたしがつかえでもすると、そのたんびにがっかりした様子をして、かれが両うでを空に上げて、また下に下ろしては、ももを打つところを見ると、わたしはしょげずにはいられなかった。

「ご覧（らん）、ジョリクールまでが、おまえをばかにしている」と親方がさけんだ。

　わたしが思い切った子なら、さるがばかにしている

のは生徒ばかりではなく、先生までもばかにしているのだと言ってやりたかった。けれども失礼だと思ったし、こわさもこわいのでえんりょして、心のうちでそう思うだけで満足した。

とうとう何週間もけいこを続けて、わたしは親方が書いた紙から、曲を読むことができるようになった。もう親方も、両手を空に上げなかった。それどころかかえって、歌うたんびにほめてくれて、この調子でたゆまずやってゆけば、きっとえらい歌うたいになれると言ってくれた。

むろんこれだけのけいこが一日でできあがるはずは

なかった。何週間のあいだ何か月のあいだ、わたしのかくしはいつも小さな木ぎれで、いっぱいになっていた。

しかし、わたしの課業（かぎょう）は学校にはいっている子どものそれのように、規則（きそく）正しいものではなかった。親方が課業を授（さず）けてくれるのは、そのひまな時間だけであった。

毎日決まった道のりだけは歩いて行かなければならなかった。もっともその道のりは村と村との間が遠いか近いか、それによって長くもなり短くもなった。いくらかでも、収入（しゅうにゅう）のある機会（きかい）を見つけしだい、そこ

で止まって芝居(しばい)をうたなければならなかった。犬たちやジョリクール氏(し)に役々の復習(ふくしゅう)をもさせなければならなかった。朝飯(あさめし)も昼飯(ひるめし)もてんでんに自分で用意しなければならなかった。読書なり音楽なりの仕事は、つまりそういうもののすんだあとのことであった。まあいちばんよく教えてもちったのは、休憩(きゅうけい)の時間で、木の根かたや、小砂利(こじゃり)の山の上や、または芝生(しばふ)なり、道ばたの草の上が、みんなわたしの木ぎれをならべる机(つくえ)が代わりになった。

この教育法(きょういくほう)はふつうの子どもの受けるそれとは、少しも似(に)たところがなかった。ふつうの子どもなら、

ただ勉強するほかに仕事はないし、それでもかれらはしじゅうあたえられた宿題をやる時間がないといって、ぶつぶつ言うのである。

けれど、勉強に使う時間のあるなしよりも、もっとたいせつなものがあった。それはその仕事に専念するということであった。授かった課業を覚えるのは、覚えるために費される時間ではなくって、それは覚えたいと思う熱心であった。

幸いにわたしは、ぐるりに起こる出来事に心をうばわれることなしに、むちゅうに勉強のできるたちであった。もしそのじぶんわたしが、部屋の中に閉じこ

もって、両手で耳をふさいで、目を本にはりつけたようにしているのでなければ、勉強のできない生徒のようであったら、わたしになにができたろう、なにもできはしない。なぜというに、わたしには、閉じこもる部屋もなかった。往来に沿って前へ前へと進みながら、ときどきもうつまずいてたおれそうになるほど痛い足の先を、見つめ見つめしてゆかなければならなかった。

　だんだんわたしはおかげでいろんなことを覚えた。と同時に親方の授けてくれた課業以上に有益な長い旅行をした。わたしがバルブレンのおっかあの所にいたじぶんには、ごくやせっぽちな子どもであった。みん

ながわたしを見て言ったことばで、その様子はよくわかる。「町の子どもだ」と、バルブレンは言ったし、「ひどくひょろひょろした手足の子だ」と親方は言った。

　ところが親方のあとについて、広い青空の下に困難（こんなん）な生活を続（つづ）けているあいだに、わたしの手足は強くなり、肺臓（はいぞう）は発達（はったつ）し、皮膚（ひふ）は厚（あつ）くなり、ちょうどかぶとをかぶったように寒さをも暑さをもしのぐことができるようになった。

　こうして、このつらいお弟子（でし）修業（しゅぎょう）のおかげで、わたしは少年時代に、たいていの困難（こんなん）に打ち勝ってゆく力を養（やしな）うことのできたのは、あとで思えばひじょうな

幸福であった。

山こえて谷こえて

わたしたちはフランスの中央の一部、たとえばローヴェルニュ、ル・ヴレー、ル・リヴァレー、ル・ケルシー、ル・ルーエルグ、レ・セヴェンネ、ル・ラングドックというような土地土地をめぐって歩いた。

わたしたちの流行はしごく簡単であった。どこでもかまわずまっすぐに出かけて行って、あまりびんぼう

でない町だと見ると、まず行列を作る用意を始めて、犬たちに着物を着せかえてやり、ドルスの髪(かみ)にくしを入れてやる。カピが老兵(ろうへい)の役をやっているときは、目の上に包帯(ほうたい)をしてやる。最後(さいご)にいやがるジョリクールに大将(たいしょう)の軍服(ぐんぷく)を着せる。これがなによりいちばんやっかいな仕事であった。なぜというにこのさるは、これが仕事にかかるまえぶれだということを知りすぎるほど知っていて、なんでも着物を着させまいとするために、それはおかしな芸当(げいとう)を考え出すのであった。そこでわたしはしかたがないからカピを加勢(かせい)に呼(よ)んで来て、二人がかりでどうやらこうやらおさえつけて、

言うことを聞かせるのであった。

さて一座残らずの仕度ができあがると、ヴィタリス親方は例のふえでマーチをふきながら村の中へはいって行く。

そこでわれわれのあとからついて来る群衆の数が相応になると、さっそく演芸を始めるが、ほんの二、三人気まぐれな冷やかしのお客だけだとみると、わざわざ足を止める値打ちもないので、かまわずずんずん進んで行く。

一つの町に五、六日も続けて滞留いているようなときには、カピがついていさえすれば、親方はわたし

を一人手放して外へ出してくれた。親方はつまりわたしをカピに預けたのである。

「おまえは同じ年ごろの子どもがたいがい学校に行っている時代に、ひょんなことからフランスの国じゅうを歩く回り合わせになっているのだ」と親方はあるときわたしに言った。「だから学校へ行く代わりに、自分で目を開いて、よくものを見て覚えるのだ。見てわからないものがあったら、かまわずにわたしに質問するがいい。わたしだってなんでも知っているわけではないが、一とおりおまえの知りたい心を満足させるだけのことはできるだろう。わたしもいまのような人間

でばかりはなかった。かなりむかしはいろいろほかの気のきいたことも知っていた」

「どんなことを」

「それはまたいつか話そうよ。ただまあ、むかしから犬やさるの見世物師でもなかったことだけ知ってもらえばよい。なんでも人間は心がけしだいで、いちばん低い位置からどんなにも高い位置に上ることができる。これも覚えていてもらいたい。それでおまえが大きくなったとき、どうかまあ、気のどくな旅の音楽師が自分を養い親の手から引きさらって行ったときには、つらくもこわくも思ったようなものも、つまりそれが

よかったのだと思って、喜んでくれるときがあればいいと思うのだ。まあ、こうして境遇の変わるのが、つまりはおまえのために悪くはないかもしれないのだからな」

いったいこの親方はもとはなんであったろう、わたしは知りたいと思った。

さてわたしたちはだんだんめぐりめぐって行って、ローヴェルニュからケルシーの高原にはいった。これはおそろしくだだっ広くってあれていた。小山が波のようにうねっていて、開けた土地もなければ、大きな樹木もなかったし、人通りはごく少なかった。小川も

なければ池もない。所どころ水がかれきって、石ばかりの谷川が目にはいるだけであった。その原っぱのまん中にバスチード・ミュラーという小さな村があった。わたしたちはこの村のある宿屋の物置きに一夜を過ごした。

「そうだ、この村だったよ」とヴィタリス親方が言った。「しかもこの同じ宿屋だったかもしれないが、のちに何万という軍勢を率いる大将がここで生まれたのだ。初めはうまやのこぞうから身を起こして、公爵がなり、のちには王さまになった。名前をミュラーと言った。みんながその人を英雄と呼んで、この

村をもその名前で呼ぶことになった。わたしはその男を知っていた。たびたびいっしょに話をしたこともあった」

　わたしもさすがにことばをはさまずにはいられなかった。

「うまやのこぞうだったときにですか」

「いいや」と親方は笑いながら答えた。「もう王さまだったじぶんにだよ。今度初めてわたしはこの地方にやって来たのだ。わたしはその男が王さまだったナポリの宮殿で知り合いになったのだ」

「あなたは王さまと知り合いなのですか」

わたしのこういった調子は少しこっけいであったとみえて、親方はさもゆかいそうに笑(わら)いだした。

　わたしたちはうまやの戸の前のこしかけにこしをかけて、昼間の太陽のぬくもりのまだ残(のこ)っているかべに背中(せなか)をおしつけていた。われわれの頭の上におっかぶさっている大きないちじくの木の中で夕ぜみが鳴いていた。母屋(おもや)の屋根の上には、いま出たばかりの満月(まんげつ)が静(しず)かに青空に上がっていた。その日は昼間こげるように暑かったので、それがいっそう心持ちよく思われた。

「おまえ、とこにはいりたいか」と親方はたずねた。

「それともミュラー王の話でもしてもらいたいと思う

か」

「ああ、どうぞそのお話をしてください」

そこで親方はわたしとこしかけの上にいるあいだ、長物語をしてくれた。親方が話をしているうちに、だんだん青白い月の光がななめにさしこんできた。わたしはむちゅうになって耳を立てた。両方の目をすえてじっと親方の顔を見ていた。

わたしはまえにこんなむかし物語などを聞いたことがなかった。だれがそんな話をして聞かせよう。バルブレンのおっかあはとても話すわけがない。かの女はそんな話は少しも知らなかった。かの女はシャヴァノ

ンで生まれて、たぶんはそこで死ぬのだろう。かの女の心は目で見るかぎりをこえて先へは行かなかった。それもアンドゥーズ山の頂(いただき)から見晴らす地平線上に限(かぎ)られていた。

わたしの親方は王さまに会ったことがある。その王さまはかれと話をした。いったいこの親方は若(わか)いときなんであったろう。それがどうしてこの年になって、いまのような身の上になったのだろう……

わたしの、活発に鋭敏(えいびん)に働(はたら)く幼(おさな)い想像(そうぞう)と好奇心(こうきしん)は、この一つのことにばかり働(はたら)いた。

七里ぐつをはいた大男

南部地方の高原のかわききった土地をはなれてのち、わたしたちは、いつも青あおとした谷間の道を通って、旅を続(つづ)けた。これはドルドーニュ川の谷で、わたしたちは毎日少しずつこの谷を下りて行った。なにしろこの地方は土地が豊(ゆた)かで、住民(じゅうみん)も従(したが)って富貴(ふうき)であったから、わたしたちの興行(こうぎょう)の度数もしぜん多くなり、例(れい)のカピのおぼんの中へもなかなかたくさんのお金が投げこまれた。

ふと空中に、ふうわりとちょうど霧（きり）の中にくもの糸でつり下げられたように、橋が一つ、大きな川の上にかかっていた。川はその下にごくおだやかに流れていた——これはキュブザックの橋で、川はドルドーニュ川であった。

あれた町が一つ、そこには古いおほりもあり、岩屋もあり、塔（とう）もあった。修道院（しゅうどういん）のあれたへいの中には、せみが雑木（ぞうき）の中で、そこここに止まって鳴いていた——これはセンテミリオン寺であった。

けれどそれもこれもみんなわたしの記憶（きおく）の中でこんがらがって、ぼやけてしまっているが、そののちほど

なく、ひじょうに強い印象(いんしょう)をあたえた景色(けしき)が現(あらわ)れた。それは今日でもありありと、全体のうきぼりがさながら目の前に現れるくらいあざやかであった。

わたしたちはあるごくびんぼうな村に一夜を明かして、あくる日夜の明けないうちから出発した。長いあいだわたしたちは、ほこりっぽい道を歩いて来て、両側(りょうがわ)にはしじゅうぶどう畑ばかりを見て来たのが、ふと、それはあたかも目をさえぎっていた窓かけがぱらりと落ちたように、眼界(がんかい)が自由に開けた。

大きな川が一つ、わたしたちのそのとき行き着いた丘(おか)のぐるりをゆるやかに流れていた。この川のはるか

向こうに不規則にゆがんだ地平線までは、大都市の屋根や鐘楼が続いて散らばっていた。どれが家だろう。どれがえんとつだろう。中でいちばん高い、いちばん細いのが、五、六木、柱のように空につっ立って、そのてっぺんからまっ黒なけむりをふき出しては、風のなぶるままに、たなびいて、町の真上に黒いガスの雲をわかしていた。川の上には、ちょうど中ほどの河岸通りに沿って数知れない船が停泊して、林のようにならんだ帆柱や、帆づなや、それにいろいろの色の旗を風にばたばた言わせながらおし合いへし合いしていた。がんがんひびく銅や鉄の音やつちの音、そういう物音

の中に、河岸(かし)通りをからから走って行くたくさんの車の音が交じって聞こえた。

「これがボルドーだ」と親方がわたしに言った。

わたしのような子どもにとっては――その年までせいぜいクルーズのびんぼう村か、道みち通って来たいくつかのちっぽけな町のほかに見たことのない子どもにとっては、これはおとぎ話の国であった。

なにを考えるともなく、わたしの足はしぜんと止まった。わたしはじっと立ち止まったまま、前のほうをながめたり、後ろのほうをながめたり、ただもうぼんやりそこらを見回していた。

しかし、ふとわたしの目は一点にとどまった。それは川の面をふさいでいるおびただしい船であった。

つまりそれはなんだかわけのわからない、ごたごたした活動であったが、それが自分でもはっきりつかむことのできない、ひじょうに強い興味をわたしの心にひき起こした。

いくそうかの船は帆をいっぱいに張って、一方にかたむきながら、ゆうゆうと川を下って行くと、こちらからは反対に上って行った。島のように動かずに止まっているものもあれば、どうして動いているかわからないで、くるくる回っている船もあった。最後にも

う一つ、帆柱もなければ、帆もなしに、ただえんとつの口から黒いけむりのうずを空に巻きながら、黄ばんだ水の上に白いあわのあぜを作りながら、ずんずん走っているものもあった。

「ちょうどいまが満潮だ」と親方はこちらから問いかけもしないのに、わたしのおどろいた顔に答えて言った。

「長い航海から帰って来た船もある。ほら、ペンキがはげてさびついたようになっているだろう。あすこへは港をはなれて行く船がある。川のまん中にいる船が満潮にかじを向けるようなふうに、いかりの上でくる

くる回っている。けむりの雲の中を走って行く船は引き船だ」

わたしにとってはなんということばであろう。なんという目新しい事実であろう。

わたしたちが、パスチードとボルドーを通じている橋の所へ来るまでに、親方はわたしが聞きたいと思った質問の百分の一に答えるだけのひまもなかった。

これまでわたしたちはけっしてとちゅうの町で長逗留をすることはなかった。なぜというに、しじゅう見物をかえる必要から、しぜん毎日興行の場所をも変えなければならなかった。それに『名高いヴィタ

リス親方の一座の役者では、狂言の芸題をいろいろにかえてゆく自由がきかなかった。『ジョリクール氏の家来』『大将の死』『正義の勝利』『下剤をかけた病人』、そのほか三、四種の芝居をやってしまえば、もうおしまいであった。それで一座の役者の芸は種切れであった。そこでまた場所を変えて、まだ見ない見物の前で、これらの狂言を、相変わらず、『下剤をかけた病人』か、『正義の勝利』をやらなければならなかった。

　しかし、ボルドーは大都会である。見物は容易に入れかわったし、場所さえ変えると毎日三、四回の興行をすることができた。それでもカオールに行ったとき

のように、『いつでも同じことばかりだ』とどなられるようなことはなかった。

　ボルドーを打ち上げてから、わたしたちはポーへ行かなければならなかった。そのとちゅうでは大きなさばくをこえなければならなかった。さばくはボルドーの町の門からピレネーの連山まで続いていて、『ランド』という名で呼ばれていた。

　もうわたしもおとぎ話にある若いはつかねずみのように、見るもの聞くものが驚嘆や恐怖の種になるというようなことはなかった。それでもわたしはこの旅行の初めから、親方を笑わせるような失敗を演じて、

ポーに着くまで、そのためなぶられどおしになぶられるほかはなかった。

　わたしたちは七、八日のちボルドーを出発した。ガロンヌ川沿岸の土地を回ったのち、ランゴンで川をはなれて、モン・ド・マルサンへ行く道をとった。その道はつま先下がりに下がっていった。もうぶどう畑もなければ、牧場もない。果樹園もない、ただまつと灌木の林があるだけであった。やがて人家もだんだん少なくなり、だんだんみすぼらしくなった。とうとうわたしたちは大きな高原のまん中にいた。所どころ高低はあっても、日の届くかぎり野原であった。畑地

もなければ森もない、遠方から見るとただ一色のねずみ色の土地であった。道の両側（りょうがわ）がうす黒いこけや、しなびきった灌木（かんぼく）や、いじけたえにしだでおおわれていた。

「わたしたちはランドの中に来たのだ」と親方が言った。「このさばくのまん中まで行くには二十里か二十五里（八十キロか百キロ）行かなければならない。しつかり足に元気をつけるのだぞ」

　元気をつけなければならないのは足だけではなかった。頭にも、胸（むね）にも、元気をつけなければならなかった。なぜといって、もう終わる時のないように広いさ

ぼくの道を歩いて行くとき、だれでもぼんやりして、わけのわからない悲しみと、がっかりしたような心持ちに胸（むね）がふさがるのであった。

そののちもわたしはたびたび海上の旅をしたが、いつも大洋のまん中で帆（ほ）かげ一つ見えないとき、わたしはやはりこの無人（むじん）の土地で感じたとおりの言いようもない悲しみを、また経験（けいけん）したことがあった。

大洋の中にいると同様に、わたしたちの日は遠い秋霧（あきぎり）の中に消えている地平線まで届（とど）いていた。ひたすら広漠（こうばく）と単調（たんちょう）が広がっている灰色（はいいろ）の野のほかに、なにも目をさえぎるものがなかった。

わたしたちは歩き続けた。でも機械的にときどきぐるりと見回すと、やはりいつまでも同じ場所に立ち止まったまま、少しも進んでいないように思われた。目に見える景色はいつでも同じことであった。相変わらずの灌木、相変わらずのえにしだ、相変わらずのこけであった。風がふくとやわらかなわらびの葉がなよなよと動いて、まるで波の走るように高く低く走った。

ずいぶん長いあいだをおいて、たまさか、わたしたちはちょいとした森を通りぬけることがあったが、その森はふつうの森のように、とちゅうの興をそえるようなものではなかった。いつもまつの木の森で、そ

のえだはこずえまで風に打ち落とされていた。幹に長く、深い傷がえぐれていた。その赤い傷口からすきとおったまつやにのなみだが流れ出していた。風が傷口からふきこむと、いかにも悲しそうな音楽を奏して、この気のどくなまつがみずから痛みをうったえる声のように聞かれた。

わたしたちは朝から歩き続けていた。親方は夜までにはどこかとまれる村に着くはずだと言っていた。けれど夜になっても、その村らしいものは見えなかったし、人家に近いことを知らせるけむりも上がらなかった。

わたしはくたびれたし、ねむたかった。わたしたちは前途(ぜんと)はただ原っぱを見るだけであった。親方もやはりくたびれていた。かれは足を止めて道ばたに休もうとした。

わたしはそれよりも、左手にあった小山に登って、村の火が見えるかどうか見たいと思った。

わたしはカピを呼(よ)んだが、カピもやはりくたびれていたので、呼んでも聞こえないふりをしていた。これはいつでも言うことを聞きたくないときにカピのやることであった。

「おまえ、こわいのか」とヴィタリスは言った。

この質問がすぐにわたしを奮発さして、一人で行く気を起こさせた。

夜はすっかり垂れまくを下ろした。月もなかった。空の上には星の光がうすもやの中にちらちらしていた。歩いて行くと、そこらのさまざまな物がぼんやりした光の中できみょうな幽霊じみた形をしているように見えた。野生のえにしだが、頭の上にぬっと高く延びて、まるでわたしのほうへ向かって来るように見えた。上へ登れば登るほどいばらや草むらはいよいよ深くなって、わたしの頭をこして、上でもつれ合っていた。ときどきわたしはその中をくぐってぬけて行かなければ

ならなかった。

けれどわたしはぜひも頂上(ちょうじょう)まで登らなければならないと決心した。でもやっとのことと登ってみれば、どちらを見ても明かりは見えなかった。ただもうきみょうな物の形と、大きな樹木(じゅもく)が、いまにもわたしをつかもうとするようにうでを延(の)ばしているだけであった。

わたしは耳を立てて、犬の声か、雌牛(めうし)のうなり声でも聞こえはしないかと思ったが、ただもうしんと静(しず)まり返っていた。

どうかして聞き取ろうと思うから、耳をすませて、自分の立てる息の音さええんりょをして、わたしはし

ばらくじっと立っていた。

　ふとわたしはぞくぞく身ぶるいがしだした。このさびしい、人気(ひとけ)のない荒野原(あらのはら)の静(しず)けさが、わたしをおびやかしたのであった。なんにわたしはおびえたのであったか、たぶんあまり静(しず)かなことが……夜が……とにかく言いようのない恐怖(きょうふ)がわたしの心にのしかかるようにしたのであった。わたしの心臓(しんぞう)は、まるでそこになにか危険(きけん)がせまったようにどきついた。

　わたしはこわごわあたりを見回した。するとそのとき、遠方に大きな姿(すがた)をしたものが木の中で動いているのを見た。それといっしょにわたしは木のえだのが

さがさいう音を聞いた。

わたしは無理（むり）に、それは自分の気の迷（まよ）いだと思いこもうとした。きっとそれは木のえだか灌木（かんぼく）のかげかなんぞだったのだ。

けれど、そのとき風は、木の葉を動かすほどの軽い風もふいてはいなかった。はげしい風でふかれるか、だれかがさわらないかぎり動くはずはなかったのである。

「だれかしら」

いや、この自分のほうを目ざしてやって来る大きな影法師（かげぼうし）が人間であるはずがなかった——わたしのまだ

知らないなにかのけものか、またはおそろしい大きな夜鳥か、大きなばけぐもが木の上をとびこえて来るのだ。なんにしても確(たし)かなことは、この化け物はおそろしく長い足をしていて、ばかばかしく早く飛んで来るということであった。

それを見るとわたしはあわてて、あとをも見ずに、足に任(まか)せて小山をかけ下りて、ヴィタリスのいる所までにげようとした。

けれどきみょうなことに、登るときだけに早くわたしの足が進まなかった。わたしはいばらや、雑草(ざっそう)のやぶの中に転(ころ)がって、二足ごとにひっかかれた。

ちくちくするいばらの中からはい出して、わたしはふと後ろをふり向いてみた。怪物（かいぶつ）はいよいよ近くにせまっていた。もういまにも頭の上にとびかかりそうになっていた。

運よく野原はそういばらがなかったので、いままでよりは、早くかけだすことができた。

でもわたしがありったけの速力（そくりょく）で、競争（きょうそう）しても、その怪物（かいぶつ）はずんずん追いぬこうとしていた。もう後ろをふり返る必要（ひつよう）はなかった。それがわたしのすぐ背中（せなか）にせまっていることはわかっていた。

わたしは息もつけなかった。競争でつかれきってい

た。ただはあすう、はあすう言っていた。しかし最後の大努力をやって、わたしは転げこむように親方の足もとにかけこんだ。三びきの犬はあわててはね起きて、大声でほえた。わたしはやっと二つのことばをくり返した。

「化け物が、化け物が」

犬たちのけたたましいほえ声よりも高く、はちきれそうな大笑いの声を聞いた。それと同時に親方は両手でわたしの肩をおさえて、無理に顔を後ろにふり向けた。

「おばかさん」とかれはさけんで、まだ笑いやめなかっ

た。「まあよく見なさい」
そういうことばよりも、そのけたたましい笑い声がわたしを正気に返らせた。わたしは片目ずつ開けてみた。そうして親方の指さすほうをながめた。
あれほどわたしをおどかした怪物はもう動かなくなって、じっと往来に立ち止まっていた。
その姿を見ると、正直の話わたしはまたふるえだした。けれど今度はわたしも親方や犬たちのそばにいるのだ。草やぶのしげった中に独りぼっちいるのではなかった……わたしは思い切って目を上げて、じっとその姿を見つめた。

けものだろうか。
人だろうか。
人のようでもあって、胴はあるし、頭も両うでもあった。
けものらしくもある。けれどもかぶっていた毛むくじゃらな身の皮と、それをのせているらしい二本の長細いすねは、それらしい。
夜はいよいよ暗かったが、この黒い影法師(かげぼうし)は星明かりにはっきりと見えた。
わたしはしばらく、それがなんだかまだわからずにいたのであったが、親方はやがてその影法師に向かっ

て話をしかけた。

「まだ村にはよほど遠いでしょうか」と、かれはていねいにたずねた。

話をしかけるところから見れば人間だったか。

だがそれは返事はしないで、ただ黙った。その笑い声は鳥の鳴き声めいていた。

するとけものかな。

主人はやはり問いを続(つづ)けた。

こうなると、それが今度口をきいて返事をしたら、やはり人間にちがいなかった。

ところでわたしのびっくりしたことには、その怪物(かいぶつ)

は、この近所には人家はないが、ひつじ小屋は一けんあるから、そこへ連れて行ってやろうと言った。
おやおや、口がきけるのに、なぜけもののような前足があるのだろう。
わたしに勇気があったら、その男のそばへ行って、どんなふうに前足ができているか見て来るところであったろうが、わたしはまだ少しこわかった。そこで背嚢をしょい上げてひと言も言わずに親方のあとについて行った。
「これでおまえ、正体がわかったろう」と親方は言って、道みち歩きながらも笑っていた。

「でもぼくはまだなんだかわかりません。じやあこのへんには大男がいるのですか」
「そうさ。竹馬に乗っていれば大男にも見えるさ」
そこでかれはわたしに説明してくれた。砂地や沼沢が多いランド地方の人は、沼地を歩くとき水にぬれないように、竹馬に乗って歩くというのであった。なんてわたしはばかだったのであろう。
「これでこのへんの人が、七里ぐつをはいた大男になって、子どもをこわがらせたわけがわかったろうね」

裁判所（さいばんしょ）

ポー市にはゆかいな記憶（きおく）がある。そこは冬ほとんど風のふかない心持ちのいい休み場であった。

わたしたちはそこに冬じゅういた。金もずいぶんたくさん取れた。お客はたいていい子どもたちであったから、同じ演芸（えんげい）を何度も何度もくり返してやってもあきることがなかった。金持ちの子どもたちで、多くはイギリス人とアメリカ人の子どもであった。ぽちゃぽちゃとかわいらしく太った男の子、それに、大きな優（やさ）しい、ドルスの目のような美しい目をした女の子たち

であった。そういう子どもたちのおかげでわたしはアルバートだのハントリだのという菓子(かし)の味を覚(おぼ)えた。なぜというに子どもたちはいつでもかくしにいっぱいお菓子をつめこんで来ては、ジョリクールと犬とわたしに分けてくれたからであった。

けれども春が近くなるに従(したが)って、お客の数はだんだん少なくなった。芝居(しばい)がすむと一人ずつまた二人ずつ、子どもたちはやって来て、ジョリクールとカピとドルスに握手(あくしゅ)をして行った。みんなさようならを言いに来たのであった。そこでわたしたちもまたなつかしい冬の休息所を見捨(みす)てて、またもや果(は)て知(し)れない

漂泊（ひょうはく）の旅に出て行かなければならなかった。それはいく週間と知らない長いあいだ、谷間をぬけ山をこえた。いつもピレネー連山（れんざん）のむらさき色のみねを横に見た。それはうずたかくもり上がった雲のかたまりのように見えていた。

　さてある晩（ばん）わたしたちは川に沿（そ）った豊（ゆた）かな平野の中にある大きな町に着いた。赤れんがのみっともない家が多かった。とんがった小砂利（こじゃり）をしきつめた往来（おうらい）が、一日十二マイル（約十九キロ）も歩いて来た旅行者の足をなやました。親方はわたしに、ここがツールーズの町だと言って、しばらくここに滞留（たいりゅう）するはずだと

話した。
例によってそこに着いていちばん初めにすることは、あくる日の興行につごうのいい場所を探すことであった。
つごうのいい場所はけっして少なくはなかったが、とりわけ植物園の近傍（近所）のきれいな芝生には、大きな樹木が気持ちのいいかげを作っていて、そこへ広い並木道がほうぼうから集まっていた。その並木道の一つで第一回の興行がすることにした。すると初日からもう見物の山を築いた。
ところで不幸なことに、わたしたちが仕度をしてい

るあいだ、巡査(じゅんさ)が一人そばに立っていて、わたしたちの仕事を不快(ふかい)らしい顔で見ていた。その巡査はおそらく犬がきらいであったか、あるいはそんな所にわれわれの近寄(ちかよ)ることをふつごうと考えたのか、ひどくふきげんでわたしたちを追いはらおうとした。

　追いはらわれるままにわたしたちはすなおに出て行けばよかったかもしれなかった。わたしたちは巡査にたてをつくほどの力はないのであったが、しかし親方はそうは思わなかった。

　かれはたかが犬を連(つ)れていなかを興行(こうぎょう)いて回る見世物師(みせものし)の老人(ろうじん)ではあったが、ひじょうに気位(きぐらい)が高

かったし、権利の思想をじゅうぶんに持っていたかれは、法律にも警察の規律にも背かないかぎりかえって警察から保護を受けなければならないはずだと考えた。そこで巡査が立ちのいてくれと言うと、かれはそれを拒絶した。

もっとも親方はひじょうにていねいであった。親方があまりはげしくおこらないとき、または他人をすこし愚弄（ばかにする）しかけるときするくせで、まったくかれはそのイタリア風の慇懃（ばかていねい）を極端に用いていた。ただ聞いていると、かれはなにか高貴な有力な人物と応対しているように思われた

かもしれなかった。
「権力を代表せられるところの閣下よ」とかれは言って、ぼうしをぬいでていねいに巡査におじぎをした。「閣下は果たして、右の権力より発動しまするところのご命令をもって、われわれごときあわれむべき旅芸人が、公園においていやしき技芸を演じますることを禁止せられようと言うのでございましょうか」
巡査の答えは、議論の必要はない、ただだまってわたしたちは服従すればいいというのであった。
「なるほど」と親方は答えた。「わたくしはただあなたがいかなる権力によって、このご命令をお発しに

なったか、それさえ承知いたしますれば、さっそくおおせつけに服従いたしますことを、つつしんで誓言いたしまする」

この日は巡査も背中を向けて行ってしまった。親方はぼうしを手に持ってこしを曲げたまま、にやにやしながら、旗を巻いて退く敵に向かって敬礼した。

けれどその翌日も、巡査はまたやって来た。そうしてわたしたちの芝居小屋の囲いのなわをとびこえて、興行なかばにかけこんで来た。

「この犬どもに口輪をはめんか」と、かれはあらあらしく親方に向かって言った。

「犬に口輪をはめろとおっしゃるのでございますか」

「それは法律の命ずるところだ。きさまは知っているはずだ」

このときはちょうど『下剤をかけた病人』という芝居をやっている最中でツールーズでは初めての狂言なので、見物もいっしょうけんめいになっていた。

それで巡査の干渉に対して、見物がこごとを言い始めた。

「じゃまをするない」

「芝居をさせろよ、おまわりさん」

親方はそのときまず見物のさわぐのをとどめて、さ

て毛皮のぼうしをぬぎ、そのかざりの羽根が地面の砂と、すれすれになるほど、三度まで大げさなおじぎを巡査に向かってした。

「権力を代表せられる令名高き閣下は、わたくしの一座の俳優どもに、口輪をはめろというご命令でございますか」

とかれはたずねた。

「そうだ。それもさっそくするのだ」

「なに、カピ、ゼルビノ、ドルスに口輪をはめろとおっしゃるか」親方は巡査に向かって言うよりも、むしろ見物に対して聞こえよがしにさけんだ。「さてさてこ

れは皮肉なお考えですな。なぜと申せば、音に名高き大先生たるカピ君（ぎみ）が、鼻の先に口輪をかけておりましては、どうして不幸（ふこう）なるジョリクール氏（し）が服すべき下剤（げざい）の調合を命ずることができましょう。物もあろうに口輪（くちわ）などとは、氏が医師（いし）たる職業（しょくぎょう）がふさわしからぬ道具であります」

この演説（えんぜつ）が見物をいっせいに笑（わら）わした。子どもたちの黄色い声に親たちのにごった声も交じった。親方はかっさいを受けると、いよいよ図に乗って弁（べん）じ続（つづ）けた。

「さてまたかの美しき看護婦（かんごふ）ドルス嬢（じょう）にいたしましても、ここに権力（けんりょく）の残酷（ざんこく）なる命令（めいれい）を実行いたしまし

たあかつきには、いかにしてあの巧妙(こうみょう)なる弁舌(べんぜつ)をもって、病人に勧(すす)めてよくその苦痛(くつう)を和(やわら)ぐる下剤(げざい)を服用させることができましょうや。賢明(けんめい)なる観客諸君(かんきゃくしょくん)のご判断(はんだん)をあおぎたてまつります」

見物人の拍手(はくしゅ)かっさいと笑(わら)い声(ごえ)で、しかしその答えはじゅうぶんであった。みんなは親方に賛成(さんせい)して巡査(じゅんさ)を嘲弄(ちょうろう)した。とりわけジョリクールがかげでしかめっ面(つら)をするのをおもしろがっていた。このさるは『権力(けんりょく)が代表せられる令名(れいめい)高き閣下(かっか)』の真後(まうし)ろに座(ざ)をかまえてこっけいなしかめっ面をして見せていた。巡査(じゅんさ)は両うでを組んで、それからまた放して、げんこ

つをこしに当てて、頭を後ろに反（そ）らせていた。そのとおりをさるはやっていた。見物人らはおかしがって、きゃっきゃっと言っていた。

巡査はそのときふとなにをおもしろがっているのか見ようとして後ろをふり向いた。するとしばらくのあいださると人間とはたがいににらみ合わなければならなくなった。どちらが先に目をふせるか問題であった。

群衆（ぐんしゅう）はおもしろがって金切り声を上げていた。

「きさまの飼（か）い犬（いぬ）があすも口輪（くちわ）をしていなかったらすぐきさまを拘引（こういん）する。それだけを言いわたしておく」

「さようなら閣下（かっか）。ごきげんようしゅう。いずれ明

日」と親方は言って頭を下げた。
巡査が大またに出て行くと、親方はこしをほとんど地べたにつくほどに曲げて、からかい面に敬礼していた。そして芝居は続けて演ぜられた。
わたしは親方が犬の口輪を買うかと思っていたけれども、かれはまるでそんな様子はなかった。その晩は巡査とけんかをしたことについては一言の話もなしに過ぎた。
わたしはとうとうがまんがしきれなくなって、こちらからきりだした。
「あしたもしカピが芝居の最中に、口輪を食い切る

ようなことがあるといけませんから、まえからそれをはめておいて慣(な)らしてやらないでもいいでしょうか。わたしたちはカピによくはめているように教えこむことができるでしょう」

「おまえはあれらの小さな鼻の上にそんな物をのせたいとわたしが思っているというのか」

「でも巡査(じゅんさ)がやかましく言いますから」

「おまえはんのいなかの子どもだな。百姓(ひゃくしょう)らしくおまえは巡査をこわがっているのか。心配するなよ。わたしはあしたうまい具合に取り計らって、巡査がわたしをつかまえることのできないようにするし、そのう

え犬がふゆかいな目に会わないようにしてやるつもりだ。それに見物も少しはうれしがるだろう。この巡査(じゅんさ)はおかげでわたしたちによけいな金もうけをさせてくれることになるだろう。おまけにあいつは、わたしがあいつのためにしくんでおいた芝居(しばい)で道化役(どうけやく)を演(えん)じることになるだろう。さてあしたは、おまえはあそこへジョリクールだけを連(つ)れて行くのだ。おまえはなわ張(ば)りをして、ハープで二、三回ひくのだ。やがておおぜい見物が集まって来れば、巡査(じゅんさ)めさっそくやって来るだろう。そこへわたしは犬を連(つ)れて現(あらわ)れることにする。それから茶番が始まるのだ」

わたしはそのあくる日一人で行きたいことは少しもなかったけれども、親方の言うことには服従（ふくじゅう）しなければならないと思った。

さてわたしはいつもの場所へ出かけて、囲（かこ）いのなわを回してしまうと、さっそく曲をひき始めた。見物はぞろぞろほうぼうから集まって来て、なわ張（ば）りの外に群（むら）がった。

このごろではわたしもハープをひくことを覚（おぼ）えたし、なかなかじょうずに歌も歌った。とりわけわたしはナポリ小唄（こうた）を覚（おぼ）えて、それがいつも大かっさいを博（はく）した。けれどもきょうだけは見物がわたしの歌をほめるため

に来たのでないことはわかっていた。

きのう巡査との争論を見物した人たちは残らず出て来たし、おまけに友だちまで引っ張って来た。いったいツールーズの土地でも巡査はきらわれ者になっていた。それで公衆はあのイタリア人のじいさんがどんなふうにやるか。「閣下、いずれ明日」と言った捨てぜりふの意味がなんであったか、それを知りたがっていたのである。

それで見物の中には、わたしがジョリクールと二人だけなのを見て、わたしの歌っている最中口を入れて、イタリアのじいさんは来るのかと言ってたずねる者も

あった。

わたしはうなずいた。

親方は来ないで、先に巡査（じゅんさ）がやって来た。ジョリクールがまっ先にかれを見つけた。

かれはさっそくげんこつをこしの上に当てて、こっけいないばりくさった様子で、大またに歩き回った。群衆（ぐんしゅう）はかれの道化芝居（どうけしばい）をおかしがって手をたたいた。

巡査はこわい目つきをしてわたしをにらみつけた。

いったいこの結末（けつまつ）はどうなるだろう。わたしは少し心配になってきた。ヴィタリス親方がいてくれれば、巡査（じゅんさ）に答えることもできよう。巡査がわたしに立ちの

けと命令したら、わたしはなんと言えばいいのだ。

巡査はなわ張りの外を行ったり来たりしていた。それもわたしのそばを通るときには、なんだか肩ごしにわたしをにらみつけるようにした。それでいよいよわたしは気が気でなかった。

ジョリクールは事件の重大なことを理解しなかった。そこでおもしろ半分なわ張りの中で巡査とならんで歩きながら、その一挙一動を身ぶりおかしくまねていた。おまけにわたしのそばを通るときには、やはり巡査のするように首を曲げて、肩ごしににらみつけた。その様子がいかにもこっけいなので、見物はなおのこと

どっと笑(わら)った。

わたしはあんまりやりすぎると思ったから、ジョリクールを呼(よ)び寄(よ)せた。けれどもかれはとても言うことを聞くどころではなかった。わたしがつかまえようとすると、ちょろちょろにげ出して、す早く身をかわしては、相変(あいか)わらずとことこ歩いていた。

どうしてそんなことになったかわからなかったが、たぶん巡査(じゅんさ)はあんまり腹(はら)を立てて気がちがったのであろう。なんでもわたしがさるをけしかけているように思ったとみえて、いきなりなわ張(ば)りの中へとびこんで来た。

と思うまにかれはとびかかって来て、ただ一打ちでわたしを地べたの上にたたきたおした。

わたしが目を開いて起き上がろうとすると、ヴィタリス老人（ろうじん）はどこからとび出して来たものか、もうそこに立っていた。かれはちょうど巡査（じゅんさ）のうでをおさえたところであった。

「わたしはあなたがその子どもを打つことを止めます。なんというひきょうなまねをなさるのです」とかれはさけんだ。

しばらくのあいだ二人の人間はにらみ合って立っていた。

巡査はおこってむらさき色になっていた。

親方はどうどうとした様子であった、かれは例の美しいしらが頭をまっすぐに上げて、その顔には憤慨と威圧の表情がうかべていた。その顔つきを見ただけで巡査を地の下にもぐりこませるにはじゅうぶんであった。

けれどもかれはどうして、そんなことはしなかった。かれは両うでを広げて親方ののど首をつかまえて、乱暴に前へおし出した。

ヴィタリス親方はよろよろとしてたおれかけたが、す早く立ち直って、平手で巡査のうで首を打った。

親方はがんじょうな人ではあったが、なんといっても老人であった。巡査のほうは年も若いし、もっとがんじょうであった。このけんかがどうなるか、長くは取っ組めまいと、わたしははらはらしていた。けれども取っ組むまでにはならなかった。

「あなたはどうしようというのです」

「わたしといっしょに来い」と巡査は言った。「拘引するのだ」

「なぜあの子を打ったのです」と親方は質問した。

「よけいなことを言うな。ついて来い」

親方は返事をしないで、わたしのほうをふり向いた。

「宿屋へ帰っておいで」とかれは言った。「犬といっしょに待っておいで。あとで口上で言って寄こすから（ことずてをするから）」

かれはそのうえもうなにも言う機会がなかった。巡査はかれを引きずって行った。

こんなふうにして、親方が余興にしくんだ狂言はあっけなく結末がついた。

犬たちは初め主人のあとについて行こうとしたけれども、わたしが呼び返すと、服従に慣らされているので、かれらはわたしのほうへもどって来た。気をつけてみるとかれらは口輪をはめていた。けれどもそれは

ふつうの金あみや金輪ではなくって、ただ細い絹糸を二、三本、鼻の回りに結びつけて、あごの下にふさを垂らしてあった。白いカピは赤い糸を結んでいた。黒いゼルビノは白い糸を結んでいた。そうしてねずみ色のドルスは水色の糸を結んでいた。気のどくな親方はこんなふうにして、いかめしい権力の命令を逆に喜劇の種に利用しようとしていたのである。

群衆はさっそく散ってしまった。二、三人ひま人が残っていまの事件を論じ合っていた。

「あのじいさんがもっともだよ」

「いや、あの男がまちがっている」

「なんだって巡査は子どもを打ったのだ。子どもはなにもしやしなかった。ひと言だって口をききはしなかった」

「とんだ災難さ。巡査に反抗したことを証明すれば、あのじいさんは刑務所へやられるだろう、きっと」

わたしはがっかりして宿屋へ帰った。

わたしはこのころでは毎日だんだんと親方が好きになっていた。わたしたちは朝から晩までいっしょにくらしてきた。どうかすると夜から朝までも同じわらのねどこにねむっていた。どんな父親だって、かれがわたしに見せたような行き届いた注意をその子どもに見

せることはできなかった。かれはわたしに字を読むことも、計算することも教えてくれたし、歌を歌うことも教えてくれた。長い流浪（るろう）の旅のあいだに、かれはこのことあのことといろいろにしこんでくれた。たいへん寒い日には、毛布（もうふ）を半分わけてくれたし、暑い日にはいつもわたしの代わりに荷物をかついでくれた。それから食事のときでもかれはけっして、自分がいい所を食べて悪い所をわたしにくれるというようなことはしなかった。それどころか、かれはいい所も悪い所も同じように分けてくれた。なるほどときどきはわたしがいやなほど、ひどく乱暴（らんぼう）に耳を引（ひ）っ張（ぱ）ることもあっ

たけれど、わたしに過失（かしつ）があれば、それもしかたがなかった。一言（ごん）で言えばわたしはかれを愛（あい）していたし、かれはわたしを愛していた。

だからこの別（わか）れはわたしにはなによりつらいことであった。

いつまたいっしょになれるだろうか。

いったいどのくらい牢屋（ろうや）へ入れておくつもりなのだろう。

そのあいだわたしはどうしたらいいだろう。どうして生きてゆこう。

ヴィタリス親方はいつもからだに金（かね）をつけている

習慣であった。それが引っ張られて行くときになにもわたしに置いて行くひまがなかった。

わたしはかくしに五、六スーしか持っていなかった。それだけでジョリクールと犬とわたしの食べるだけの物が買えようか。

わたしはそれから二日のあいだ、宿屋から外へ出る気にもならずに、ぼんやりくらしてしまった。さるも犬もやはりすっかりしょげきっていた。

やっとのことで三日目に一人の男が親方の手紙を届けて来た。その手紙によると、親方はこのつぎの土曜日に、警察権に反抗し、かつ巡査に手向かいをした科

で裁判を受けるはずになっていた。

「わたしがかんしゃくを起こしたのは悪かった」と手紙に書いてあった。「とんだ災難を招いたがいまさらいたしかたもない。裁判所へ来てごらん、教訓になることがあるであろう」

こういって、それからなお二、三の注意を書きそえて、自分に代わって犬やさるたちをかわいがってくれるようにと書いてあった。

わたしが手紙を読んでいるあいだ、カピがわたしの両足の間にはいって、鼻を手紙にこすりつけて、くんくんやっていた。かれが尾をふる具合で、わたしはか

れがこの手紙が主人から来たことを知っていると思った。この三日のあいだにかれが少しでもうれしそうな様子を見せたのはこれが初(はじ)めてであった。

わたしは土曜日の朝早く裁判所(さいばんしょ)に行って、いの一番に傍聴席(ぼうちょうせき)にはいった。巡査(じゅんさ)とのけんかを目撃(もくげき)した人たちの多くがやはり来ていた。わたしは裁判所に出るのがなんだかこわかったので、大きなストーブのかげにはいってかべにくっついて、できるだけ小さくからだをちぢめていた。

どろぼうをして拘引(こういん)された男や、けんかをしてつかまった男が初(はじ)めに裁判(さいばん)を受けた。弁護人(べんごにん)は無罪(むざい)を言(い)い

張(は)っていたけれど、それはみんな有罪(ゆうざい)を宣告(せんこく)された。

いちばんおしまいに親方が引き出された。かれは二人の憲兵(けんぺい)の間にはさまってこしかけにかけていた。

はじめにかれがなにを言ったか、人びとがかれになにをたずねたか、わたしはひじょうに興奮(こうふん)しきっていたのでよくわからなかった。

わたしはただじっと親方を見ていた。

かれはしらが頭を後ろに反(そ)らせて、まっすぐに立っていた。かれははじて苦んでいるように見えた。

裁判官(さいばんかん)は尋問(じんもん)を始めた。

「おまえは、おまえを拘引(こういん)しようとした警官(けいかん)を何回も

打ったことを承認するか」と、裁判官は言った。

「何回も打ちはいたしません、閣下」と親方は言った。

「わたしはただ一度手を上げました。わたくしはいつもの演芸をいたしまする場所にまいりますと、ちょうど警官がわたくしの連れています子どもを地の上に打ちたおすところを見たのでございます」

「その子はおまえの子ではないだろう」

「はい、しかしわたくしの実子同様にかわいがっております。それで警官がかれを打ちますところを見て、わたしはかっととりのぼせまして、警官が打とうとする手をおさえました」

「おまえは警官を打ったろう」

「警官がわたくしに向かって手をあげましたから、わたくしはもはや警官としてではない、通常の人としてこれに向かってのであります。まったくいかりに乗じた結果であります」

「おまえぐらいの年輩でいかりに乗ずるということはないはずだ」

「そうです。そういうはずはないのですが、人はおうおう不幸にして過失におちいりやすいのです」

巡査はそれから自分の言い分を申し立てた。それは打たれたことよりも、より多く自分が嘲弄（あざける）

された事実についてであった。

親方の目はそのあいだ部屋(へや)の中を探(さが)すようであった。それはわたしがいるかどうか探しているのだということがわかっていたから、わたしは思い切ってかくれ場所からとび出して、おおぜいの中をおし分けながら、前へ出て、いちばん前の列の、かれの席(せき)に近い所へ出た。かれのさびしい顔はわたしを見るとかがやきだした。わたしの目にもなみだがあふれ出した。

　まもなく裁判(さいばん)は決まった。かれは二か月の禁固(きんこ)と、百フランの罰金(ばっきん)に処(しょ)せられることになった。

　ああ、二か月の禁固(きんこ)。

ドアは開かれた。なみだにぬれた目の中からわたしは、かれが憲兵のあとからついて行くのを見た。ドアはその後ろからばたんと閉ざされた。ああ、二か月の別れ。

どこへわたしは行こう。

船の上

わたしが重たい心で、赤い目をふきふき宿屋に帰ると、ちょうど亭主が庭に出ていた。

わたしは犬のいる所へ行こうとしてその前を通ると、かれはわたしを引き止めた。

「どうだ、親方は」とかれは言った。

「有罪（ゆうざい）の宣告（せんこく）を受けました」

「どのくらい」

「二か月の禁固（きんこ）です」

「罰金（ばっきん）はどのくらい」

「百フラン」

「二か月……百フラン」かれは二、三度くり返した。

わたしはずんずん行こうとした。するとかれはまた引き止めた。

「その二か月のあいだおまえはどうするつもりだ」

「ぼくはわかりません」

「おや、おまえわからないと。おまえ、とにかく自分も食べて、犬やさるに食べ物を買ってやるお金がなければなるまい」

「いいえ、ないのです」

「じゃあ、おまえはわたしが養(やしな)ってくれると思っているのか」

「いいえ、わたしはだれのやっかいになろうとも思いません」

それはまったくであった。わたしはだれのやっかい

にもなるつもりはなかった。
「おまえの親方はこれまでも、もうずいぶんわたしに借りがある」とかれは言った。「わたしは二か月のあいだ金をはらってもらえるかどうかわからずに、おまえをとめておくことはできない。出て行ってもらわなければならないのだ」
「出て行く。どこへ行ったらいいでしょう」
「それはわたしの知ったことではない。わたしはおまえのおやじでも親方でもなんでもないからな。どうしておまえの世話をしてやれよう」
しばらくのあいだわたしは目がくらくらとした。

亭主(ていしゅ)の言うことはもっともであった。どうしてかれがわたしの世話をしてくれよう。

「さあ、犬とさるを連(つ)れて出て行ってくれ。親方の荷物は預(あず)かっておく。親方が刑務所(けいむしょ)から出て来れば、いずれここへ寄(よ)るだろうし、そのときこちらの始末(しまつ)もつけてもらおう」

　このことばから、ある考えがわたしの心にうかんだ。

「いずれそのときはお勘定(かんじょう)をはらうことになるでしょうから、それまでわたしを置(お)いてはくださいませんか。その勘定にわたしのぶんも加(くわ)えてはらえばいいでしょう」

「おやおや、おまえの親方は二日分の食料（しょくりょう）ぐらいははらえるかもしれんが、二か月などはとてもとてもだ。そりやあまるで別（べつ）な話だよ」

「わたしはいくらでも少なく食べますから」

「だが、犬もいればさるもいる。いけないいけない。出て行ってくれ。どこかいなかで仕事を見つけて、金をもらって歩けばいいのだ」

「でも親方が刑務所（けいむしょ）から出て来たときに、どうしてわたしを探（さが）すでしょう。きっとこちらへ訪（たず）ねて来るにちがいありません」

「だからおまえもその日にここへ帰って来ればいいの

だ」
「それでもし手紙が届(とど)いたら」
「手紙は取っておいてやるよ」
「でもわたしが返事を出さなかったら……」
「まあいつまでもうるさいな。急いで出て行ってくれ。五分間の猶予(ゆうよ)をやる。五分たってわたしが帰って来ても、まだここにいれば承知(しょうち)しないから」
わたしはこの男と言い合うのはむだだということを知っていた。わたしは出て行かなければならなかった。
わたしは犬とジョリクールを連(つ)れにうまやへ行った。
それから肩(かた)にハープをしょって、宿(やど)を出た。

わたしは大急ぎで町を出なければならなかった。なぜというに、犬に口輪（くちわ）がはめてないのだから、巡査（じゅんさ）にとがめられてもなんと答えようもなかった。わたしには金がないといおうか、それはまったくであった。わたしはかくしにたった十一スーしか持たなかった。それだけでは口輪を買うにも足りなかった。巡査がわたしを拘引（こういん）するかもしれない。親方もわたしも二人とも刑務所（けいむしょ）に入れられたら、犬やさるはどうなるだろう。わたしは自分の位置（いち）に責任（せきにん）を感じていた。

　わたしが足早に歩いて行くと、犬たちが顔を上げてながめた。その様子をどう見ちがえようもなかった。

かれらは腹が減っていた。

わたしの背嚢に乗っていたジョリクールは、しじゅうわたしの耳を引っ張って無理に自分の顔を見させようとした。わたしが顔を向けると、かれはせっせと腹をかいて見せた。

わたしもやはり腹がすいていた。わたしたちは朝飯を食べなかった。わたしの持っている十一スーでは昼食と晩食を食べるには足りなかった。そこでわたしたちは一食で両方兼帯の昼食を食べて、満足しなければならなかった。

わたしたちは巡査に出っくわさないように、少しで

も急いで市中をはなれなければならなかったから、どの道をどう行くなんていうことはかまわなかった。どの道を歩いても同じことであった。どこへ行っても食べるには金が要るし、宿屋へとまれば宿銭を取られる。それにねむる場所を見つけるくらいはたいしたことではなかった。このごろの暖かい季節ではわたしたちは野天にねむることができた。

さしせまっているのは食物だ。

一休みもせずに、わたしたちは二時間ばかり歩き続けたあとで、やっと立ち止まることができた。そのあいだ犬たちはたのむような目つきでしじゅうわたしの

顔を見た。ジョリクールは耳を引っ張って、絶えずおなかをさすっていた。

とうとう、わたしはここまで来ればもうなにもこわがることはないと思うところまで来てしまった。わたしはすぐそこにあったパン屋にとびこんだ。

わたしは一斤半パンを切ってくれと言った。

「おまえさん、二斤におしなさいな。二斤のパンはどうしても要りますよ」とおかみさんは言った。「それでもそれだけの同勢にはたっぷりとは言えない。かわいそうに、畜生にはじゅうぶん食べさしておやんなさい」

おお、どうして、むろんわたしの同勢にはたっぷりではなかった。けれどもわたしの財布(さいふ)にはたっぷりすぎた。

パンは一斤(きん)五スーであった。二斤買えば十スーになる。わたしはあしたどうなるかわからないのに、手もとを使いきるのはりこうなことではなかった。わたしはおかみさんに打ち明けて一斤半でたくさんだというわけを話して、それ以上(いじょう)を切(き)らないようにていねいにたのんだ。

わたしは両うでにしっかりパンをかかえて店を出た。犬たちがうれしがって回りをとび回った。ジョリクー

ルが髪の毛を引っ張ってうれしそうにくっくっと笑った。

わたしたちはそこから遠くへは行かなかった。

まっ先に目に当たった道ばたの木の下でわたしはハープを幹によせかけて、草の上にすわった。犬たちはわたしの向こうにすわった。カピはまん中に、ドルスとゼルビノはその両わきにすわった。くたびれていないジョリクールは、きょろきょろとうの目たかの目で、なんでもまっ先に一きれせしめようとねらっていた。

パンを同じ大きさに分けるのはむずかしい仕事で

あった。わたしはできるだけ同じ大きさにして、五きれにパンを切った。そのうえいくつかの小さなきれに割って一きれずつめいめいに分けた。

　わたしたちよりずっと少食だったジョリクールはわりがよかった。それでかれがすっかり満腹してしまったとき、わたしたちはやはり腹がすいていた。わたしはかれのぶんから三きれ取って背嚢の中にかくして、あとで犬たちにやることにした。それからまだ少し残っていたので、わたしはそれを四つにちぎって、てんでに一きれずつ分けた。それが食後のお菓子であった。

このごちそうがけっして食後の卓上演説を必要とするほどりっぱなものではなかったのはもちろんであるが、わたしは食事がすんだところで、いまがちょうど仲間の者に二言三言いいわたす機会だと感じた。わたしはしぜんかれらの首領ではあったが、この重大な場合に当たって、かれらに死生をともにすることを望むだけの威望の足りないことを感じていた。

　カピはおそらくわたしの意中を察したのであろう。それでかれはその大きなりこうそうな目を、じっとわたしの日の上にすえてすわっていた。

「さて、カピ、それからドルスも、ゼルビノも、ジョ

リクールも、みんなよくお聞き。わたしはおまえたちに悲しい知らせを伝（つた）えなければならないのだよ。わたしたちはこれから二か月も親方に会うことができないのだよ」
「ワウ」とカピがほえた。
「これは親方のためにも困（こま）ったことだし、わたしたちのためにも困ったことなのだ。なぜといって、わたしたちはなにもかも親方にたよっていたのだから、それがいま親方がいなくなれば、わたしたちにはだいいちお金がないのだ」
この金ということばを言いだすと、カピはよく知っ

ていて、後足で立ち上がって、ひよこひよこ回り始めた。それはいつも『ご臨席（りんせき）の貴賓諸君（きひんしょくん）』から金を集めて回るときにすることであった。

「ああ、おまえは芝居（しばい）をやれというのだね。カピ」とわたしは言った。「それはいい考えだが、どこまでわたしたちにできるだろうか。そこが考えものだよ。うまくゆかない場合には、わたしたちはもうたった三スーしか持っていない。だからどうしても食べずにいるほかはない。そういうわけだから、ここはたいせつなときだと思って、おまえたちはみんなおとなしくぼくの言うことを聞いてくれなければだめだ。そうすれ

ばおたがいの力でなにかできるかもしれない。おまえたちはみんなしていっしょうけんめい、ぼくを助けてくれなければならない。わたしたちはおたがいにたより合ってゆきたいと思うのだ」

こういったわたしのことばが、残らずかれらにわかったろうとはわたしも言わないが、だいたいの趣意は飲みこめたらしかった。かれらは同じ考えになってはいた。かれらは親方のいなくなったについて、そこになにか大事件が起こったことを知っていた。それでその説明をわたしから聞こうとしていた。かれらがわたしの言って聞かせた残らずを理解しなかったとして

も、すくなくともわたしがかれらの身の上を心配してやっていることには満足していた。それでおとなしくわたしの言うことに身を入れて聞いて、満足の意味を表していた。

いやお待ちなさい。なるほどそれも、犬の仲間だけのことで、ジョリクールには、いつまでもじっとしていることが望めなかった。かれは一分間と一つ事に心を向けていることができなかった。わたしの演説の初めの部分だけはかれも殊勝らしくたいへん興味を持って傾聴していたが、二十ということばを言わないうちに、かれは一本の木の上にとび上がって、わたした

ちの頭の上のえだにぶら下がり、それからつぎのえだへととび回っていた。カピが同じやり方でわたしを侮辱(ぶじょく)したならば、わたしの自尊心(じそんしん)はずいぶん傷(きず)つけられたにちがいなかった。けれどもジョリクールがどんなことをしようと、わたしはけっしておどろかなかった。かれはずいぶん頭の空っぽな、軽はずみなやつだった。

けれどそうはいうものの、少しはふざけたいのもかれとして無理(むり)はなかった。わたしだってやはり同じことをしたかったと思う。わたしもやはりおもしろ半分木登りをしてみたかった。けれどもわたしの現在(げんざい)の

位置(いち)の重大なことが、わたしにそんな遊びをさせなかった。

しばらく休んだあとで、わたしは出発の合図をした。わたしたちはどうせ、どこかただでとまる青天井(あおてんじょう)の下を見つけさえすればいいのだから、なにより、あしたの食べ物を買う銭(ぜに)をいくらかでももうけることが、さし当たっての問題であった。

小一時間ばかり歩くと、やがて一つの村が見えてきた。

びんぼう村らしくって、あまりみいりの多いことは望(のぞ)めないが、村が小さければ巡査(じゅんさ)に出会うことも少な

かろうと考えた。

　わたしはさっそく一座（いちざ）の服装（ふくそう）を整（ととの）えて、できるだけりっぱな行列を作りながら、村へはいって行った。運悪くわたしたちはあのふえがなかったし、そのうえヴィタリス親方のりっぱなどうどうとした風采（ふうさい）がなかった。軍楽隊（ぐんがくたい）の隊長（たいちょう）のようなりっぱな様子でかれはいつも人目をひいていた。わたしには背（せい）の高いという利益（りえき）もないし、あのりっぱなしらが頭も持たなかった。それどころかわたしはちっぽけで、やせっぽちで、そのうえひどくやつれた心配そうな顔をしていたにちがいなかった。

行列の先に立って歩きながら、わたしは右左をきよろきょろ見回して、わたしたちがどういう効果(こうか)を村の人たちにあたえているか、見ようとした。ごくわずか——と情(なさ)けないけれど言わなければならなかった。だれ一人あとからついて来る者もなかった。

ちょっとした広場のまん中に泉(いずみ)があって、木かげがこんもりしている所を見つけると、わたしはハープを下ろしてワルツを一曲ひき始めた。曲はゆかいな調子であったし、わたしの指も軽く動いた。けれどもわたしの心は重かった。

わたしはゼルビノとドルスに向かって、いっしょに

ワルツをおどるように言いつけた。かれらはすぐ言うことを聞いて、拍子に合わせてくるくる回り始めた。けれどもだれ一人出て来て見ようとする者もなかった。そのくせ家の戸口では五、六人の女が編み物をしたり、おしゃべりをしているのを見た。

わたしはひき続けた。ゼルビノとドルスはおどり続けた。

一人ぐらい出て来る者があるだろう。一人来ればまた一人、だんだんあとから出て来るにちがいなかった。

わたしはあくまでひき続けた。ゼルビノとドルスもくるくるじょうずに回っていた。けれども村の人たち

はてんでこちらをふり向いて見ようともしなかった。
けれどもわたしはがっかりしまいと決心した。わたしはいっしょうけんめいハープの糸が切れるほどはげしくひいた。
ふと一人、ごく小さい子が初めて、うちの中からちょこちょことかけ出して、わたしたちのほうへやって来た。
きっと母親があとからついて来るであろう。その母親のあとから、仲間が出て来るだろう。そうして見物ができれば、少しのお金が取れるであろう。
わたしは子どもをおびえさせまいと思って、まえよ

りは静かにひいた。そうして少しでもそばへ引き寄せようとした。両手を延ばして、片足ずつよちよち上げて、かれは歩いて来た。もう二足か三足で、子どもはわたしたちの所へ来る。ふと、そのしゅんかん母親はふり向いた。きっと子どもの姿の見えないのを見て、びっくりするにちがいない。

　でもかの女はやっと子どもの行くえを見つけると、わたしの思ったようにすぐあとからかけては来ないで自分のほうへ呼び返した。すると子どもはおとなしくふり返って母親のほうへ帰って行った。

　きっとこのへんの人は、ダンスも音楽も好かないの

だ。きっとそんなことであった。

わたしはゼルビノとドルスを休ませて、今度は、わたしの好(す)きな小唄(こうた)を歌い始めた。わたしはこんなにいっしょうけんめいになったことはなかった。二節(せつ)目の終わりになったとき、背広(せびろ)を着て、ラシャのぼうしをかぶった男が目にはいった。その男はわたしのほうへ歩いて来るらしかった。

とうとうやって来たな。

わたしはそう思って、いよいよむちゅうになって歌った。

「これこれこぞう、ここでなにをしている」と、その

男はどなった。
わたしはびっくりして歌をやめた。ぽかんと口を開いたまま、そはへ寄(よ)って来るその男をぼんやりながめた。
「なにをしているというのだ」
「はい、歌を歌っています」
「おまえはここで歌を歌う許可(きょか)を得(え)たか」
「いいえ」
「ふん、じゃあ行け。行かないと拘引(こういん)するぞ」
「でも、あなた……」
「あなたとはなんだ、農林監察官(のうりんかんさつかん)を知らないか。出て

行け、こじきこぞうめ」

ははあ、これが農林監察官か。わたしは親方の見せたお手本で、警官(けいかん)や監察官(かんさつかん)に反抗(はんこう)すると、どんな目に会うかわかっていた。わたしはかれに二度と命令(めいれい)をくり返させなかった。わたしは急いでわき道へにげだした。

こじきこぞうか、ひどい言いぐさだ。わたしはこじきはしなかった。わたしは歌を歌ったまでだ。

五分とたたないうちに、わたしはこの人情(にんじょう)のない、そのくせいやに監視(かんし)の行き届(とど)いている村をはなれた。

犬たちは頭(かしら)を垂(た)れて、すごすごあとからついて来た。

きっとつまらない目に会ったことを知っていた。

　カピはしじゅうわたしたちの先頭に立って歩いていた。ときどきふり向いては例(れい)のりこうそうな目で、いったいどうしたのですと言いたそうに見えた。ほかのものがかれの位置(いち)に置(お)かれたのだったら、きっとわたしにそれをたずねたであろうけれども、カピはそんな無作法(ぶさほう)をするには、あんまりよくしつけられていた。

　かれはふに落ちないのを、いっしょうけんめいがまんしているふうを見せるだけで満足(まんぞく)していた。

　ずっと遠くこの村からはなれたとき、わたしは初(はじ)めてかれらに（止まれ）という合図をした。それで三び

きの犬はわたしの回りに輪(わ)を作った。そのまん中にはカピがじっとわたしに目をすえていた。

わたしはかれらがわからずにいることを、ここで説明(せつめい)してやらなければならなかった。「わたしたちは興行(こうぎょう)の許可(きょか)を得(え)ていないから、追い出されたのだよ」とわたしは言った。

「へえ、それではどうしましょう」と、カピは首を一ふりふってたずねた。

「だからわたしたちは今夜はどこか野天でねむって、晩飯(ばんめし)なしに歩くのだ」

晩飯(ばんめし)ということばに、みんないちどにほえた。わた

しはかれらに三スーの銭（ぜに）を見せた。
「知ってるとおり、わたしの持っているのはこれだけだ。今夜この三スーを使ってしまえば、あしたの朝飯（あさめし）になにも残（のこ）らない。きょうはとにかく少しでも食べたのだから、これはあしたまでとっておくほうがいいようだ」こう言って、わたしは三スーをまたかくしに入れた。
　カピとドルスはあきらめたように首を下げた。けれどもそれほどすなおでなかったし、そのうえ大食らいであったゼルビノは、いつまでもぶうぶううなっていた。わたしはこわい目をしてかれを見たが、効き目（きめ）が

なかった。

「カピ、ゼルビノに言ってお聞かせ。あれはわからないようだから」と、わたしは忠実なカピに言った。

カピはさっそく前足でゼルビノをたたいた。それはいかにも二ひきの犬の間に言い合いが始まっているように見えた。言い合いというようなことばを犬に使うのは少し無理だと言うかもしれないが、動物だってたしかにその仲間に通用する特別なことばがあった。犬だけで言えば、かれらは話すことを知っているだけではない、読むことも知っていた。かれらが鼻を高く空に向けたり、顔を下げて地べたをかいだり、やぶや石

の上をかぎ回ったりするところをご覧（らん）なさい。ふとかれらはとある草むらの前で立ち止まる。またはかべの前で立ち止まって、しばらくはじっと目をすえている。わたしたちが見てはその上になにもないが、犬はわたしたちの理解（りかい）しないふしぎな文字で書かれた、いろいろの変わったことをそこに読み分けるのである。

　カピがゼルビノに言ったこともわたしにはわからなかった。なぜと言うに、犬には人間のことばがわかっても、人間はかれらのことばを理解（りかい）しないのだ。わたしがただ見たところでは、ゼルビノは道理に耳をかたむけることをこばんだ。なんでも三スーのお金をすぐ

に使ってしまえと言い張(は)ったようであった。カピは腹(はら)を立てて歯をむき出すと、少しおくびょう者のゼルビノはすごすごだまってしまった。だまるということばにも少し説明(せつめい)が要(い)るが、ここではころりと横になることを言うのである。

そこで残(のこ)ったのは今夜の宿(やど)の問題だけだ。

時候(じこう)はよし、暖(あたた)かい、いい天気であった。だから青天井(あおてんじょう)の下にねむることはさしてむずかしいことではなかった。ただこのへんに悪いおおかみでもいるようなら、それをさけるようにすればよかった。おおかみよりもおそろしい農林監察官(のうりんかんさつかん)からさけることもさら

に必要（ひつよう）であった。

　わたしたちは白い道の上をずんずんまっすぐに進んで行った。山のはしに落ちかけた赤い夕日の最後（さいご）の光が空から消えるころまで、宿（やど）を求（もと）めて歩き続（つづ）けたが、まだ見つからなかった。

　もう善悪（ぜんあく）なしに、どうでもとまらなければならなかった。やっと林の間に出た。そこここに大きな花（か）こう岩（がん）が転（ころ）がっていた。この場所はずいぶんあれたさびしい所であったが、それよりいい場所は見つからなかった。それに花こう岩の中にはいってねむれば、しめっぽい夜風を防（ふせ）ぐたしにもなろうと思った。ここで

わたしたちというのは、さるのジョリクールとわたし自身のことを言うので、犬たちは外でねむったところでかぜをひく気づかいもなかった。わたしは自分のからだをだいじにしなければならなかった。わたしのしょっている責任(せきにん)は重かった。わたしが病気になったらわたしたちみんなどうなるだろう。またわたしがジョリクールの看病(かんびょう)をしなければならないようだったら、今度はわたしがどうなるだろう。

わたしたちは石の間にほら穴(あな)のような所を見つけた。そこにはまつの落ち葉がたまっていた。これで、上には風を防(ふせ)ぐ屋根があり、下にはしいてねるふとんがで

きた。これはひじょうに具合がよかった。足りないのは食べ物ばかりであった。わたしはおなかのすいていることを考えまいと努めた。ことわざにも言うではないか、『ねむるのは食べるのだ』と。

いよいよ横になるまえに、わたしはカピに張り番をたのむと言った。するとこの忠実な犬はわたしたちといっしょにまつ葉の上でねむろうとはしないで、わたしの野営地の入口に、歩哨のように横になっていた。わたしはカピが番をしてくれればだれも案内なしに近づけないと思ったから、落ち着いてねむることができた。

でもこれだけは心配はなかったが、すぐにはねむりつけなかった。ジョリクールはわたしの上着の中にくるまって、そばでぐっすりねむっていた。ゼルビノとドルスは、わたしの足もとでからだをのばしていた。けれどもわたしの心配はからだのつかれよりも大きかった。

この旅行の第一日は悪かった。あくる日はどんなであろう。わたしは腹（はら）が減（へ）ったし、のどがかわいていた。それでいてたった三スーしか持っていなかった。あしたいくらかでももうけなかったら、どうしてみんなに食べ物を買ってやることができよう。それに口輪（くちわ）はど

うしよう。これから歌を歌う許可（きょか）は、いったいどうしたらいいだろう。許（ゆる）してくれるだろうか。さもないとわたしたちはみんな、やぶの中でおなかが減（へ）って死んでしまうだろう。

　こういうみじめな、あわれっぽい疑問（ぎもん）を心の中でくり返しくり返しするうちに、わたしは暗い空の上にかがやいている星を見た。そよとの風もなかった。どこもかしこもしんとしていた。木の葉のそよぐ音もしない。鳥の鳴く声もしない。街道（かいどう）を車のとろとろと通る音もしない。目の届（とど）く限（かぎ）りは青白い空が広がっていた。わたしたちは独（ひと）りぼっちであった。世の中から捨（す）てら

れていた。

　なみだは目の中にあふれた。バルブレンのおっかあはどうしたろう。気のどくなヴィタリスは。

　わたしはうつぶしになって、顔を両手でかくして、しくしく泣いていた。するとふと、かすかな息が髪の毛にふれるように思った。わたしはあわててふり向いた。そのひょうしに大きなやわらかな舌がなみだにあふれたわたしのほおをなめた。それはカピが、わたしの泣き声を聞きつけて、あのわたしの流浪の初めての日にしてくれたように、今度もわたしをなぐさめに来てくれたのである。

両手でわたしはかれの首をおさえて、そのしめった鼻にキッスした。かれは二、三度おし殺(ころ)したような悲しそうな鼻声を出した。それがわたしといっしょに泣(な)いてくれるもののように思われた。

わたしはねむって目が覚(さ)めてみると、もうすっかり明るくなっていた。カピはわたしの前にすわったままじっとわたしを見ていた。小鳥が林の中で歌を歌っていた。遠方のお寺で朝の祈禱(きとう)のかねが鳴っていた。太陽はもう空の上に高く上って、つかれた心とからだをなぐさめる光を心持ちよく投げかけていた。

わたしたちはかねの音(ね)を目当てに歩き出した。そこ

には村があって、パン屋もきっとあるにそういなかった。昼食も夕食もなしにねどこにはいれば、だれにだって空腹が『おはよう』を言いに来る。わたしは思い切って、三スーを使ってしまう決心をした。そのあとではどうなるか、それはそのときのことにしよう。

村に着くと、パン屋がどこだと聞く必要もなかった。わたしたちの鼻がすぐにその店に連れて行ってくれた。においをかぎつけるわたしの感覚は、もう犬に負けずにするどかった。遠方からわたしは温かいパンの、うまそうなにおいをかぎつけた。

一斤五スーするパンを三スーではたんとは買えな

かった。わたしたちはてんでんに、ほんの小さなきれを分け合った。それで朝飯もあっけなくすんでしまった。

　わたしたちはきょうこそいくらかでももうけなければならなかった。わたしは村の中を歩いて、どこか芝居につごうのいい場所を見つけようとした。それに村の人びとの顔色を見て、敵か味方か探ろうとした。

　わたしの考えはすぐに芝居を始めようというのではなかった。それには時間があまり早すぎた。けれどいい場所が見つかれば、昼ごろ帰って来て、わたしたちの運命を決する機会をとらえるつもりであった。

わたしがこの考えに心をうばわれていると、ふとだれか後ろからとんきょうな声を上げる者があった。あわててわたしがふり向くと、ゼルビノがわたしのほうへ向かってかけて来る。そのあとから一人のおばあさんが追っかけて来るのを見た。もうすぐ何事が起こったかということはわかった。わたしがほかへ気を取られているすきをねらって、ゼルビノは一けんの家にかけこんで、肉を一きれぬすみだしたのであった。かれはえものを歯の間にくわえたまま、にげ出して来たのであった。

「どろぼう、どろぼう」とおばあさんはさけんだ。「そ

いつをつかまえておくれ。そいつらみんなつかまえておくれ」
　おばあさんのこう言うのを聞いて、わたしはとにかく自分にも罪がある。いやすくなくともゼルビノの犯罪に責任があると感じた。そこでわたしはかけ出した。もしおばあさんがぬすまれた肉の代価を請求じたら、なんと言うことができよう。どうして金をはらうことができよう。それでわたしたちがつかまえられれば、きっと刑務所に入れられるだろう。
　わたしがにげ出して行くのを見て、ドルスとカピもさっそくわたしの例にならった。かれらはわたしのか

かとについて走った。ジョリクールはわたしの肩（かた）に乗ったまま、落ちまいとしてしっかり首にかじりついた。

だれかほかの者もさけんでいた。待て、どろぼう……そしてほかの人たちも仲間（なかま）になって追っかけていた。けれどもわたしたちはどんどんかけた。恐怖（きょうふ）がわたしたちの速力（そくりょく）を進めた。わたしはドルスがこんなに早く走るのを見たことがなかった。かの女の足はほとんど地べたについていなかった。横町を曲がって、野原をつっ切って、まもなくわたしたちは追っ手をはるかぬいてしまった。けれどもやはりどんどんかけ続（つづ）けて、

いよいよ息がつけなくなるまで止まらなかった。わたしたちは少なくとも三マイル（約五キロ）も走った。ふり返って見るともうだれも追っかけて来なかった。カピとドルスはやはりわたしのすぐ後について来た。ゼルビノは遠くにはなれていた。たぶんぬすんだ肉を食べるので手間を取ったのであろう。

　わたしはかれを呼(よ)んだ。けれどもかれはひどい刑罰(けいばつ)に会うことを知りすぎるほど知っていた。そこでわたしのほうへは寄(よ)って来ないで、できるだけ早くかけ出したのである。かれは飢(う)えていた。それだから肉をぬすんだのだ。けれどもわたしはそれを口実(こうじつ)として許(ゆる)す

ことはできなかった。かれはぬすみをした。わたしが仲間の間に規律を保とうとすれば、罪を犯したものは罰せられなければならない。それをしなかったら、つぎの村へ行って、今度はドルスが同じ事をするであろう。そうなるとカピまでが誘惑に負けないとは言えぬ。

わたしはゼルビノに対し、公然刑罰を加えなければならなかった。けれどもそれをするためにはかれをつかまえなければならなかった。それはたやすいことではなかった。

わたしはカピのほうへ向いた。

「行ってゼルビノを探しておいで」とわたしは重おも

しく言った。
かれはさっそく言いつけられたとおりするために出て行った。けれどもいつものような元気のないことをわたしは見た。かれの顔つきを見ていると、憲兵としてかれはわたしの言いつけを果たすよりも、弁護人としてゼルビノをかばってやりたいように見えた。
わたしはかれが囚人を連れて帰って来るのを、べんべんとこしかけて待つほかはなかった。気ちがいじみたかけっこをしたあとで、休息するのがうれしかった。わたしたちが休んだ所はちょうどこんもりした木かげと、両側に広びろと野原の開けた、堀割の岸で

あった。ツールーズを出て初(はじ)めて、青あおした、すずしいいなか道に出たのだ。

一時間たったが、犬たちは帰って来なかった。わたしはそろそろ心配になりだしたとき、やっとカピが独(ひと)りぼっち首をうなだれたまま帰って来た。

「ゼルビノはどうした」

カピはおどおどした様子で、平伏(へいふく)した。わたしはかれのかたっぽの耳から血の出ているのを見た。わたしはそれで様子をさとった。ゼルビノはこの憲兵(けんぺい)に戦(たたか)いをしかけてきたのである。わたしはカピがそうして、いやいやわたしの命令(めいれい)に従(したが)いながらも、ゼルビノと

の格闘（かくとう）にわざと負けてやったことがわかった。そしてそのため自分もやはりしかられるものと覚悟（かくご）しているらしく思われた。

　わたしはかれをしかることができなかった。わたしはしかたがないから、ゼルビノが自分から帰って来るときを待つことにした。わたしはかれがおそかれ早かれ後悔（こうかい）して帰って来て、刑罰（けいばつ）を受けるだろうと思っていた。

　わたしは一本の木の下に、手足をふみのばして横（よこ）になった。ジョリクールはしっかりとうでにだいていた。それはこのさるまでがゼルビノと仲間（なかま）になる気を起こ

すといけないと思ったからであった。ドルスとカピはわたしの足の下でねむっていた。時間がたった。ゼルビノは出て来なかった。とうとうわたしもうとうととねむりこけた。

四、五時間たってわたしは目を覚ました。日かげでもう時刻のよほどたったことがわかったが、それは日かげを見て知るまでもなかった。わたしの胃ぶくろは一きれのパンを食べてからもう久(ひさ)しい時間のたつことをわめきたてていた。それに二ひきの犬とジョリクールの顔つきだけでも、かれらの飢(う)えきっていることはわかった。カピとドルスは情(なさ)けない目つきをして、

じっとわたしを見つめた。ジョリクールはしかめっ面(つら)をしていた。

でもやはりゼルビノは帰ってはいなかった。

わたしはかれを呼(よ)びたてたり、口ぶえをふいたりしたけれどもむだであった。たぶんごちそうをせしめたので、すっかり腹(はら)がふくれて、どこかのやぶの中に転(ころ)がって、ゆっくり消化させているのであろう。

やっかいなことになってきた。わたしがここを立ち去れば、ゼルビノはわたしたちを見つけることができないから、そのまま行くえ知れずになってしまう。かといってここにこのままいては、少しでも食べ物を買

うお金をもうける機会がまるでなかった。

わたしたちの空腹はいよいよやりきれなくなってきた。犬たちは哀願するような目つきをたえずわたしに向けた。そしてジョリクールはおなかをさすって、おこって、きゃっきゃっとさけんでいた。

それでもゼルビノはまだ帰って来なかった。もう一度わたしはカピをやって、なまくらものの行くえを探させた。けれども三十分たってから、やはりカピだけ独りぼんやり帰って来た。

どうしたらいいであろう。

ゼルビノは罪を犯したが、またかれの過失のために

わたしたちはこんなひどい目に会わされることになったのであるが、かれをふり捨（す）てることはできなかった。三びきの犬を満足（まんぞく）に連（つ）れて帰らなかったら、親方はなんと言うであろう。それになんといっても、わたしはあのいたずら者のゼルビノをかわいがっていた。

わたしは晩（ばん）がたまで待つ決心をした。けれどなにもせずにいることはできるものではなかった。わたしたちはなにかしていればきっとこれほどひどい空腹（くうふく）がこたえないであろうと思った。

わたしはなにか気をまぎらすことを考え出したなら、さし当たりこれほどひもじい思いを忘（わす）れるかもしれな

い。
なにをしたらよかろう。
わたしはこの問題をいろいろ考え回した。そのときわたしが思い出したのは、ヴィタリス親方がいつか言ったことに、軍隊（ぐんたい）が長い行軍（こうぐん）で疲労（ひろう）しきると、楽隊（がくたい）がそれはゆかいな曲を演奏（えんそう）する、それで兵隊（へいたい）の疲労を忘（わす）れさせるようにするというのであった。
そうだ。わたしがなにかゆかいな曲をハープでひいたら、きっと空腹（くうふく）を忘れることができるかもしれない。わたしたちはみんなひどく弱りきっている。でもなにかゆかいな曲をひいたら、かわいそうな二ひきの犬た

ちも、ジョリクールといっしょにおどりだして、時間が早く過ぎるかもしれない。

わたしは二本の木によせかけておいた楽器を取り上げて、堀割のほうに背中を向けながら、動物たちの列を作ってならばせ、ダンス曲をひき始めた。

初めのうちは、犬もさるもダンスをする気にもなれないらしかった。かれらの欲望は食べ物のほかになかった。そのいじらしい様子を見ると、わたしの胸は痛んだ。けれどもかわいそうに、かれらも空腹を忘れなければならなかった。わたしはいよいよ調子を高く早くとひいた。すると少しずつだんだんに、音楽がそ

の偉力を現してきた。かれらはおどりだした。わたしはひき続けた。

「うまい」――ふとわたしはすみきった子どもの声でこうさけぶのを聞いた。その声はすぐ後ろから聞こえた。わたしはあわててふり向いた。

一せきの遊船が堀割の中に止まっていた。その小舟を引っ張っている二ひきの馬は、向こう岸に休んでいた。それはきみょうな小舟であった。わたしはまだこんなふうな船を見たことはなかった。

それは堀割にうかんでいるふつうの船に比べて、ずっとたけが短かった。そして水面からわずか高い

甲板（かんぱん）の上には、ガラスしょうじをたてきった船室があり、その前にはきれいなろうかがあって、つたの葉でおおわれていた。

そこには二人、人がいた。一人はまだ若（わか）い貴婦人（きふじん）で、美しい、そのくせ悲しそうな顔をしていた。もう一人はわたしぐらいの年ごろの男の子で、これはあお向けにねているらしかった。

「うまい」と声をかけたのは、あきらかにこの子どもであった。

わたしはかれらを見つけて、一度はたいへんびっくりしたが、落ち着くと、わたしはぼうしを取って、か

れらの賞賛（しょうさん）に感謝（かんしゃ）の意を表（ひょう）した。

「あなたはお楽しみにやっておいでなのですか」と、貴婦人（きふじん）は外国なまりのあるフランス語で言った。

「わたしは犬をしこんでいるのです。それに……自分の気晴らしにも」

　子どもはなにか言った。婦人はそのほうにのぞきこんだ。

「あなた、まだやってもらえますか」と、そのとき貴婦人（きふじん）はこちらを向いて言った。

　なにかやってくれるか。やらなくってどうするものか。こういうところへ来てくれたお客のために、どう

してやらずにいられよう。わたしはそれを二度と言われるまでも待たなかった。「ダンスにしましょうか。喜劇（きげき）にしましょうか」とわたしは聞いた。

「ああ、喜劇だ、喜劇だ」と子どもがさけんだ。けれども貴婦人（きふじん）は口をはさんで、「まあ先にダンスを」と言った。

「ダンスはだって短すぎるもの」と子どもは言った。

「お客さまのお望（のぞ）みとございましたら、ダンスのあとでちがった番組をいろいろとりかえてごらんにいれましょう」

これはうちの親方の使う口上の一つであった。わたしはなるべくかれと同じようなしかつめらしい言い方でやろうと努めた。だがなおよく考えると、喜劇を所望してくれなかったことは結局ありがたかった。なぜといって、どうそれをやるかくふうがつかなかった。ゼルビノという役者が一枚足りないばかりではない、芝居をするには衣装も道具もなかった。

とにかくわたしはハープを取り上げて、まずワルツの第一節をひいた。カピは前足でドルスのこしをだいて、じょうずに拍子を取りながらおどり回った。つぎにジョリクールが一人でおどって、それからそれとわ

たしたちは順々（じゅんじゅん）に番組を進めていった。もう少しもくたびれたとは思わなかった。かわいそうな動物どもは、やがて昼飯（ひるめし）の報酬（ほうしゅう）の出ることを知って、いっしょうけんめいにやった。わたしもそのとおりであった。

するととつぜん、みんながいっしょになってダンスをしている最中（さいちゅう）に、ゼルビノがやぶのかげから出て来た。そして仲間（なかま）がそのそばを通ると、かれはずうずうしくもその仲間に割りこんで来た。

ハープをひきひき役者たちの監督（かんとく）をしながら、わたしはときどき子どものほうを見た。かれはわたしたちの演技（えんぎ）にひじょうなゆかいを感じているらしく見えた

が、からだを少しも動かさなかった。寝台の上にあお向いたまま、ただ両手を動かして拍手かっさいした。半身不随なのかしら、板の上に張りつけられたように見えた。

いつのまにか風で船が岸にふきつけられていたので、いまは子どもをはっきり見ることができた。かれは金茶色の髪の毛をしていた。顔色は青白くて、すきとおった皮膚のもとに額の青筋すら見えるほどであった。その顔つきには病人の子どもらしい、おとなしやかな、悲しそうな表情があった。

「あなたがたのお芝居のさじき料がいかほどですね」

と、貴婦人(きふじん)はたずねた。

「おなぐさみに相応(そうおう)した代(だい)だけいただきます」

「じゃあ、お母さま、たんとおやりなさい」と子どもが言った。かれはそのうえなにかわたしにわからないことばでつけ加(くわ)えていた。すると貴婦人(きふじん)は、

「アーサがお仲間(なかま)の役者たちをそばで見たいと言うのですよ」と言った。

わたしはカピに目くばせをした。大喜(おおよろこ)びでかれは船の中へとびこんで行った。

「それから、ほかのは」とアーサと呼(よ)ばれたこの子どもはさけんだ。

ゼルビノとドルスがカピの例(れい)にならった。
「それからおさるは」
ジョリクールもわけなくとびこむことができたろう。でもわたしは安心がならなかった。一度船に乗ったら、きっとなにか貴婦人(きふじん)の気にいらないような悪さをするかもしれなかった。
「おさるは気があらいの」と貴婦人はたずねた。
「いいえ、そうではありませんが、なかなか言うことを聞きませんから、失礼(しつれい)でもあるといけないと思います」
「おや、それではあなた、連(つ)れておいでなさい」

こう言って貴婦人はかじのほうに立っていた男に合図をした。この人は出て来て、へさきから岸に板をわたした。

肩にハープをかけて、ジョリクールをうでにだいたまま、わたしは板をわたった。

「おさるだ。おさるだ」とアーサはさけんだ。その子どもを貴婦人はアーサと呼んでいた。

わたしはかれのそばへ寄って、かれがジョリクールをなでたりさすったりしているとき、わたしは注意してその様子を見た。実際にかれは一枚の板に皮でからだを結びつけられていた。

「あなた、お父さんはあるの」と貴婦人（きふじん）はたずねた。

「いえ、いまは独（ひと）りぼっちです」

「いつまで」

「二か月のあいだ」

「二か月ですって、まあかわいそうに、あなたぐらいの年ごろに、どうして独りぼっち置（お）き去りにされるようなことになったの」

「そんな回り合わせになったのです」

「あなたの親方さんはふた月のあいだにたんとお金を持って帰れと言いつけたのではないのですか。そうでしょう」

「いいえ、おくさん、親方はわたしになにも言いつけはしません。ただい一座のものといっしょに、そのあいだ食べてゆかれさえすればそれでいいんです」
「それで、どれだけお金が取れましたか」
　わたしは答えようとしてちゅうちょした。わたしはこの美しい婦人の前では一種のおそれを感じたけれども、貴婦人はひじょうに親切に話しかけてくれたし、その声はいかにも優しかったから、わたしはほんとうのことを打ち明ける決心をした。またそれをしてならない理由はなにもなかった。
　そこでわたしは貴婦人に向かって、ヴィタリスとわ

たしが別れたいちぶしじゅうを話した。ヴィタリス親方がわたしを保護するために、刑務所に連れて行かれたこと、それから親方がいなくなってから、金を取ることができなくなった次第を話した。

わたしが話をしているあいだ、アーサは犬と遊んでいたが、わたしの言ったことばはよく耳に止めていた。

「じゃあきみたち、みんなずいぶんおなかがすいているだろう」とかれは言った。

このことばを動物たちはよく知っていて、犬は喜んでほえ始めるし、ジョリクールははげしくおなかをこすった。

「ああ、お母さま」とアーサがさけんだ。
貴婦人（きふじん）は聞き知らないことばで、半分開けたドアのすきから頭を出しかけていた女中に、なにか二言三言いった。まもなく女中は食物をのせたテーブルを運んで来た。
「おかけ」と貴婦人は言った。
わたしは言われるままにさっそく、ハープをわきへ置（お）いて、テーブルの前のいすにこしをかけた。犬たちはわたしの回りに列を作ってならんだ。ジョリクールはわたしのひざの上でおどっていた。
「きみの犬はパンを食べるの」とアーサはたずねた。

「パンを食べるどころですか」

わたしが一きれずつ切ってやると、かれらはむさぼるようにして見るまに平らげてしまった。

「それからおさるは」とアーサは言った。

けれども、ジョリクールのことで気をもむ必要もなかった。わたしが犬にやっているあいだ、かれは横合いから肉入りのパンを一きれさらって、テーブルの下にもぐって、息のつまるほどほおばっていた。

わたし自身もパンを食べた。ジョリクールのようにのどにはつまらせなかったけれど、同じようにがつがつして、もっとたくさんほおばった。

「かわいそうに、かわいそうに」と貴婦人は言った。アーサはなにも言わなかったが、大きな目を見張ってわたしたちをながめていた。わたしたちのよく食べるのにびっくりしたのであろう。わたしたちはてんでんに腹をすかしきっていた。肉をぬすんで少しは腹にこたえのあるはずのゼルビノまでが、がつがつしていた。

「きみはぼくたちに会わなかったら、きょうの昼飯はどうするつもりだったの」とアーサがたずねた。

「なにを食べるか当てがなかったのです」

「じゃああしたは」

「たぶんあしたはまた運よく、きょうのようなお客さまにどこかで会うだろうと思います」

アーサはわたしとの話を打ち切って、そのとき母親のほうにふり向いた。しばらくのあいだかれらは外国語で話をしていた。かれはなにかを求めているらしかったが、それを母親は初めのうち承知したがらないように見えた。

するうち、ふと子どもはくるりと向き返った。かれのからだは動かなかった。

「きみはぼくたちといっしょにいるのはいやですか」

とかれはたずねた。

わたしはすぐ返事はしないで、顔だけ見ていた。わたしはこのだしぬけの質問(しつもん)にめんくらわされていた。

「この子があなたがたにいっしょにいてくださればいいと言っているのですよ」と貴婦人(きふじん)がくり返した。

「この船にですか」

「そうですよ。この子は病気で、この板にからだを結(ゆわ)えつけていなければならないのです。それで昼間のうち少しでもゆかいにくらせるように、こうして船こ乗せて外へ出るのです。それであなたがたの親方が監獄(かんごく)にはいっておいでのあいだ、よければここにわたししたちといっしょにいてください。あなたのその犬とおさ

るが毎日芸をしてくれば、アーサとわたしが見物になってあげる。あなたはハープをひいてくれるでしょう。それであなたはわたしたちに務めてくれることになるし、わたしたちはわたしたちで、あなたがたのお役に立つこともありましょう」

船の上で。わたしはまだ船の上でくらしたことがなかったが、それはわたしの久しい望みであった。なんといううれしいこと。わたしは幸福に心のくらむような感じがした。なんという親切な人たちだろう。わたしはなんと言っていいかわからなかった。

わたしは貴婦人の手を取ってキッスした。

「かわいそうに」とかの女は優(やさ)しく言った。

かの女はわたしのハープを聞きたいと言った。そのくらい手軽ななぐさみですむことなら、わたしはどうかして、自分がどんなにありがたく思っているか見せたいと思った。

わたしは楽器(がっき)を手に取って、船のへさきのほうへ行って、静(しず)かにひき始(はじ)めた。

貴婦人(きふじん)はふとくちびるに小さな銀(ぎん)の呼子(よぶこ)ぶえを当てて、するどい音(ね)を出した。

わたしはなぜ貴婦人がふえをふいたのであろうと思って、ちょいと音楽をやめた。それはわたしのひき

方が悪いからであったか、それともやめろという合図であったか。

自分の身の回りに起こるどんな小さなことも見のがさないアーサは、わたしの不安心(ふあんしん)らしい様子を見つけた。

「お母さまは馬を行かせるために、ふえをふいたんだよ」とかれは言った。

まったくそのとおりであった。馬に引かれた小舟(こぶね)は、そろそろと岸(きし)をはなれて、堀割(ほりわり)の静(しず)かな波を切ってすべって行った。両側(りょうがわ)には木があった。後ろにはしずんで行く夕日のななめな光線が落ちた。

「ひきたまえな」とアーサが言った。

頭をちょっと動かしてかれは母親にそばに来いという合図をした。かれは母親の手を取って、しっかりにぎった。わたしはかれらのために、親方の教えてくれたありったけの曲をひいた。

最初の友だち

アーサの母親はイギリス人であった、名前をミリガン夫人と言った。後家さんで、アーサは一人っ子で

あった。少なくとも生きているただ一人の子どもだと考えられていた。なぜというに、かの女はふしぎな事情のもとに、長男をなくした。

その子は生まれて六月目に人にさらわれてしまった。それからどうしたかかいもく行くえがわからなかった。もっともその子がかどわかされたころ、ちょうどミリガン夫人はじゅうぶんの探索をすることのできない境遇であった。かの女の夫は死にかかっていたし、なによりもかの女自身がひどくわずらって、身の回りにどんなことが起こっているか、まるっきりわからずにいた。かの女が意識を取り返したときには、夫は死

んでいたし、赤子はいなくなっていた。かの女の実の弟に当たるジェイムズ・ミリガン氏はイギリスはもちろん、フランス、ベルギー、ドイツ、イタリアとほうぼうに子どもを探させたが、結局行くえは知れなかった。そうなるとあとつぎの子どもがないので、この人がにいさんの財産を相続するつもりでいた。

ところがやはり、ジェイムズ・ミリガン氏は、にいさんからなにも相続することができなかった。なぜというに、夫人の夫の死後七か月目に、夫人の二番目のむすこのアーサが生まれたのであった。

けれどもお医者たちはこの病身な、ひよわな子ども

の育つ見こみはないと言った。かれはいつ死ぬかもしれなかった。その子が死んだ場合には、ジェイムズ・ミリガン氏（し）は財産（ざいさん）を相続（そうぞく）することになるであろう。

　そう思ってかれはあてにして待っていた。

　けれども医者の予言（よげん）はなかなか実現（じつげん）されなかった。アーサはなかなか死ななかった。もう二十度も追っかけ追っかけ、なんぎな病（やまい）という病にかかって、それでも生きていた。そのたんびにこの子を生かしたものは母親の看護（かんご）の力であった。

　最後（さいご）の病は腰疾（ようしつ）（こしの病気）であった。それにはしじゅう板にねかしておくがいいというので、板の上

にからだを結えつけて動けないようにした。けれどそれをそのままうちの中に閉じこめておけば、今度は気鬱と空気の悪いために死ぬかもしれない。

そこでかの女は子どものためにきれいな、ういて動く家をこしらえてやって、フランスの国じゅうのいろいろな川を旅行しているのであった。その両岸の景色は、病人の子どもがねながら、ただ目を開いていさえすれば、目の前に動いて行くのであった。

もちろんこのイギリスの貴婦人とむすこについて、わたしはこれだけのことを残らず、初めての日に聞いたのではなかった。わたしはときどきかの女といるあ

いだに少しずつ細かい話を聞いた。

わたしが初めの日に聞いたことは、ただこの船の名が白鳥号ということ、それからわたしが部屋と定められた船室がどんなものであるかということだけであった。

わたしは高さ七尺（約二メートル）、はば三、四尺（約〇・九～一・二メートル）のかわいらしい船室を一つ当てがわれた。それはなんというふしぎな部屋におもわれたであろう。部屋のどこにもしみ一つついていなかった。

その船室に備えつけたたった一つの道具は、衣装戸

だなであった。けれどなんという戸だなだろう。寝台とふとんとまくらと毛布とがその下から出て来た。そして寝台についた引き出しには、はけやくしやいろいろなものがはいっていた。いすやテーブルというようなものも少なくともふつうの形をしたものはなかったが、かべに板がぴったりついている、それを引き出すと四角なテーブルといすになった。この小さな寝台にねむることをどんなにわたしは喜んだであろう。生まれて初めてわたしはやわらかいしき物をはだに当てた。バルブレンのおっかあのうちのはひじょうに固くって、いつもあらくほおをこすった。ヴィタリス

老人とわたしはたいていしき物なしでねむった。木賃宿にあるものは、みんなバルブレンのおっかあのうちのと同様にごりごりしていた。

わたしはあくる朝早く起きた。一座の連中が一晩どんなふうに過ごしたか知りたかったからである。

見るとかれらはみんなまえの晩入れてやった所にいて、このきれいな小舟はもう何か月もかれらの家であったかのようによくねいっていた。犬たちはわたしが近づくとはね起きたが、ジョリクールは片目を開いているくせに動かなかった。かえってラッパのような大いびきをかき始めた。

わたしはすぐにそのわけをさとった。ジョリクールはたいへんおこりっぽかった。かれは一度腹を立てると、長いあいだむくれていた。いまの場合は、ゆうべわたしがかれを船室に連れて行かなかったのをおもしろく思わなかったので、わざとふてねをして、ふきげんを示していたのであった。

わたしはなぜかれを甲板の上に置いて行かなければならなかったか、そのわけを説明することができなかった。それで少なくとも外見だけでも、わたしはかれにすまなかったと感じているふうを見せるために、かれをうでにだいて、なでたりさすったりしてやった。

初めはかれもむくれたままでいたが、まもなく、気が変わりやすい性質だけに、なにかほかのことに考えが移って、手まねで、よし、外へ散歩に連れて行くなら、かんべんしてやろうという意を示した。

甲板をそうじしていた男が、気軽に板をわたしてくれたので、わたしは部下を連れて野原へ出た。

犬とかけっこしたり、ジョリクールをからかったり、ほりをとんだり、木登りをしたりして遊んでいるうちに時間がたった。帰ってみると、馬はこやなぎの木につながれて、すっかり仕度ができていて、小舟はいつでも出発するようになっていた。

わたしたちがみんな船の上に乗ってしまうと、まもなく船をつないだ大づなは解(と)かれて、船頭はかじを、御者(ぎょしゃ)は手(た)づなを取った。引きづなの滑車(かっしゃ)がぎいぎい鳴って、馬は引き船の道をカッパカッパ歩きだした。

これでも動いているかと思うほど静(しず)かに船は水の上をすべって行った。そこに聞こえるものは小鳥の歌と、船に当たる水の音、それから馬の首につけたすずのチャランチャランチャランだけであった。

所どころ水はこい緑色に見えてたいへん深いようであった。そうかと思うと水晶(すいしょう)のようにすみきっていて、水の底(そこ)できらきら光る小石だの、ビロードのよう

な水草をすかして見ることができた。

わたしが水の中をじっとのぞきこんでいると、だれかがわたしの名前を呼んだ。それはアーサであった。かれは例の板に乗せられて運び出されていた。

「きみ、よくねられたかい、野原にねむるよりも」とかれはたずねた。わたしは半分、ミリガン夫人にあいさつするように、ていねいによくねむられたことを話した。

「犬は」アーサが聞いた。

わたしはかれらを呼んだ。かれらはジョリクールといっしょにかけて来た。このさるはいつも芝居をやら

されると思うときするように、しかめっ面(つら)をしていた。

ミリガン夫人(ふじん)はむすこを日かげに置(お)いて、自分もそのそばにすわった。

「それでは、あちらへ犬とさるを連(つ)れて行ってください。わたしたちは課業(かぎょう)がありますから」とかの女は言った。

わたしは連中(れんじゅう)を連(つ)れてへさきのほうへ退(しりぞ)いた。

あの気のどくな病人の子どもに、どんな課業(かぎょう)ができるのだろう。

わたしはかれの母親が手に本を持って、むすこに課業を授(さず)けているのを見た。

かれはそれを覚えるのがなかなか困難であるらしく見えた。しじゅう母親は優しく責めていたが、同時になかなか手ごわかった。

「いいえ」とかの女は最後に言った。「アーサ、あなたはまるで覚えていません」

「ぼく、できません。お母さま、ぼく、ほんとにできないんです」とかれは泣くように、言った。「ぼく病気なんです」

「あなたの頭は病気ではありません。アーサ、病人だからといって、だんだんばかになるような子をわたしは好きません」

これはずいぶん残酷（ざんこく）なようにわたしには思われた。
けれどかの女はあくまで優（やさ）しい親切な調子で言った。
「なぜ、あなたはわたしにこんな情（なさ）けない思いをさせるでしょう。あなたが習いたがらないのが、どんなにわたしには悲しいかわかるでしょう」
「ぼく、できません、お母さま、ぼくできないんです」
こう言ってかれは泣（な）きだした。

けれどもミリガン夫人（ふじん）は子どものなみだに負かされはしなかった。そのくせかの女はひじょうに感動して、ますます悲しそうになっていた。
「わたしもけさあなたをルミや犬たちと遊ばせてあげ

たいのだけれど、すっかりお話を覚（おぼ）えるまでは遊ばせることはできません」こう言ってかの女は本をアーサにわたして、一人置（お）き去りにしたまま向こうへ行った。わたしの立っていた所までかれの泣（な）き声（ごえ）が聞こえた。あれほどまでに愛（あい）しているらしい母親がどうしてこのかわいそうな子どもにこれほど厳格（げんかく）になれるのであろう。アーサの覚（おぼ）えられないのは病気のせいなのだ。かの女は優（やさ）しいことば一つかけないではいってしまうのであろうか。

　しばらくたってかの女はもどって来た。

「もう一度二人でやってみましょうね」とかの女は優

しく言った。

かの女は子どものわきにこしをかけて、本を手に取って、『おおかみと小ひつじ』というお話を読み始めた。アーサはその読み声について文句（もんく）をくり返した。三度初（はじ）めからしまいまで読み返して、それから本をアーサに返して、あとは一人で習うように言いつけて、船の中にはいってしまった。

わたしはアーサのくちびるの動くのを見た。

かれはたしかにいっしょうけんめい勉強していた。けれどもまもなく目を本からはなした。かれのくちびるは動かなくなった。かれの目はきよろきよろとあ

てもなく迷（まよ）ったが、本にはもどって来なかった。

ふとかれの目はわたしの目を見つけた。

わたしは課業（かぎょう）を続（つづ）けてやるようにかれに目くばせした。かれは注意を感謝（かんしゃ）するように微笑（びしょう）した。そしてまた本を読み始めた。けれどもまえのようにやはりかれは考えを一つに集めることができなかった。かれの目は川のこちらの岸から向こう岸へと迷（まよ）い始めた。ちょうどそのとき一羽（わ）のかわせみが矢のように早く船の上をかすめて、青い光をひらめかしながら飛んだ。

アーサは頭を上げてその行くえを見送った。鳥が行ってしまうと、かれはわたしのほうをながめた。

「ぼく、これが覚えられない」とかれは言った。「でもぼく、覚えたいんだ」

わたしはかれのそばへ行った。

「この話はそんなにむずかしくはありませんよ」とわたしは言った。

「うん、むずかしい。……たいへんむずかしいんだ」

「ぼくにはずいぶん易しいと思えますよ。あなたのお母さまが読んでいらっしゃるときに聞いていて、ぼくはたいてい覚えました」

かれはそれを信じないように微笑した。

「言ってみましょうか」

「できるもんか」
「やってみましょうか。本を持っていらっしゃい」
かれはまた本を取り上げた。わたしはその話を暗唱し始めた。わたしはほとんど完全に覚えていた。
「やあきみ、知っているの」
「そんなによくは知りません。けれどこのつぎのときまでには、一つもちがえずに言えるでしょう」
「どうして覚えたの」
「あなたのお母さまが読んでいらっしゃるあいだ、ぼくは聞いていました。ただいっしょうけんめいに、そこらの物を見向したりなんぞせずに、聞いていたので

す」

かれは顔を赤くした、そして目をそらした。

「ぼくもきみのようにやってみよう」とかれは言った。

「けれど一々のことばをどうしてそう覚(おぼ)えたか、言って聞かしてくれたまえ」

わたしはそれをどう説明(せつめい)していいかわからなかった。そんなことを考えてみたことはなかった。けれどやれるだけは説明してみた。

「このお話はなんの話でしょう」とわたしは言った。

「ひつじのことでしょう。ねえ、だからなにより先にぼくはひつじのことを考えました。それからひつじは

なにをしているか考えます。『多くのひつじは安全なおりの中で住んでいました』というのだから、ひつじがおりの中で安心して転がってねむっているところが見えてきます。そういうふうに目にうかべると忘れません」

「そうだそうだ」とかれは言った。「ぼくは見えるよ。黒いひつじだの、白いひつじだの、おりも、格子も見える」

「ひつじの番をするのはなんですか」

「犬さ」

「ひつじがおりの中にいて番をしないですむとき、犬

はなにをするでしょう」

「なんにも仕事はない」

「では犬はねむってもいいでしょう。ですから、『犬はねむっていました』と言うのです」

「そうだ。わけはない」

「ええ、わけはないのですとも、今度はほかのことに移（うつ）ります。では犬といっしょに番をするのはだれです」

「ひつじ飼（か）いさ」

「その犬やひつじ飼いは、ひつじがだいじょうぶだと思うとなにをしていたでしょう」

「犬は、ねむっていたのさ、ひつじ飼いは、遠くのほうへ行って、ほかのひつじ飼いたちとふえをふいて遊んでいた」

「あなたはそれが見えますか」

「ええ」

「どこにいます」

「にれの木のかげに」

「一人ですか」

「いいえ、近所のひつじ飼（か）いといっしょに」

「そらひつじやおりや犬やひつじ飼いのことを考えてごらんなさい。それができれば、このお話の初（はじ）めのほ

うは暗唱（あんしょう）ができるでしょう」
「ええ」
「やってごらんなさい」
「多くのひつじは安全なおりの中におりましたから、犬はみなねむっていました。ひつじ飼いも大きなにれの木のかげに、近所のひつじ飼いたちとふえをふいて遊んでいました。――覚（おぼ）えていた、覚（おぼ）えていた、まちがいはなかった」
アーサは両手を打ってさけんだ。
「あともそういうふうにして覚えたらどうです」
「そうだな、きみといっしょにやればきっと覚えられ

る。ああ、お母さまがどんなに喜ぶだろう」

アーサはやがてお話残らずを心の目にうかべるようになった。わたしはできるだけ一々の細かい話を説明した。かれがすっかり興味を持ってきたときに、わたしたちはいっしょに文句をさらった。そして十五分あとでは、かれはすっかり卒業していた。

やがて母親は出て来たが、わたしたちがいっしょにいるのでふきげんらしかった。かの女はわたしたちが遊んでいたと思った。けれどアーサはかの女に口をきかせるいとまをあたえなかった。

「ぼく、覚えました」とかれはさけんだ。「ルミが教

えてくれました」

ミリガン夫人は、びっくりしてわたしの顔を見た。けれどかの女がわけを問うさきに、アーサは『おおかみと小ひつじ』のお話を暗唱しだした。わたしはミリガン夫人の顔を見た。かの女の美しい顔は微笑にほころびた。そのうちわたしはかの女の目になみだがうかんだと思った。けれどかの女はあわてててむすこのほうをのぞきこんで、そのからだに両うでをかけた。かの女が泣いていたかどうか確かではなかった。

「ことばには意味がないのだから、目に見える事がらを考えなければいけないのです。ルミはぼくにふえを

ふいているひつじ飼いだの、犬だのひつじだの、それからおおかみだのを考えさせてくれました。おまけにひつじ飼いのふいていた節まで聞こえるようになりました。お母さま、ぼく、歌を歌ってみましょうか」

こう言ってかれは、イギリス語の悲しいような歌を歌った。

今度こそミリガン夫人はほんとうに泣いていた。なぜならかの女が席を立ったとき、わたしはアーサのほおがかの女のなみだでぬれているのを見た。そのとき夫人はわたしのそばに寄って、わたしの手を自分の手の中におさえて、優しくしめつけた。

「あなたはいい子です」とかの女は言った。

わたしがこのちょいとした出来事を長ながと書くにはわけがある。ゆうべまではわたしも宿なしのこぞうで、一座の犬やさるたちを連れて、船のそばへやって来て、病人の子どもをなぐさめるだけの者であった。けれどこの課業のことから、わたしは犬やさるから引きはなされて、病人の子どもの相手になり、ほとんど友だちになったのである。

もう一つ言っておかなければならないことがある。それはずっとあとで知ったことであるが、ミリガン夫人は実際このむすこの物覚えの悪いこと、もっと正

しく言えばなにも物を覚えないことを知って、ふさぎきっていた。病人の子ではあっても、勉強はさせておきたいと夫人は思った。それには病気が長びくだろうから、いまのうち物を習う習慣をつけておいて、いつか回復したとき、むだになった時間を取り返すことができるようにしたいと考えたのであった。

　ところがその日までもかの女はそれが思うようにならないでいた。アーサはけっして勉強することをいやだとは言わなかったが、注意と熱心がまるでがけていた。書物を手にのせればいやとは言わずに受け取った。手は喜んでそれを受け取ろうとして開いたが、心は

まるで開かなかった。ただもう機械のように動いて、しいて頭におしこまれたことばを空にくり返しているというだけであった。

そういうわけでむすこに失望した母親の心には、絶え間のない物思いがあった。

だから、アーサがいまたった半時間でお話を覚えて、一時をちがえず暗唱して聞かせるのを聞いたとき、かの女のうれしさというものはなかった。それはもっともなわけであった。

わたしはいま思い出しても、この船の上で、ミリガン夫人やアーサと過ごしたあのじぶんが、少年時代で

いちばんゆかいなときであったと思う。

アーサはわたしに熱い友情を寄せていた。わたしのほうでもわざとでなしに、また気のどくという同情からでなしに、しぜんとかれを兄弟のように思っていた。二人はけんか一つしたことはなかった。かれにはかれのような身分にありがちないばったところはみじんもなかった。わたしのほうも少しもひけめは感じなかった。またひけめを感じなければならないなどと思ったことすらなかった。

これはきっとわたしが子どもで、世の中を知らないためであったろう。しかしそれにはたしかに、ミリガ

ン夫人の行き届いた親切のおかげもあった。かの女はたいてい自分の子どものようにしてわたしに話しかけた。

それにこの船の旅がわたしにはじつにおもしろかった。一時間とたいくつしたこともなければ、つかれたと思うこともなかった。朝から晩までわたしの心はいつも充実しきっていた。

鉄道ができて以来、フランス南部地方の運河を見に来る人もなければ、知る人すらないようになったが、でもこれはやはりフランス名物の一つであった。

わたしたちはローラゲーのヴィーフランシュから、

アヴィニオンまで行って、アヴィニオンヌからノールーズの岩まで行った。ノールーズにはこの運河の開鑿者であるリケの記念碑が、大西洋に注ぐ水と地中海に落ちる水とが分かれる分水嶺の頂に建てられてあった。

それからわたしたちは水車の町であるカステルノーダリを下って、中世の都会であったカルカッソンヌへ、それから貯水溝のめずらしいフスランヌの閘門（船を高低の差のある水面に上げたり下ろしたりするしかけのある水門）をぬけてベジエールに下った。

おもしろい所ではわたしたちはたいそうゆっくり船

を進めた。けれど景色（けしき）がつまらなくなると馬は引き船の道を早足にとっとっとっとかけた。

いつどこでとまって、いつまでにどこまでへ着かなければならないということもなかった。毎日同じ決まった食事の時間に露台（ろだい）の上に集まって、静（しず）かに両岸の景色（けしき）をながめながら食事をした。日がしずむと船は止まった。日がのぼると船はまた動き出した。

雨でも降（ふ）ると、わたしたちは船室の中にはいって、勢（いきお）いよく燃（も）えた火を取り巻（ま）いてすわる。病人の子どもがかぜをひかないためであった。そういうとき、ミリガン夫人（ふじん）はわたしたちに本を読んで聞かせたり、画

帳を見せたり、美しいお話をして聞かせたりした。

それから夜、晴れた日には、わたしには一つ役目があった。船が止まったときわたしはハープをおかに持って下りて、少し遠くはなれた木のかげにこしをかける。それから木のえだのしげった中にかくれて、いっしょうけんめいにひいたり、歌を歌ったりするのである。静（しず）かな晩（ばん）など、アーサは、だれがひいているか見えないようにして、遠くの音楽を聞くことを好（この）んだ。そこでわたしがアーサの好（す）きな曲をひくと、かれは「アンコール」（もっと）と声をかける。それでわたしは同じ曲を二度くり返してひくのである。

それはバルブレンのおっかあの炉（ろ）ばたに育ち、ヴィタリス老人（ろうじん）とほこりっぽい街道（かいどう）を流浪（るろう）して歩いたいなか育ちの少年にとっては思いがけない美しい生活であった。

あの気のどくな養母（ようぼ）がこしらえてくれた塩（しお）のじゃがいもと、ミリガン夫人（ふじん）の料理番（りょうりばん）のこしらえるくだもの入りのうまいお菓子（かし）やゼリーやクリームやまんじゅうと比（くら）べると、なんというそういであろう。

あのヴィタリス親方のあとからとぼとぼくっついて、沼（ぬま）のような道や、横なぐりの雨や、こげつくような太陽の中を歩き回るのと、この美しい小舟（こぶね）の旅と比べて

は、なんというそういであろう。

料理はうまかった。そうだ、まったくすばらしかった。腹も減らないし、くたびれもしないし、暑すぎもせず、寒すぎもしなかった。けれどほんとうに正直なことを言えば、わたしがいちばん深く感じたのは、この夫人と子どもの、めずらしい親切と愛情であった。

二度もわたしはわたしの愛していた人たちから引きはなされた。最初はなつかしいバルブレンのおっかあから、それからヴィタリス親方から、わたしは犬とさるといっしょに空腹で、みじめなまま捨てられた。

そこへ美しい夫人がわたしと同じ年ごろの子どもを

連れて現れた。わたしをむかえて、まるでわたしが兄弟ででもあるようにあつかってくれた。

たびたびわたしはアーサが寝台に結えつけられて、青い顔をしてねむっているところを見ると、わたしはかれをうらやんだ。健康と元気に満ちたわたしが、かえって病人の子どもをうらやんだ。

それはわたしがうらやむのは、この子を引き包んでいるぜいたくではなかった。美しい小舟ではなかった。それはかれの母親であった。ああ、どのくらいわたしは自分の母親を欲しがっているだろう。

かれの母はいつでもかれにキッスした。そして、か

れはいつでもしたいときに、両うでにかの女をだくことができた。その優(やさ)しい夫人(ふじん)の手はたまたまわたしに向けられることもあっても、わたしからは思い切ってそれにさわり得(え)ないのではないか。わたしは自分にキッスしてくれる母親、わたしがキッスすることのできる母親を持たないことを悲しいと思った。

あるいはいつかまたわたしもバルブレンのおっかあには会うことがあるかもしれない。それはどんなにかうれしいことであろう。でもわたしはもうかの女を母親と呼(よ)ぶことはできない。なぜならかの女はわたしのほんとうの母親ではないのだから。

わたしは独(ひと)りぼっちだった。わたしはいつでも独りぼっちでいなければならない……だれの子どもでもないのだ。

わたしはもうこの世の中は、そうなんでも思うようになる所でないことを知るだけに大きくなっていた。それでわたしは母親もないし、家族もないから、友だちでもあればどんなにうれしいだろうと思っていた。だからこの小舟(こぶね)に来て、わたしは幸福であった。ほんとうに幸福であった。けれど、ああ、それは長く続(つづ)けることはできなかった。わたしがまたむかしの生活に返る日はおいおいに近づいていた。

捨(す)て子(ご)

旅の日数(ひかず)のたつのは早かった。親方が刑務所(けいむしょ)から出て来る日がずんずん近づいていた。船がだんだんツールーズから遠くなるに従(したが)って、わたしはこの考えに心を苦しめられていた。

船の旅はこのうえなくおもしろかった。なんの苦労(くろう)もなければ、心配もなかった。これがせっかく水の上を気楽に通って来た道を、今度は足でとぼとぼ歩いて

帰らなければならないときがじき来るのだ。

これはたまらなくおもしろくないことであった。そうなればもう寝台(ねだい)もなければ、クリームもない。お菓子(かし)もなければ、テーブルを取り巻(ま)いた楽しい夜会もなくなるのだ。

でもそれよりもこれよりもいちばんつらいのは、ミリガン夫人(ふじん)とアーサとに別(わか)れることであった。わたしはこの人たちの友情(ゆうじょう)からはなれなければならないであろう。そのつらさはバルブレンのおっかあに別れたときと同じことであろう。

わたしはある人びとをしたったり、その人びとから

かわいがられると、もう一生その人たちといっしょにくらしたいと思う。それがあいにくいつもじきその人たちと別れなければならないようになる。いわばちょうどその人たちと別れるために、愛し愛されたりするようなものであった。

　このごろの楽しい生活のあいだに、ただ一つこの心痛がわたしの心をくもらせた。

　ある日とうとうわたしは思い切って、ミリガン夫人に、ツールーズへ帰るにはどのくらいかかるだろうと聞いた。親方が刑務所から出る日に、わたしは刑務所の戸口で待っていようと思ったのである。

アーサはわたしが帰って行くという話を聞くと、急にさけびだした。

「帰っちゃいやだ、ルミ。行ってしまってはいやだ」

かれはすすり泣きをしていた。

わたしはかれに、自分がヴィタリス親方のものになっていること、かれが金を出して両親からわたしを借りていること、用のあるときいつでも帰って行かなければならないことを話した。

わたしは両親のことを話した。けれどもそれがほんとうの父親でも母親でもないことは話さなかった。わたしは自分が捨て子であることをはじに思った——

往来で拾われた子どもだということを白状することをはじに思った。わたしは孤児院の子どもというものがどんなにあなどられるものであるか知っていた。世の中で捨て子であるということほどいやなことがあろうとは、わたしには思えなかった。それをミリガン夫人やアーサに知られることを好まなかった。それを知られたら、あの人たちはわたしをきらうようになるだろう。

「お母さま、ルミはどうしても止めておかなければだめですよ」とアーサは言い続けた。

「わたしもルミをここへ止めておくことはたいへん

けっこうだと思うけれど」とミリガン夫人は答えた。

「わたしたちはずいぶんあの子が好きなのだからね。でもこれには二つやっかいなことがある。第一にはルミがいたがっているかどうか……」

「ああ、それはいますとも、いますとも」とアーサがさけんだ。「ねえルミ、行きたかないねえ、ツールーズへなんか」

「第二には」と、ミリガン夫人がかまわず続けた。「この子の親方が手放すだろうか、どうかということですよ」

「ルミが先です。ルミが先です」とアーサは言い張っ

た。

ヴィタリスはいい親方であった。かれがわたしにものを教えてくれたことに対しては、わたしはひじょうに感謝していた。けれどもかれとくらすのと、アーサとこうしてくらすのとではとても比較にはならなかった。同時に親方に持つ尊敬と、ミリガン夫人とその病身の子どもに対して持つ愛着とは比較にはならなかった。わたしはこういう外国人を、世話になった親方よりありがたいものに思うのはまちがっていると感じていた。けれどもそれはそのとおりにちがいなかった。わたしはミリガン夫人とアーサを心から愛してい

た。

「ルミがわたしたちの所にいても、いいことばかりはないでしょう」とミリガン夫人は続けた。

「この船にだって遊び半分ではいられません。ルミもやはりあなたと同じようにたくさん勉強をしなければなりません。とても青空の下で旅をして回るような自由な境涯ではないでしょう」

「ああ、ぼくの思っていることがおわかりでしたら……」とわたしは言いかけた。

「ほらほらね、お母さま」とアーサが口を出した。

「ではわたしたちがこれからしなければならないこと

は」とミリガン夫人が言った。「この子の親方の承諾を受けることです。わたしはまあ手紙をやってここへ来てもいいようにたのんでみましょう。こちらからツールーズへは行かれないからね。わたしは汽車賃を送ってあげて、なぜこちらから汽車に乗って行かれないか、そのわけをよく書いてあげましょう。つまりこちらへ呼ぶことになるのだが、たぶん承知してくださることだろうと思うから、それで相談したうえで、親方がこちらの申し出を承知してくだされば、今度はあなたのご両親と相談することにしましょう。むろんだまっていることはできないからね」

この最後（さいご）のことばで、わたしの美しいゆめは破（やぶ）れた。両親に相談（そうだん）する。そうしたらかれらはわたしが内証（ないしょう）にしようとしていることをすぐ言いたてるだろう。わたしが捨（す）て子（ご）だということを言いたてるだろう。

ああ捨（す）て子（ご）。そうなればアーサもミリガン夫人（ふじん）もわたしをきらうようになるだろう。

まあ自分の父親も母親も知らない子どもが、アーサの友だちであったか。

わたしはミリガン夫人の顔をまともにながめた。なんと言っていいか、わたしはわからなかった。かの女はびっくりしてわたしの顔を見た。わたしがどうした

のか、かの女はたずねようとしたが、わたしはそれに答えもできずにいた。たぶん親方が帰って来るという考えに気が転倒（てんとう）していると考えたらしく、かの女はそのうえしいては問わなかった。

　幸いにじきねむる時間が来たので、アーサからいつまでもふしぎそうな目で見られずにすんだ。やっと心配しながら自分の部屋（へや）に一人閉（と）じこもることができた。これはわたしが白鳥号に乗り合わせて以来（いらい）初（はじ）めてのふゆかいな晩（ばん）であった。それはおそろしくふゆかいな、長い熱病（ねつびょう）をわずらったような心持ちであった。わたしはどうしたらいいだろう。なんと言えばいいのだ。

たぶん親方はわたしを手放さないであろう。それなればかれらはどうしたってほんとうのことは知らずにいよう。かれらは、わたしの捨て子だということを知らずにすむだろう。素性を知られることについてのわたしの羞恥と恐怖があまりひどかったので、もうアーサ母子と別れても、しかたがない。ヴィタリスがなんでも自分といっしょに来いと主張することを希望し始めたくらいであった。そうなれば少なくともかれらはこののちわたしを思い出すたんびにいやな気がしないであろう。

それから三日たってミリガン夫人はヴィタリスに

送った手紙の返事を受け取った。かれは夫人の文意をよくくんで、向こうから来てかの女に会おうと言って来た。つぎの土曜日の二時の汽車で、セットへ着くはずにするからと言って来た。わたしは犬たちとジョリクールを連れて、かれに会いに停車場まで行くことを許された。

その朝になると、犬たちはなにか変わったことでも起こると思ったか、ひどくはしゃいでいた。ジョリクールだけは知らん顔をしていた。わたしはひじょうに興奮していた。きょうこそわたしの運命が決められる日であった。わたしに勇気があったら、親方にたの

んで捨て子だということをミリガン夫人に言ってもらわないようにたのむことができたであろう。けれどもわたしはかれに対してすら『捨て子』ということばを口に出して言うことができないような気がしていた。わたしは犬をひもでつないで、ジョリクールは上着の下に入れて、停車場の片すみに立って待っていた。わたしは身の回りに起こっていることはほとんど目にはいらなかった。汽車の着いたことを知らせてくれたのは犬であった。かれらは主人のにおいをかぎつけた。

　ふとわたしのおさえているひもを前に引くものがあった。わたしはうっかり見張りをゆるめていたので、

かれらはぬけ出したのであった。ほえながらかれらは前へとび出した。わたしはかれらが親方にとびかかるのを見た。ほかの二ひきに比(くら)べてははげしくしかもしたたかにカピが、いきなり主人のうでにとびかかった。ゼルビノとドルスがその足にとびかかった。

親方はわたしを見つけると、手早くカピをどけて、両うでをわたしのからだに投げかけた。初(はじ)めてかれはわたしにキッスした。

「ああよく無事(ぶじ)でいてくれた」とかれはたびたび言った。

親方はこれまでわたしにつらくはなかったが、こん

なふうに優しくはなかった。わたしはそれに慣れていなかった。それでわたしは感動して、思わずなみだが目の中にあふれた。それにいまのわたしの心持ちはたやすく物に動かされるようになっていた。わたしはかれの顔をながめた。刑務所にはいっているまにかれはひじょうに年を取った。背中も曲がったし、顔は青いし、くちびるに血の気はなかった。

「ルミ、わたしは変わったろう。なあ」とかれは言った。「刑務所はけっしてゆかいな所ではなかった。それに苦労というものは、たちの悪い病気のようなものだ。けれどももう出て来ればだいじょうぶだ。これから

はよくなるだろう」

それから話の題を変えてかれは言い続けた。

「わたしの所へ手紙を寄こしたおくさんのことを話しておくれ。どうしてそのおくさんと知り合いになったのだ」

わたしはここで、どうして白鳥号に乗って堀割をこいでいたミリガン夫人とアーサに出会ったか、それからわたしたちの見たこと、したことについてくわしく話した。わたしは自分でもなにを言っているのかわからないほど、のべつまくなしに話をした。こうしてわたしは親方の顔を見ると、これから別れてミリガン

夫人の所にいたいと言いだす気にはなれなかった。
　わたしたちはまだ話のすっかりすまないうちに、ミリガン夫人のとまっているホテルに着いた。親方は夫人が手紙でなんと書いて来たか、それは言わなかったから、わたしはかの女の申し出がどんなものであるかなんにも知らなかった。
「そのおくさんはわたしを待っていられるのかな」と、わたしたちがホテルにはいったときにかれは言った。
「ええ、ぼくがいまおくさんの部屋に案内しましょう」とわたしは言った。
「それにはおよばないよ」とかれは答えた。「わたし

は一人で上がって行く。おまえはここでジョリクールや、犬たちといっしょにわたしを待っておいで」

わたしは、いつでもかれに従順であったけれども、この場合はかれといっしょにミリガン夫人の部屋に行くことが、わたしとしてむろん正当でもあり自然なことだと思っていた。けれども手まねでかれがわたしのくちびるに出かかっていることばをおさえると、わたしはいやいや犬やさるといっしょに下に残っていなければならなかった。

どうしてかれはミリガン夫人と話をするのにわたしのいることを好まなかったか。わたしはこの質問を心

の中でくり返しくり返したずねた。それでもまだ明快(めいかい)な答えが得(え)られずに考えこんでいたときにかれはもどって来た。

「行っておくさんに、さようならを言っておいで」とかれはことば短に言った。「わたしはここで待っていてやる。あと十分のうちにたつのだから」

わたしはかみなりに打たれたような気がした。

「それ」とかれは言った。「おまえはわたしの言ったことがわからないか。なにを気のぬけた顔をして立っている。早くしないか」

かれはまだこんなふうにあらっぽくものを言ったこ

とがなかった。機械的にわたしは服従して、立ち上がった。なにがなんだかわからないような顔をしていた。

「あなたはおくさんになんとお言いに……」二足三足行きかけてわたしは問いかけた。

「わたしはおまえがなくてならないし、おまえにもわたしは必要なのだ。従ってわたしはおまえに対するわたしの権利を捨てることはできませんと言ったのさ。行って来い。いとまごいがすんだらすぐ帰れ……」

わたしは自分が捨て子だったという考えばかりに気を取られていたから、わたしがこれですぐに立ち去ら

なければならないというのは、きっと親方がわたしの素性を話したからだとばかり思っていた。

ミリガン夫人の部屋にはいると、アーサがなみだを流している。そのそばに母の夫人が寄りそっているところを見た。

「ルミ、きみ行ってはいやだよ。ねえ、ルミ、行かないと言ってくれたまえ」とかれはすすり泣きをした。

わたしはものが言えなかった。ミリガン夫人がわたしの代わりに答えた。つまりわたしがいま親方に言われたとおりにしなければならないことを、アーサに言って聞かせた。

「親方さんにお願いしましたが、あなたをこのままわたしたちにくださることを承知(しょうち)してくださいませんでした」とミリガン夫人(ふじん)は、いかにも悲しそうな声で言った。

「あの人は悪い人だ」とアーサがさけんだ。

「いいえ、あの人は悪い人ではありません」とミリガン夫人は言った。「あの人にはあなたがだいじで手放せないわけがあるのです。それにあの人はあなたをかわいがっていられる……あの人はああいう身分の人のようではない、どうしてりっぱな口のきき方をなさいました。お断(ことわ)りになる理由としてあの人の言われた

のは――そう、こうです、――わたしはあの子を愛(あい)している、あの子もわたしを愛している。わたしがあれに授(さず)けている世間の修業(しゅぎょう)は、あれにとって、あなたがたといるよりもずっといい、はるかにいいのだ。あなたはあれに教育を授けてくださるでしょう。それはほんとうだ。なるほどあなたはあれのちえを養(やしな)ってはくださるだろう、だがあれの人格(じんかく)は作れません。それを作ることのできるのは人生の艱難(かんなん)ばかりです。あれはあなたの子にはなれません。やはりわたしの子どもです。それはどれほどあれにとって居心地(いごこち)がよかろうとも、あなたの病身のお子さんのおもちゃになってい

るよりは、はるかにましです。わたしもできるだけあの子どもを教えるつもりですから――とこうお言いになるのですよ」

「でもあの人、ルミの父さんでもないくせに」とアーサはさけんだ。

「それはそうです。でもあの人はルミの主人です。ルミはあの人のものです。さし当たりルミはあの人に従(したが)うほかはありません。この子の両親が親方さんにお金で貸(か)したのですから。でもわたしはご両親にも手紙を書いて、やれるだけはやってみましょう」

「ああ、いけません。そんなことをしてはいけません」

とわたしはさけんだ。

「それはどういうわけです」

「いいえ、どうかよしてください」

「でもそのほかにしかたがないんですもの」

「ああ、どうぞよしてください」

ミリガン夫人が両親のことを言いださなかったなら、わたしは親方がくれた十分の時間以上をさようならを言うために費したであろう。

「ご両親たちはシャヴァノンにいるんでしょう」とミリガン夫人はたずねた。

それには答えないで、わたしはアーサのほうへ行っ

て、両うでをかれのからだに回して、しばらくはしっかりだきしめていた。それからかれの弱いうでからのがれて、わたしはふり向いてミリガン夫人(ふじん)に手をさし延(の)べた。

「かわいそうに」と、かの女はわたしの額(ひたい)にキッスしながらつぶやいた。

わたしは戸口へかけて行った。

「アーサ、わたしはいつまでもあなたを愛(あい)します」とわたしは言って、こみ上げて来るなみだを飲みこんだ。

「おくさん、わたしはけっしてけっしてあなたを忘(わす)れません」

「ルミ、ルミ……」とアーサがさけんだ。その後のことばはもう聞こえなかった。

わたしは手早くドアを閉（と）じて外に出た。一分間ののち、わたしはヴィタリスといっしょになっていた。

「さあ出かけよう」とかれは言った。

こうしてわたしは最初（さいしょ）の友だちから別（わか）れた。

ふぶきとおおかみ

またわたしは親方のあとについて痛（いた）い肩（かた）にハープを

結(むす)びつけたまま、雨が降(ふ)っても、日が照(て)りつけても、ちりやどろにまみれて、旅から旅へ毎日流浪(るろう)して歩かなければならなかった。広場であほうの役を演(えん)じて、笑(わら)ったり泣(な)いたりして見せて、「ご臨席(りんせき)の貴賓諸君(きひんしょくん)」のごきげんをとり結(むす)ばなければならなかった。

　長い旅のあいだ再三(さいさん)わたしは、アーサやその母親や白鳥号のことを考えて足が進まないことがあった。きたならしい村にはいると、わたしはあのきれいな小舟(こぶね)の船室をどんなに思い出したろう。それに木賃宿(きちんやど)のねどこのどんなに固(かた)いことであろう。（もう二度とアーサとも遊べないし、その母親の優(やさ)しい声も聞くことは

できない）それを考えるだけでもおそろしかった。

これほど深い、しつっこい悲しみの中で、うれしいことには、一つのなぐさめがあった。それは親方がまえよりはずっと優しく、温和になったことであった。

かれのわたしに対する様子はすっかり変わっていた。かれはわたしの主人というより以上のものであるように感じた。もうたびたび思い切って、かれにだきつきたいと思うほどのことがあった。それほどにわたしは愛情を求めていた。けれどもわたしにはそれをする勇気がなかった。親方はそういうふうになれなれしくすることを許さない人であった。

初めは恐怖がわたしをかれから遠ざけたけれど、このごろはなんとは知れないが、ぼんやりと、いわば尊敬に似た感情がかれとわたしをへだてていた。

わたしがいよいよ村の家を出るじぶんには、ふつうのびんぼうな階級の人たちと同じように親方を見ていた。わたしは世間なみの人からかれを区別することができずにいたが、ミリガン夫人と二か月くらしたあいだに、わたしの目は開いたし、ちえも進んだ。よく気をつけて親方を見ると、態度でも様子でも、かれにはひじょうに高貴なところがあるように見えた。かれの様子にはミリガン夫人のそれを思い出させるところ

があった。
　そんなときわたしは、ばかな、親方はたかが犬やさるの見世物師というだけだし、ミリガン夫人は貴婦人である、それが似かよったところがあるはずがないと思った。
　だがそう思いながら、よくよく見ると、わたしの目がまちがわないことが確かになった。親方はそうなろうと思えば、ミリガン夫人が貴婦人であると同様に紳士になることができた。ただちがうことは、ミリガン夫人がいつでも貴婦人であるのに反して、親方がある場合だけ紳士であるということであった。でも一度

そうなれば、それはりっぱな紳士になりきって、どんな向こう見ずな、どんな乱暴な人間でも、その威勢におされてしまうのであった。

だからもともと向こう見ずでも、乱暴でもなかったわたしは、よけい威勢に打たれて、言いたいことも言い得ずにしまった。それは向こうから優しいことばでさそい出してくれるときでもそうであった。

セットをたってからのち、しばらくわたしたちはミリガン夫人のことや、白鳥号に乗っていたあいだのことを口に出すことをしなかった。けれどもだんだんとそれが話の種になるようになって、まず親方がいつも

話の口を切った。そうしてそれからは一日も、ミリガン夫人の名前の口にのぼらない日はないようになった。

「おまえは好いていたのだね、あのおくさんを」と親方が言った。「そうだろう、それはわたしもわかっている。あの人は親切であった。まったくおまえには親切であった。その恩を忘れてはならないぞ」

そのあとでかれはいつも言い足した。

「だがしかたがなかったのだ」

こう言う親方のことばを、初めはわたしもなんのことだかわからなかった。するうちだんだんそれは、ミリガン夫人がそばへ置きたいという申し出をこばんだ

ことをさして言うのだとわかった。

親方がしかたがなかったと言ったとき、こういう考えになっていたのは確かであった。そのうえこのことばの中には後悔に似た心持ちがふくまれていたように思われた。かれはアーサのそばにわたしを残しておきたいと思ったのであろう。けれどそれはできないことだったというのである。

でもなぜかれがミリガン夫人の申し出を承知することができなかったか、よくはわからなかったし、あのとき夫人がくり返し言って聞かしてくれた説明も、あまりよくはわからずにしまったが、親方が後悔してい

るということがわかって、わたしは心の底（そこ）に満足（まんぞく）した。

もうこれでは親方も承知（しょうち）してくれるだろう。そうしてこれはわたしにとって大きな希望（きぼう）の目標（もくひょう）になった。

それにしても、なぜ白鳥号には出会わないのであろう。

それはローヌ川を上って行くはずであった。そうしてわたしたちはその川の岸に沿（そ）って歩いていた。

それで歩きながらわたしの目は両側（りょうがわ）を限（かぎ）っている丘（おか）や、豊饒（ほうじょう）な田畑よりも、よけい水の上に注がれていた。

わたしたちがアルルとか、タラスコンとか、アヴィ

ニオン、モンテリマール、ヴァランス、ツールノン、ヴィエンヌなど、という町に着いたときに、いちばん先にわたしの行ってみるのは、波止場か橋の上で、そこから川の上流を見たり、下流を見たり、わたしの目は白鳥号を探した。遠方に半分、深い霧にかくれてぼんやりした船のかげでも見つけると、それが白鳥号であるかないか、見分けられるほど大きくなるのを待つのであった。

でもそれはいつも白鳥号ではなかった。

ときどきわたしは思い切って船頭に聞いてみた。わたしの探す美しい船の模様を話して、そういう船を見

なかったかとたずねた。でもかれらはけっしてそういう船の通るのを見たことがなかった。

　このごろでは親方も、わたしをミリガン夫人（ふじん）にわたそうと決心していた。少なくともわたしにはそう想像（そうぞう）されたから、もはやわたしの素性（すじょう）を告（つ）げたり、バルブレンのおっかあに手紙をやったりされるおそれがなくなった。そのほうの事件（じけん）は親方とミリガン夫人との間の相談（そうだん）でうまくまとめてくれるだろう。そう思って、わたしの子どもらしいゆめでいろいろに事件を処理（しょり）してみた。ミリガン夫人はわたしをそばに置（お）きたいと言うだろう。親方はわたしに対する権利（けんり）を捨（す）てることを

承知してくれるだろう。それでいっさい事ずみだ。

わたしたちは何週間もリヨンに滞在していた。そのあいだひまさえあればいく度もわたしはローヌ川と、ソーヌ川の波止場に行ってみた。おかげでエーネー、チルジット、ラ・ギヨッチエール、ロテル・デューなどという橋のことは、生えぬきのリヨン人同様によく知っていた。

しかしやはりわからなかった。とうとう白鳥号を見つけることはできなかった。

わたしたちはとうとうリヨンを去らなければならなかった。そしてディジョンに向かった。それでわたし

はもうミリガン夫人（ふじん）に二度と会う希望（きぼう）を捨（す）てなければならなかった。それはリヨンでフランス全国の地図を調べてみたが、どうしても白鳥号がロアール川に出るには、これより先へ川を上って行くことのできないことを知ったからであった。船はシャロンのほうへ別（わか）れて行ったのであろう。そう思ってわたしたちはシャロンに着いたが、やはり船を見ることなしにまた進まなければならなかった。これがわたしの夢想（むこう）の結末（けつまつ）であった。

　いよいよいけなくなったことは、冬がいまや目近（まぢか）にせまってきたことであった。わたしたちは目も見えな

いような雨とみぞれの中をみじめに歩き回らなければならなかった。夜になってわたしたちがきたない宿屋(やどや)かまたは物置(ものお)き小屋(ごや)につかれきってたどり着くと、もうはだまで水がしみ通って、わたしたちはとても笑顔(えがお)をうかべてねむる元気はなかった。

ディジョンをたってから、コートドールの山道をこえたときなどは、雨にぬれて骨(ほね)までもこおる思いをした。ジョリクールなどは、わたしと同様いつも情(なさ)けない悲しそうな顔をしていた。よけい意地悪くなっていた。

親方の目的(もくてき)は少しでも早くパリへ行き着くことで

あった。それは冬のあいだ芝居をして回れるのはパリだけであった。わたしたちはもうごくわずかの金しか得られなかったので、汽車に乗ることもできなかった。
道みちの町や村でも、日和のつごうさえよければ、ちょっとした興行をやって、いくらかでも収入をかき集めて、出発するようにした。寒さと雨とで苦しめられながら、でもシャチヨンまではどうにかしてやって来た。
シャチヨンをたってから、冷たい雨の降ったあとで、風は北に変わった。
もういく日かしめっぽい日が続いたあとでは、わた

したちも顔にかみつくようにぶつかる北風を、いっそ気持ちよく思っていたが、まもなく空は大きな黒い雲でおおわれて、冬の日はすっかりかくれてしまった。大雪の近づいていることがわかっていた。

わたしたちがちょっとした大きな村に着くまではまだ雪にもならなかった。でも親方は、なんでもトルアの町へ早く行こうとあせっていた。そこは大きい町だから、ひじょうに悪い天気で五、六日逗留しても、少しは興行を続けて回る見こみがあった。「早くとこにおはいり」とその晩宿屋に着くと親方は言った。「あしたはなんでも早くからたつのだ……だが雪に降りこ

められてはたまらないなあ」

でもかれはすぐにはとこにはいらなかった。台所の炉(ろ)のすみにこしをかけて、寒(さむ)さでひどく弱っているジョリクールを暖(あたた)めていた。さるは毛布(もうふ)にくるまっていても、やはり苦しがって、うめき声をやめなかった。

あくる日の朝、わたしは言いつけられたとおり早く起きた。まだ夜が明けてはいなかった。空はまっ暗な雲が低(ひく)く垂(た)れて、星のかげ一つ見えなかった。ドアを開けると、はげしい風がえんとつにふき入って、危(あぶ)なくゆうべ灰(はい)の中にうずめたほだ火をまい上げそうにし

た。
宿屋の亭主は親方の顔を見て、
「わたしがあなただったら、きょうは出るどころではありません。いまにひどいふぶきになりますぜ」
「わたしは急いでいるのだ」と親方は答えた。「その大ふぶきの来るまえにトルアまで行きたいと思っている」
「六、七里（約二十四～二十八キロ）もありますよ。一時間やそこらで行けるものですか」
でもかまわずわたしたちは出発した。
親方はジョリクールをしっかりかからだにだきしめて、

自分の温かみを少しでも分けてやろうとした。犬は固(かた)いこちこちな道を歩くのをうれしがって、先に立ってかけた。親方はデイジョンでわたしにひつじの毛皮服を買ってくれたので、わたしは毛を裏にしてしっかり着こんだ。これがこがらしでべったりからだにふきつけられていた。

わたしたちは口を開くのがひどくふゆかいだったので、だまりこんで歩きながら、少しでも暖(あたた)まろうとして急いだ。

もう夜明けの時間をよほど過(す)ぎていたが、空はまだまっ暗であった。東のほうに白っぽい帯(おび)のようなもの

が雪の間に流れてはいたが、太陽は出て来そうもなかった。

野景色（のげしき）を見わたすと、いくらか物がはっきりしてきた。葉をふるった木も見えるし、灌木（かんぼく）や小やぶの中でかれっ葉ががさがさ風に鳴っていた。

往来（おうらい）にも畑にも出ている人はなかった。車の音も聞こえないし、むちの鳴る音も聞こえなかった。

ふと北の空に青白い筋（すじ）が見えたが、だんだん大きくなってこちらのほうへ向かって来た。そのときわたしたちはきみょうながあがあいうささやき声のような音を聞いた。それはがんか野の白鳥のさけび声であった

ろう。この気ちがいじみた鳥の群(む)れは、わたしたちの頭の上を飛(と)んだと思うと、もう北から南のほうへおもしろそうにかけって行った。かれらが遠い空の中に見えなくなると、やわらかな雪片(せっぺん)が静(しず)かに落ちて来た。それは空中を遊び歩いているように見えた。

　わたしたちが通って行く道は喪中(もちゅう)のようにしずんでさびしかった。あれきって陰気(いんき)な野原の上にただ北風のはげしいうなり声が聞こえた。雪片が小さなちょうちょうのように目の前にちらちらした。絶(た)えずくるくる回って、地べたに着くことがなかった。

　わたしたちはまた少ししか歩いてはいなかった。雪

の降るまえにトルアに着くということは、むずかしいことに思われた。けれどわたしは心配しなかった。雪が降りだせば風がやんで、かえって寒さもゆるむだろうと思った。

わたしはまだ雪風というものがどんなものだかよく知らなかった。

しかしまもなくそれがほんとうにわかった。しかもわたしにはけっして忘れることのできないものであった。

雲が東北からむくむく集まって来た。そこの空にかすかな明るみが見えたと思うと、やがて雲のふところ

が開いて、どんどん大きな雪のかたまりが落ちて来た。もう空中をちょうちょうのようにはまわなかった。ふんぷんとすばらしい勢(いきお)いで降(ふ)って来て、わたしたちの目鼻を開けられないようにした。

「とてもトルアまではだめだ。なんでもうちを見つけしだい休むことにしよう」と親方が言った。

　わたしは親方がそう言うのを聞いてうれしかったけれども、いったいうまく休むうちが見つかるであろうか。まだそこらが白くならないまえにわたしが見ておいたかぎりでは、一けんもうちは見えなかった。そればかりではない。おいおい村に近づいているという気

配も見えなかった。
　わたしたちの前には底知(そこし)れぬ黒い森が横たわっていた。わたしたちを包(つつ)んでいる両側(りょうがわ)の丘陵(きゅうりょう)もやはり深い森であった。
　雪はいよいよはげしく降(ふ)ってきた。わたしたちはだまって歩いた。親方はおまけにひつじの毛皮服を持ち上げて、ジョリクールが楽に息のできるようにしてやった。ただときどき首を左右に動かさなければ息ができなかった。
　犬たちももう先に立ってかけることができなかった。かれらはわたしたちのかかとについて歩いて、早く休

むうちを求(もと)めたがっているような顔をしていたが、それをあたえてやることができなかった。

道はいっこうにはかどらなかった。わたしたちはとぼとぼ骨(ほね)を折(お)って歩いた。目を開けてはいられなかった。じくじくぬれた着物がこおりついたまま歩いて行った。もう深い森の中にはいっていたが、まっすぐな道で、わたしたちはさえぎるもののないあらしにふきさらされていた。そのうち風はいくらか静(しず)まったが、雪のかたまりはますます大きくなって、みるみる積(つ)もった

わたしは親方がなにか探(さが)し物(もの)をするように、おりお

り左のほうへ目を注ぐのを見たが、かれはなにも言わなかった。なにをかれは見つけようとするのであろう。

わたしは長い道の向こうばかりまっすぐに見ていた。この森がもうほどなくおしまいになって、人家が現(あらわ)れてきはしないかという望(のぞ)みをかけていた。

だが目の届(とど)く限(かぎ)り両側(りょうがわ)は雪にうずまった林であった。前はもう二、三間（四〜五メートル）先が雪でぼんやりくもっていた。

わたしはこれまで暖(あたた)かい台所の窓(まど)ガラスに雪の降(ふ)るところを見ていた。その暖かい台所がどんなにかはるか遠いゆめの世界のように思われることであろう。

　でもやはり行くだけは行かなければならなかった。わたしたちの足はだんだん深く雪の中にもぐりこんだ。そのときふと、なにも言わずに親方が左手を指さした。なるほど、わたしはぼんやりと、空き地の中に堀立小屋(ほったてごや)のようなものを見た。

　わたしたちはその小屋に通う道を探(さが)さなければならなかった。でも雪がもう深くなって、道という道をうずめてしまったので、これは困難(こんなん)な仕事であった。わたしたちはやぶの中をかけ回って、みぞをこえて、やっとのことで小屋へ行く道を見つけて中へはいることができた。

その小屋は丸太やしばをつかねて造ったもので、屋根も木のえだのたばを積み重ねて、雪が間から流れこまないように固くなわでしめてあった。

犬たちはうれしがって、元気よく先に立ってかけこんだ、ほえながらたびたびかわいた土の上をほこりを立てて転げ回っていた。

わたしたちの満足もかれらにおとらず大きかった。

「こういう森の中の木を切ったあとには、きこりの小屋があるはずだと思っていた」と親方が言った。「もういくら雪が降ってもかまわないぞ」

「そうですとも。雪なんかいくらでも降れだ」とわた

しは大いばりで言った。

わたしは戸口――というよりも小屋に出入する穴というほうが適当で、そこにはドアも窓もなかったが――そこまで行って、わたしは上着とぼうしの雪をはらった。せっかくのかわいた部屋をぬらすまいと思ったからである。

わたしたちの宿の構造はしごく簡単であった。備えつけの家具も同様で、土の山と、二つ三つ大きな石がいすの代わりに置いてあるだけであった。それよりもありがたかったのは、部屋のすみに赤れんがが五、六枚、かまどの形に積んであったことである。なにより

もまず火を燃(も)やさなければならぬ。

なによりも火がいちばんのごちそうだ。

さてまきだが、このうちでそれを見つけることは困難(こんなん)ではなかった。

わたしたちはただかべや屋根からまきを引きぬいて来ればよかった。それはわけなくできた。

まもなくたき火の赤いほのおがえんえんと立った。むろん小屋はけむりでいっぱいになったが、そんなことはいまの場合かまうことではなかった。わたしたちの欲(ほっ)しているのは火と熱(ねつ)であった。

わたしは両手をついて、腹(はら)ばいになって火をふいた。

犬は火のぐるりをゆうゆうと取り巻(ま)いて、首をのばして、ぬれた背中(せなか)を火にかざしていた。

ジョリクールはやっと親方の上着の下からのぞくだけの元気が出て、用心深く鼻の頭を外に向けてそこらをながめ回した。安全な場所であることを確(たし)かめて満足(まんぞく)したらしく、急いで地べたにとび下りて、たき火の前のいちばん上等な場所を占領(せんりょう)して、二本の小さなふるえる手を火にかざした。

親方は用心深い、経験(けいけん)に積(つ)んだ人であるから、その朝わたしが起き出すまえに道中の食料(しょくりょう)を包(つつ)んでおいた。パンが一本とチーズのかけであった。わたしたち

はみんな食物を見て満足（まんぞく）した。

情（なさ）けないことにわたしたちはごくわずかしか分けてもらえなかった。それはいつまでここにいなければならないかわからないので、親方がいくらか晩飯（ばんめし）に残（のこ）しておくほうが確実（かくじつ）だと考えたからであった。

わたしはわかったが、しかし犬にはわからなかった。それでかれらはろくろく食べもしないうちにパンが背嚢（はいのう）に納（おさ）められるのを見ると、前足を主人のほうに向けて、そのひざがしらを引っかいた。目をじっと背嚢につけて、中の物をぜひ開けさせようといろいろの身ぶりをやった。けれども親方はまるでかまいつけな

かった。

背嚢はとうとう開かれなかった。犬はあきらめてねむる決心をした。カピは灰の中に鼻をつっこんでいた。わたしもかれらの例にならおうと考えた。けさは早かった。いつやむか、見当のつかない雪を見てくよくよしているよりも、白鳥号に乗って、ゆめの国にでも遊んだほうが気が利いている。

わたしはどのくらいねむったか知らなかった。目が覚めると雪がやんでいた。わたしは外をながめた。雪はひじょうに深かった。無理に出て行けばひざの上までうずまりそうであった。

何時だろう。

わたしはそれを親方にたずねることができなかった。なぜなら例のカピが時間を示した大きな銀時計は売られてしまった。かれは罰金や裁判の費用をはらうためにありったけの金を使ってしまった。そしてディジョンでわたしの毛皮服を買うときに、その大きな時計も売ってしまったのであった。

時計を見ることができないとすれば、日の加減で知るほかはないが、なにぶんどんよりしているので、何時だか時間を推量するのが困難であった。

なんの物音も聞こえなかった。雪はあらゆる生物の

活動をそれなりこおらせてしまったように思われた。

わたしは小屋の入口に立っていると、親方の呼ぶ声が聞こえた。

「これから出て行けると思うかな」とかれはたずねた。

「わかりません。あなたのいいようにしたいと思います」

「そうか、わたしはここにいるほうがいいと思う。まあまあ屋根はあるし、たき火もあるのだから」

それはほんとうであったが、同時にわたしは食物のないことを思い出した。けれどもわたしはなにも言わなかった。

「どうせまた雪は降(ふ)ってくるよ。とちゅうで雪に会ってはたまらない。夜はよけい寒くなる。今夜はここでくらすほうが無事(ぶじ)だ。足のぬれないだけでもいいじゃないか」

そうだ。わたしたちはこの小屋に逗留(とうりゅう)するほかはない。胃(い)ぶくろのひもを固(かた)くしめておく、それだけのことだ。

夕飯(ゆうはん)に親方が残(のこ)りのパンを分けた。おやおや、もうわずかしかなかった。すぐに食べられてしまった。わたしたちはくずも残(のこ)さず、がつがつして食べた。このつましい晩食(ばんしょく)がすんだとき、犬はまたさっきのよう

にあとねだりをするだろうと思っていたが、かれらはまるでそんなことはしなかった。今度もわたしは、どのくらいかれらがりこうであるか知った。

　親方がナイフをズボンのかくしにしまうと、これは食事のすんだ知らせであったから、カピは立ち上がって、食物を入れたふくろのにおいをかいだ。それから前足をふくろにのせてこれにさわってみた。この二重の吟味（ぎんみ）で、もうなにも食物の残（のこ）っていないことがわかった。それでかれはたき火の前の自分の席（せき）に帰って、ゼルビノとドルスの顔をながめた。その顔つきはあきらかにどうもしんぼうするほかはないよという意味を

示(しめ)していた。そこでかれはあきらめたというように、ため息をついて全身を長ながとのばした。

「もうなにもない。ねだってもだめだよ」かれはこれを大きな声で言ったと同様、はっきりと仲間(なかま)の犬たちに会得(えとく)さしていた。

かれの仲間(なかま)はこのことばを理解(りかい)したらしく、これもやはりため息をつきながらたき火の前にすわった。けれどゼルビノのため息はけっしてほんとうにあきらめたため息ではなかった。おなかの減(へ)っているうえに、ゼルビノはひじょうに大食らいであった。だからこれはかれにとっては大きな犠牲(ぎせい)であった。

雪がまたずんずん降（ふ）りだしていた。ずいぶんしつっこく降っていた。わたしたちは白い地べたのしき物が高く高くふくれ上がって、しまいに、小さな若木（わかぎ）や灌木（かんぼく）がすっかりうずまってしまうのを見た。夜になっても、大きな雪片（せっぺん）がなお暗い空からほの明るい地の上にしきりなしに落ちていた。

わたしたちはいよいよここへねむるとすれば、なによりいちばんいいことは、できるだけ早くねつくことであった。わたしは昼間火でかわかしておいた毛皮服にくるまってまくらの代わりにした。平ったい石に頭をのせて、たき火の前に横になった。

「おまえはねむるがいい」親方が言った。「わたしのねむる番になればおまえを起こすから。この小屋ではけものもなにも心配なことはないが、二人のうち一人は起きていて、火の消えないように番をしなければならない。用心してかぜをひかないように気をつけなければいけない。雪がやむとひどい寒さになるからな」

わたしはさっそくねむった。親方がまたわたしを起こしたときには、夜はだいぶふけていた。たき火はまだ燃(も)えていた。雪はもう降(ふ)ってはいなかった。

「今度はわたしのねむる番だ」と親方が言った。「火が消えたら、ここへこのとおりたくさん採(と)っておいた

まきをくべればいい」

なるほどかれはたき火のわきに小えだをたくさん積み上げておいた。わたしよりずっと少ししかねむれない親方は、わたしがいちいちかべからまきをぬくたびに音を立てて目を覚まさせられることをいやがった。それでわたしはかれのこしらえておいてくれたまきの山から取っては、そっと音を立てずに火にくべればよかった。

　たしかにこれはかしこいやり方ではあったけれど、情けないことに親方は、これがどんな意外な結果を生むかさとらなかった。

かれはいまジョリクールを自分の外とうですっかりくるんだまま、たき火の前にからだをのばした。まもなくしだいに高く、しだいに規則(きそく)正しいいびきで、よくねいったことが知れた。

そのときわたしはそっと立ち上がって、つま先で歩いて、外の様子がどんなだか、入口まで出て見た。

草もやぶも木もみんな雪にうまっていた。日の届(とど)くかぎりどこも目がくらむような白色であった。空にはぽつりぽつり星の光がきらきらしていた。それはずいぶん明るい光ではあったが、木の上に青白い光を投げているのは雪の明かりであった。もうずっと寒くなっ

ていた。ひどくこおっていた。すきまからはいる空気は氷のようであった。喪中（もちゅう）にいるような静（しず）けさの中に、雪の表面のこおりつく音がいく度となく聞こえた。
「ああ、この森のおくで雪の中にうめられてわたしたちはどうすればいいのだ。この雪と寒さの中で、この小屋でもなかったらどうなったであろう」
わたしはそっと音のしないように出たのであったが、やはり犬たちを起こしてしまった。中でもゼルビノは起き上がってわたしについて来た。夜の荘厳（そうごん）はかれにとってなんでもなかった。かれはしばらく景色（けしき）をながめたが、やがてたいくつして外へ出て行こうとした。

わたしはかれに中にはいるように命令（めいれい）した。ばかな犬よ。このおそろしい寒さの中でうろつき回るよりは、暖（あたた）かいたき火のそばにおとなしくしていたほうがどのくらいいいか知れない。かれは不承不承（ふしょうぶしょう）にわたしの言うことを聞いたが、しかしひどくふくれっ面（つら）をして、目をじっと入口に向けていた。よほどしつっこい、いったん思い立ったことを忘（わす）れない犬であった。

　わたしは、まっ白な夜をながめながらまだ二、三分そこに立っていた。それは美しい景色（けしき）ではあったし、おもしろいと思ったが、なんとも言えないさびしさを感じた。むろん見まいと思えば目をふさいで中には

いって、そのさびしい景色を見ずにいることはできるのだが、白いふしぎな景色がわたしの心をとらえたのであった。

とうとうわたしはまたたき火のそばへ帰って、二、三本まきをたがいちがいに火の上に組み合わせて、まくらの代わりにした石の上にこしをかけた。

親方はおだやかにねむっていた。犬たちとジョリクールもまたねむっていた。ほのおが火の中から上って、ぴかぴか火花を散(ち)らしながら屋根のほうまで巻(ま)き上がった。ぱちぱちいうたき火のほのおの音だけが夜の沈黙(ちんもく)を破(やぶ)るただ一つの音であった。

長いあいだわたしは火をながめていたけれど、だんだん我知らずうとうとし始めた。わたしが外へ出てまきをこしらえる仕事でもしていたら、目を覚ましていられたかもしれなかったが、なにもすることもなくって火にあたっているので、たまらなくねむくなってきた。そのくせしょっちゅう自分ではいっしょうけんめい目を覚ましているつもりになっていた。

ふとはげしいほえ声にわたしは目が覚めて、とび上がった。まっ暗であった。わたしはかなり長いあいだねむったらしく、火はほとんど消えかかっていた。もう小屋の中にほのおが光ってはいなかった。

カピはけたたましくほえたてていた。けれどふしぎなことにゼルビノの声もドルスの声もしなかった。

「どうした。どうした」と親方が目を覚(さ)ましてさけんだ。

「知りません」

「おまえはねむっていたのだな。火も消えている」

カピは入口までかけ出して行ったが、外へとび出そうとはしなかった。出口でウウ、ウウ、ほえていた。

「どうした。どうしたというんだろう」わたしは今度は自分にたずねた。

カピのほえ声に答えて、二声三声、すごい悲しそう

なうなり声が聞こえた。それはドルスの声だとわかった。そのうなり声は小屋の後ろから、しかもごく近い距離から聞こえて来た。

わたしは外へ出ようとした。けれど親方はわたしの肩に手をのせて引き止めた。

「まあまきをくべなさい」かれは命令の調子で言った。

言いつけられたとおりにわたしがしていると、かれは火の中から一本小えだを引き出して、火をふき消して、燃えている先を吹いた。

かれはそのたいまつを手に持った。

「さあ、行って見て来よう」とかれは言った。「わたし

のあとについておいで。カピ、先へ行け」
外へ出ようとすると、はげしいほえ声が聞こえた。
カピはこわがって、あとじさりをして、わたしたちの間に身をすくめた。
「おおかみだ。ゼルビノとドルスはどこへ行ったろう」
なにをわたしが言えよう。二ひきの犬はわたしのねむっているあいだに出て行ったたにちがいない。ゼルビノはわたしがねつくのを待って、ぬけ出して行った。そしてドルスが、そのあとについて行ったのだ。
おおかみがかれらをくわえたのだ。親方が犬のこと

をたずねたとき、かれの声にはその恐怖（きょうふ）があった。
「たいまつをお持ち」とかれは言った。「あれらを助けに行かなければならない」
村でわたしはよくおおかみのおそろしい話を聞いていた。でもわたしはちゅうちょすることはできなかった。わたしはたいまつを取りにかけて帰って、また親方のあとに続（つづ）いた。
けれども外には犬も見えなければおおかみも見えなかった。雪の上にただ二ひきの犬の足あとがぽつぽつ残（のこ）っていた。わたしたちはその足あとについて小屋の回りを歩いた。するとややはなれて雪の中でなにかけ

ものが転（ころ）がり回ったようなあとがあった。

「カピ、行って見て来い」と親方は言った。同時にかれはゼルビノとドルスを呼（よ）び寄（よ）せる呼（よ）び子（こ）をふいた。

けれどこれに答えるほえ声は聞こえなかった。森の中の重苦しい沈黙（ちんもく）を破（やぶ）る物音はさらになかった。カピは言いつけられたとおりにかけ出そうとはしないで、しっかりとわたしたちにくっついていた。いかにも恐怖（きょうふ）にたえない様子であった。いつもはあれほど従順（じゅうじゅん）でゆうかんなカピが、もう足あとについてそれから先へ行くだけの勇気（ゆうき）がなかった。わたしたちの回りだけは雪がきらきら光っていたが、それから先はた

だどんよりと暗かった。

もう一度親方は呼び子をふいて、迷い犬を呼びたてた。でもそれに答える声はなかった。わたしは気が気でなかった。

「ああ、かわいそうなドルス」親方はわたしの心配しきっていることをすっぱり言った。

「おおかみがつかまえて行ったのだ。どうしてあれらを放してやったのだ」

そう、どうして――そう言われて、わたしは答えることばがなかった。

「行って探して来なければ」とわたしはしばらくして

言った。

わたしは先に立って行こうとしたけれど、かれはわたしを引き止めた。

「どこへ探しに行くつもりだ」とかれはたずねた。

「わかりません、ほうぼうを」

「この暗がりでは、どこに行ったかわかるものではない。この雪の深い中で……」

それはほんとうであった。雪がわたしたちのひざの上まで積もっていた。わたしたちの二本のたいまつをいっしょにしても、暗がりを照らすことはできなかった。

「ふえをふいても答えないとすると、遠方へ行ってしまっているのだ」とかれは言った。

「わたしたちは、むやみに進むことはならない。おおかみはわれわれにまでかかって来るかもしれない。今度は自分を守ることができなくなる」

かわいそうな犬どもを、その運命(うんめい)のままに任(まか)せるということは、どんなに情(なさ)けないことであったろう。

――われわれの二人の友だち、それもとりわけわたしにとっての友だちであった。それになにより困(こま)ったことは、それがわたしの責任(せきにん)だということであった。わたしはねむりさえしなかったら、かれらも出て行き

はしなかった。

親方は小屋に帰って行った。わたしはそのあとに続きながら、一足ごとにふり返っては、立ち止まって耳を立てた。

雪のほかにはなにも見えなかった。なんの声も聞こえなかった。

こうしてわたしたちが、小屋にはいると、もう一つびっくりすることがわたしたちを待っていた。火の中に投げこんでおいたえだは勢いよく燃え上がって、小屋のすみずみの暗い所まで照らしていた。けれどもジョリクールはどこへ行ったか見えなかった。かれの

着ていた毛布はたき火の前にぬぎ捨ててあった。けれどかれは小屋の中にはいなかった。親方もわたしも呼んだ。けれどかれは出て来なかった。

親方の言うには、かれの目を覚ましたときには、さるはわきにいた。だからいなくなったのは、わたしたちが出て行ったあとにちがいなかった。燃えているたいまつを雪の積もった地の上にくっつけるようにして、その足あとを見つけ出そうとした。でもなんの手がかりもなかった。

どこかたばねたまきのかげにでもかくれているのではないかと思って、わたしたちはまた小屋へ帰って、

しばらく探(さが)し回った。いく度もいく度も同じすみずみを探した。

わたしは親方の肩(かた)に上って、屋根に葺(ふ)いてあるえだたばの中を探してみた。二度も三度も呼(よ)んでみた。けれどもなんの返事もなかった。

親方はぷりぷりかんしゃくを起こしているようであった。わたしはがっかりしていた。

わたしは親方に、おおかみがかれまでも取って行ったのではないかとたずねた。

「いいや」とかれは言った。「おおかみは小屋の中まではいっては来なかっただろう。ゼルビノとドルス

は外へ出たところをくわえられたかと思うが、この中まではいって来られまい。たぶんジョリクールはこわくなって、わたしたちの外に出ているあいだにどこへかかくれたにちがいない。それをわたしは心配するのだ。このひどい寒さでは、きっとかぜをひくであろう。寒さがあれにはなにより効くのだから」

「じゃあどんどん探してみましょうよ」

わたしたちはまたそこらを歩き回った。けれどまるでむだであった。

「夜の明けるまで待たなければならない」と親方が言った。

「どのくらいで明けるでしょう」
「二時間か三時間だろう」
親方は両手で頭をおさえてたき火の前にすわってい
た。
わたしはそれをじゃまする勇気がなかった、わたし
はかれのわきにつっ立って、ただときどき火の中にえ
だをくべるだけであった。一、二度かれは立ち上がっ
て戸口へ行って、空をながめてはじっと耳をかたむけ
たが、また帰って来てすわった。
わたしはかれがそんなふうにだまって悲しそうにし
ていられるよりも、かまわずわたしにおこりつけてく

れればいいと思った。

三時間はのろのろ過(す)ぎた。その長いといったら、とても夜がおしまいになる時がないのかと思われた。

でも星の光がいつか空からうすれかけていた。空がだんだん明るく、夜が明けかかっていた。けれども明け方に近づくに従(したが)って、寒さはいよいよひどくなった。戸口からはいって来る風が骨(ほね)までこおるようであった。

これでジョリクールを見つけたとしても、かれは生きているだろうか。

見つけ出す希望(きぼう)がほんとにあるだろうか。

きょうもまた雪が降(ふ)りださないともかぎらない。

でも雪はもう来なかった。そして空にばら色の光がさして、きょうの好天気を予告するようであった。すっかり明るくなって、樹木の形がはっきり見えるようになった。親方もわたしもがっかりして、棒をかかえて小屋を出た。

　カピはもうゆうべのようにびくついてはいないようであった。目をしっかり親方にすえたまま、いつでも合図しだいでかけ出す仕度をしていた。

　わたしたちが下を向いてジョリクールの足あとを探し回っていると、カピが首を上に上げてうれしそうにほえ始めた。かれはわたしたちに地べたではなく、上

を見ろといって合図をしたのであった。

小屋のわきの大きなかしの木のまたで、わたしたちはなにか黒い小さなもののうごめく姿(すがた)を見つけた。

これがかわいそうなジョリクールであった。夜中に犬のほえる声におびえて、かれはわたしたちが出ているまに、小屋の屋根によじ上った。そしてそこから一本のかしの木のてっぺんに登って、そこを安全な場所と思って、わたしたちの呼(よ)ぶ声にも答えず、じっとからだをかがめてすわっていたのであった。

かわいそうな弱い動物。かれはこごえてしまったにちがいない。

親方がかれを優しく呼んだ。かれは動かなかった。わたしたちはかれがもう死んでいると思った。

数分間親方はかれを続けさまに呼んだ。けれどさるはもう生きているもののようではなかった。

わたしの心臓は後悔で痛んだ。どれほどひどく罰せられたことだろう。

わたしはつぐないをしなければならない。

「登ってつかまえて来ましょう」とわたしは言った。

「危ないよ」

「いいえ、だいじょうぶです。わけなくできますよ」

それはほんとうではなかった。それは危険でむずか

しい仕事であった。大きなこの木は氷と雪をかぶっているので、それはずいぶん困難（こんなん）な仕事であった。

わたしはごく小さかったじぶんから木登りをすることを習った。それでこの術（じゅつ）には熟練（じゅくれん）していた。わたしはとび上がって、いちばん下のえだにとびついた。そして木のえだをすけて雪が落ちて日の中にはいって来たが、でもどうやら木の幹（みき）をよじて、いちばんしっかりしたえだに手がかかった。ここまで登れば、あとは足をふみはずさないように気をつければよかった。

わたしは登りながら、優（やさ）しくジョリクールに話しかけた。かれは動かないで、目だけ光らせてわたしを見

ていた。
わたしはほとんど手の届（とど）く所へ来て、手をのばしてつかまえようとした。するとひょいとかれはほかのえだにとびついてしまった。
わたしはそのえだまでかれを追っかけたけれど、人間の情（なさ）けなさ、子どもであっても、木登りはさるにはかなわなかった。
これでさるの足が雪でぬれていなかったら、とてもかれをつかまえることはできそうもなかった。かれは足のぬれることを好（この）まなかった。それでじきにわたしをからかうのがいやになって、えだからえだへととび

下りて、まっすぐに主人の肩(かた)にとび下りた。そして上着の裏(うら)にかくれた。

ジョリクールを見つけるのはたいへんなことであったがそれだけではすまなかった。今度は犬を探(さが)さなければならなかった。

もうすっかり昼になっていた。わけなくゆうべの出来事のあとをたどることができた。雪の中でわたしたちは犬の死んだことがわかった。

わたしたちは十間(けん)（約十八メートル）ばかりかれらの足あとをつけることができた。かれらは続(つづ)いて小屋からぬけ出した。ドルスが、ゼルビノのあとに続(ぞく)いた。

それからほかのけものの足あとが見えた。一方にはおおかみどもは犬にとびかかって、はげしく戦（たたか）ったしるしが残（のこ）っていた。こちらにはおおかみがえものをつかんでゆっくり食べて歩いて行った足あとが残っていた。もうそこには、そこここに赤い血が雪の上にこぼれているほかには、犬のあとはなにも残っていなかった。

　かわいそうな二ひきの犬は、わたしのねむっているあいだに死にに行ったのであった。

　でもわたしたちはできるだけ早く帰って、ジョリクールを温めてやらなければならなかった。わたした

ちは小屋へ帰った。親方がさるの足と手を持って、赤んぼうをおさえるようにして、たき火にかざすと、わたしは毛布を温めて、その中へ転がす仕度をした。けれども毛布ぐらいでは足りなかった。かれは湯たんぽと温かい飲み物を求めていた。

　親方とわたしはたき火のそばにすわって、だまってまきの燃えるのをながめた。

「かわいそうに、ゼルビノは。かわいそうに、ドルスは」

　わたしたちは代わりばんこにこんなことばをつぶやいた。初めに親方が、つぎにはわたしが。

あの犬たちは、楽しいにつけ苦しいにつけ、わたしたちの友だちであり、道連れであった。そしてわたしにとっては、わたしのさびしい身の上にとっては、このうえないなぐさめであった。

わたしがしっかり見張りをしなかったことは、どんなにくやしいことだったろう。おおかみはそうすれば小屋までせめては来なかったろうに。火の光におそれて遠方に小さくなっていたであろうに。

どうにかしていっそ親方がひどくわたしをしかってくれればよかった。かれがわたしを打ってくれればよかった。

けれどかれはなにも言わなかった。わたしの顔を見ることすらしなかった。かれは火の上に首をうなだれたまま、おそらく犬がなくなって、これからどうしようか考えているようであった。

ジョリクール氏（し）

夜明けまえの予告（よこく）はちがわなかった。

日がきらきらかがやきだした。その光線は白い雪の上に落ちて、まえの晩（ばん）あれほどさびしくどんよりして

いた森が、きょうは目がくらむほどのまばゆさをもってかがやき始めた。

たびたび親方はかけ物の下に手をやって、ジョリクールにさわっていたが、このあわれな小ざるはいっこうに温まってこなかった。わたしがのぞきこんでみると、かれのがたがた身ぶるいをする音が聞こえた。

かれの血管（けっかん）の中の血がこおっていたのである。

「とにかく村へ行かなければならない。さもないとジョリクールは死ぬだろう。すぐたつことにしよう」

毛布（もうふ）はよく温まっていた。それで小ざるはその中にくるまれて、親方のチョッキの下のすぐ胸（むね）に当たる所

へ入れられた。わたしたちの仕度ができた。

小屋を出て行こうとして、親方はそこらを見回しながら言った。

「この小屋にはずいぶん高い宿代をはらった」

こう言ったかれの声はふるえた。

かれは先に立って行った。わたしはその足あとに続いた。わたしたちが二、三間（四〜六メートル）行くと、カピを呼んでやらなければならなかった。かわいそうな犬。かれは小屋の外に立ったまま、いつまでも鼻を、仲間がおおかみにとられて行った場所に向けていた。

大通りへ出て十分間ほど行くと、とちゅうで馬車に会った。その御者（ぎょしゃ）はもう一時間ぐらいで村に出られると言った。これで元気がついたが、歩くことは困難（こんなん）でもあり苦しかった。雪がわたしのこしまでついた。たびたびわたしは親方にジョリクールのことをたずねた。そのたんびにかれは、小ざるはまだふるえていると言った。

やっとのことでわたしたちはきれいな村の白屋根を見た。わたしたちはいつも上等な宿屋（やどや）にとまったことはなかった。たいてい行っても追い出されそうもない、同勢残（どうぜいのこ）らずとめてくれそうな木賃宿（きちんやど）を選んだ。

ところが今度は親方がきれいな看板(かんばん)のかかっている宿屋へはいった。ドアが開いていたので、わたしはきらきら光る赤銅(あか)のなべがかかって、そこから湯気のうまそうに上っている大きなかまどを見ることができた。ああ、そのスープが空腹(くうふく)な旅人にどんなにうまそうににおったことであろう。

親方は例(れい)のもっとも『紳士(しんし)』らしい態度(たいど)を用いて、ぼうしを頭にのせたまま、首を後ろにあお向けて、宿屋(やどや)の亭主(ていしゅ)にいいねどこと暖(あたた)かい火を求(もと)めた。初(はじ)めは宿屋の亭主もわたしたちに目をくれようともしなかった。けれども親方のもっともらしい様子がみごと

にかれを圧迫（あっぱく）した。かれは女中に言いつけて、わたしたちを一間（ひとま）へ通すようにした。

「早くねどこにおはいり」と親方は女中が火をたいている最中（さいちゅう）わたし言った。わたしはびっくりしてかれの顔を見た。なぜねどこにはいるのだろう。わたしはねどこなんかにはいるよりも、すわってなにか食べたほうがよかった。

「さあ早く」

でも親方がくり返した。

服従（ふくじゅう）するよりほかにしかたがなかった。寝台（ねだい）の上には鳥の毛のふとんがあった。親方がそれをわたしの

あごまで深くかけた。

「少しでも温まるようにするのだ」とかれは言った。

「おまえが温まれば温まるほどいいのだ」

わたしの考えでは、ジョリクールこそわたしなんぞよりは早く温まらなければならない。わたしのほうは、いまではもうそんなに寒くはなかった。

わたしがまだ毛のふとんにくるまってあったまろうと骨(ほね)を折(お)っているとき、親方はジョリクールを丸(まる)くして、まるで蒸(む)し焼(や)きにして食べるかと思うほど火の上でくるくる回したので、女中はすっかりびっくりした。

「あったまったか」と親方はしばらくしてわたしにた

ずねた。
「むれそうです」
「それでいい」かれは急いで寝台(ねだい)のそばに来て、ジョリクールをねどこにつっこんで、わたしの胸(むね)にくっつけて、しっかりだいているようにと言った。かわいそうな小ざるは、いつもなら自分のきらいなことをされると反抗(はんこう)するくせに、もういまはなにもかもあきらめていた。かれは見向きもしないで、しっかりだかれていた。けれどもかれはもう冷(つめ)たくはなかった。かれのからだは焼(や)けるようだった。
台所へ出かけて行った親方は、まもなくあまくした

ぶどう酒を一ぱい持って帰って来た。かれはジョリクールに二さじ三さじ飲ませようと試みたけれど、小ざるは歯を食いしばっていた。かれはぴかぴかする目でわたしたちを見ながら、もうこのうえ自分を責めてくれるなとたのむような顔をしていた。それからかれはかけ物の下から片うでを出して、わたしたちのほうへさし延べた。

わたしはかれの思っていることがわからなかった。それでふしぎそうに親方の顔を見ると、こう説明してくれた。

わたしがまだ来なかったじぶん、ジョリクールは

肺炎（はいえん）にかかったことがあった。それでかれのうでに針（はり）をさして出血させなければならなかった。今度病気になったのを知ってかれはまた刺絡（しらく）（血を出すこと）してもらって、先（せん）のようによくなりたいと思うのであった。

かわいそうな小ざる。親方はこれだけの所作（しょさ）で深く感動した。そしてよけい心配になってきた。ジョリクールが病気だということはあきらかであった。しかもひじょうに悪くって、あれほど好（す）きな砂糖（さとう）入りのぶどう酒すらも受けつけようとはしないのであった。

「ルミ、ぶどう酒をお飲み。そしてとこにはいってお

いで」と親方が言った。「わたしは医者を呼んで来る」

わたしもやはり砂糖入りのぶどう酒が好きだということを白状しなければならない。それにわたしはたいへん腹が減っていた。それで二度と言いつけられるまも待たず、一息にぶどう酒を飲んでしまうと、また毛ぶとんの中にもぐりこんだ。からだの温かみに、酒まではいって、それこそほとんど息がつまりそうであった。

親方は遠くへは行かなかった。かれはまもなく帰って来た。金ぶちのめがねをかけた紳士――お医者を連れて来た。さるだと聞いては医者が来てくれないかと

思って、ヴィタリスは病人がなんだということをはっきり言わなかった。それでわたしがとこの中にはいって、トマトのような赤い顔をしていると、医者はわたしの額が手を当てて、すぐ「充血（じゅうけつ）だ」と言った。

かれはよほどむずかしい病人にでも向かったようなふうで首をふった。

うっかりしてまちがえられて、血でも取られてはたいへんだと思って、わたしはさけんだ。

「まあ、ぼくは病人ではありません」

「病人でない。どうして、この子はうわごとを言っている」

わたしは少し毛布を上げて、ジョリクールを見せた。かれはその小さな手をわたしの首に巻きつけていた。

「病人はこれです」とわたしは言った。

「さるか」とかれはさけんで、おこった顔をして親方に向かった。「きみはこんな日にさるをみせにわたしを連れ出したか」

　親方はなかなか容易なことでまごつくような、まのぬけた男ではなかった。ていねいにしかも例の大ふうな様子で、医者を引き止めた。それからかれは事情を説明して、ふぶきの中に閉じこめられたことや、おおかみにこわがってジョリクールがかしの木にとび上

がったこと、そこで死ぬほどこごえたことを話した。

「病人はたかがさるにすぎないのですが、しかしなんという天才でありますか。われわれにとってどれほどだいじな友だちであり、仲間（なかま）でありますか。どうしてこれほどのふしぎな才能（さいのう）を持った動物をただの獣医（じゅうい）やなどに任（まか）されるものではない。村の獣医というものはばかであって、その代わりどんな小さな村でも、医師といえば学者だということはだれだって知っている。医師の標札（ひょうさつ）の出ているドアの呼（よ）びりんをおせば、知識（ちしき）があり慈愛（じさい）深い人にかならず会うことができる。さるは動物ではあるが、博物学者（はくぶつがくしゃ）に従（したが）えば、かれらは

ひじょうに人類(じんるい)に近いので、病気などは人もさるも同じようにあつかわれると聞いている。のみならず学問上の立場から見ても、人とさるがどうちがうか、研究してみるのも興味(きょうみ)のあることではないでしょうか」

こういうふうに説(と)かれて、医者は行きかけていた戸口からもどって来た。

ジョリクールはたぶんこのめがねをかけた人が医者だということをさとったとみえて、またうでをつき出した。

「ほらね」と親方がさけんだ。「あのとおり刺絡(しらく)していただくつもりでいます」

これで医者の足が止まった。

「ひじょうにおもしろい。なかなかおもしろい実験だ」とかれはつぶやいた。

一とおり診察して、医者はかわいそうなジョリクールが今度もやはり肺炎にかかっていることを告げた。医者はさるの手を取って、その血管に少しも苦しませずにランセット（針）をさしこんだ。ジョリクールはこれできっと治ると思った。刺絡をすませて、医者はいろいろと薬剤にそえて注意をあたえた。わたしはもちろんとこの中にはいってはいなかった。親方の言いつけに従って、看護婦を務めていた。

かわいそうなジョリクール。かれは自分を看護してくれるのでわたしを好(す)いていた。かれはわたしの顔を見てさびしく笑(わら)った。かれの顔つきはひじょうに優(やさ)しかった。

いつもあれほど、せっかちで、かんしゃく持ちで、だれにもいたずらばかりしていたかれが、それはもうおとなしく従順(じゅうじゅん)であった。

その後毎日、かれはいかにわたしたちをなつかしがっているかを示(しめ)そうと努(つと)めた。それはこれまでたびたびかれのいたずらの犠牲(ぎせい)であったカピに対してすらそうであった。

肺炎（はいえん）のふつうの経過（けいか）として、かれはまもなくせきをし始めた、この発作（ほっさ）のたびごとに小さなからだがはげしくふるえるので、かれはひどくこれを苦しがった。

わたしの持っていたありったけの五スーで、わたしはかれに麦菓子（むぎがし）を買ってやった。けれどこれはよけいかれを悪くした。

かれのするどい本能（ほんのう）で、かれはまもなくせきをするたんびにわたしが麦菓子をくれることに気がついた。かれはそれをいいことにして、自分のたいへん好（す）きな薬をもらうために、しじゅうせきをした。それでこの薬はかれをよけい悪くした。

かれのこのくわだてをわたしが見破(みやぶ)ると、もちろん麦菓子(むぎがし)をやることをやめたが、かれは弱らなかった。まずかれは哀願(あいがん)するような目つきでそれを求(もと)めた。それでくれないと見ると、かれはとこの上にすわって両手を胸(むね)の上に当てたまま、からだをゆがめて、ありったけの力でせきをした。かれの額(ひたい)の青筋(あおすじ)がにょきんととび出して、なみだが目から流れた。そしてのどのつまるまねをするのが、しまいには本物になって、もう自分でおさえることができないほどはげしくせきこんだ。

わたしはいつも親方が一人で出て行ったあと、ジョ

リクールといっしょに宿屋に残っていた。ある朝かれが帰って来ると、宿の亭主がとどこおっている宿料を要求したことを話した。かれがわたしに金の話をしたのはこれが初めてであった。かれがわたしの毛皮服を買うために時計を売ったということはほんのぐうぜんにわたしの聞き出したことであって、そのほかにはかれのふところ具合がどんなに苦しいか、ついぞ打ち明けてもらったことはなかったが、今度こそかれはもうわずか五十スーしかふところに残っていないことを話した。

こうなってただ一つ残った手だてとしては、今夜

さっそく一興行やるほかにないとかれは考えていた。ゼルビノもドルスもジョリクールもいない興行。まあ、そんなことができることだろうか、とわたしは思った。

それができてもできなくても、どう少なく見積もってもすぐ四十フランという金をこしらえなければならないとかれは言った。ジョリクールの病気は治してやらなければならないし、部屋には火がなければならないし、薬も買わなければならないし、宿にもはらわなければならない。いったん借りている物を返せば、あとはまた貸してもくれるだろう。

この村で四十フラン。この寒空といい、こんなあわれない一座でなにができよう。

わたしが、ジョリクールといっしょに宿に待っているあいだに親方がさかり場で一けん見世物小屋を見つけた。なにしろ野天で興行するなんということはこの寒さにできない相談であった。かれは広告のびらを書いて、ほうぼうにはり出したり、二、三枚の板でかれは舞台をこしらえたりした。そして思い切って残りの五十スーでろうそくを買うと、それを半分に切って、明かりを二倍に使うくふうをした。

わたしたちの部屋の窓から見ていると、かれは雪の

中を行ったり来たりしていた。わたしはどんな番組をかれが作るか、心配であった。

わたしはすぐにこの問題を解(と)くことができた。というのは、そのとき村の広告屋(こうこくや)が赤いぼうしをかぶってやって来て、宿屋(やどや)の前に止まった。たいこをそうぞうしくたたいたあとで、かれはわれわれの番組を読み上げた。

その口上(こうじょう)を聞いていると、よくもきまりが悪くないと思われるほど親方は思い切って大げさなふいちょうをした。なんでも世界でもっとも高名な芸人(げいにん)が出る――それはカピのことであった――それから『希世(きせい)の

天才なる少年歌うたい』が出る。その天才はわたしであった。

それはいいとして、この山勘口上で第一におもしろいことは、この興行に決まった入場料のなかったことであった。われわれは見物の義侠心に信頼する。見物は残らず見て聞いてかっさいをしたあとで、いくらでもお志しだいにはらえばいいというのである。

これがわたしにはとっぴょうしもなくだいたんなやり方に思われた。だれがわたしたちをかっさいする者があろう。カピはたしかに高名になってもいいだけのことはあったけれど、わたしが……わたしが天才だな

どとは、どこをおせばそんな音（ね）が出るのだ。

たいこの音を聞くと、カピはほえた。ジョリクールはちょうどひじょうに悪かった最中（さいちゅう）であったが、やはり起き上がろうとした。たいこの音とカピのほえ声を聞くと、芝居（しばい）の始まる知らせであるということをさとったようであった。

わたしは無理（むり）にかれをねどこにおしもどさなければならなかった。するとかれは例（れい）のイギリスの大将（たいしょう）の軍服（ぐんぷく）――金筋（きんすじ）のはいった赤い上着とズボン、それから羽根（はね）のついたぼうしをくれという合図をした。かれは両手を合わせてひざをついて、わたしにたのみ始めた。

いくらたのんでも、なにもしてもらえないとみると、かれはおこって見せた。それからとうとうしまいにはなみだをこぼしていた。かれに向かって、今夜芝居(しばい)するなんという考えを捨(す)てなければならないことを納得(なっとく)させるには、たいへんな手数のかかることがわかっていた。それよりもかくれて出て行くほうがいいとわたしは思った。

　親方が帰って来ると、かれはわたしにハープをしょったり、いろいろ興行(こうぎょう)に入りようなものを用意するように言いつけた。それがなんの意味だということを知っているジョリクールは、今度は親方に向かっ

て請求を始めた。かれは自分の希望を表すために苦しい声をしばり出したり、顔をしかめたり、からだを曲げたりするよりいいことはなかった。かれのほおにはほんとうになみだが流れていたし、親方の手におしつけたのは心からのキッスであった。

「おまえも芝居がしたいのか」と親方はたずねた。

「そうですとも」とジョリクールのからだ全体がさけんでいるように思われた。かれは自分がもう病人でないことを示すために、とび上がろうとした。でもわたしたちは外へかれを連れ出せば、いよいよかれを殺すほかはないことをよく知っていた。

わたしたちはもう出て行く時刻になった。出かけるまえにわたしは長く持つようにいい火をこしらえて、ジョリクールを毛布の中にすっかりくるんだ。かれはまたさけんで、できるだけの力でわたしをだきしめた。やっとわたしたちは出発した。

　雪の中を歩いて行くと、親方はわたしに今夜はしっかりやってもらいたいということを話した。もちろん一座の主な役者たちがいなくなっていては、いつものようにうまくいくはずはなかったが、カピとわたしとでおたがいにいっしょうけんめいにやれるだけはやらなければならなかった。なにしろ四十フラン集めなけ

ればならなかった。四十フラン。おそろしいことであった。できない相談（そうだん）であった。

親方はいろいろなことを用意しておいたので、わたしたちがすべきいっさいのことはろうそくの火をつけることであった。けれどこれはむやみにつけてしまうこともできない。見物がいっぱいになるまではひかえなければならない。なにしろ芝居（しばい）のすむまでに明かりがおしまいになるかもしれないのであった。

わたしたちがいよいよ芝居小屋にはいったとき、広告屋（こうこくや）はたいこをたたいて、最後（さいご）にもう一度村の往来（おうらい）

を一めぐりめぐり歩いていた。

カピとわたしの仕度ができてから、わたしは外へ出て、柱の後ろに立って見物の来るのを待っていた。

たいこの音はだんだん高くなった。もうそれはさかり場に近くなって、ぶつぶつ言う人の声も聞こえた。たいこのあとからは子どもがおおぜい調子を合わせてついて来た。たいこを打ちやめることなしに、広告屋(こうこくや)は芝居小屋(しばいごや)の入口にともっている二つの大きなかがり火のまん中に位置(いち)をしめた。こうなると見物はただ、中にはいって場席(ばせき)を取れば、芝居(しばい)は始められるのであった。

おやおや、いつまで見物の行列は手間を取ることであろう。それでも戸口のたいこはゆかいそうにどんどん鳴り続けていた。村じゅうの子どもは残らず集まっているにちがいなかった。けれど四十フランの金をくれるものは子どもではなかった、ふところの大きい、物おしみをしない紳士が来てくれなければならなかった。

　とうとう親方は始めることに決心した。でも小屋はとてもいっぱいになるどころではなかった。それでもわたしたちはろうそくというやっかいな問題があるので、このうえ長くは待てなかった。

わたしはまずまっ先に現(あらわ)れて、ハープにつれて二つ三つ歌を歌わなければならなかった。正直に言えばわたしが受けたかっさいはごく貧弱(ひんじゃく)だった。わたしは自分を芸人(げいにん)だとはちっとも思ってはいなかったけれど、見物のひどい冷淡(れいたん)さがわたしをがっかりさせた。わたしがかれらをゆかいにしえなかったとすると、かれらはきっとふところを開けてはくれないであろう。わたしはわたしが歌った名誉(めいよ)のためではなかった。それはあわれなジョリクールのためであった。ああ、わたしはどんなにこの見物を興奮(こうふん)させ、かれらを有頂天(うちょうてん)にさせようと願(ねが)っていたことだろう……けれども

見物席はがらがらだったし、その少ない見物すら、わたしを『希世の天才』だと思っていないことは、わかりすぎるほどわかっていた。

でもカピは評判がよかった。かれはいく度もアンコールを受けた。カピのおかげで興行が割れるようなかっさいで終わった。かれらは両手をたたいたばかりでなく、足拍子をふみ鳴らした。

いよいよ勝負の決まるときが来た。カピはぼうしを口にくわえて、見物の中をどうどうめぐりし始めた。そのあいだわたしは親方の伴奏でイスパニア舞踏をおどった。カピは四十フラン集めるであろうか。見物に

向かってはありったけのにこやかな態度(たいど)を示しながら、この問題がしじゅうわたしの胸(むね)を打った。

わたしは息が切れていた。けれどカピが帰って来るまではやめないはずであったから、やはりおどり続(つづ)けた。かれはあわてなかった。一枚(まい)の銀貨(ぎんか)ももらえないとみると、前足を上げてその人のかくしをたたいた。いよいよかれが帰って来そうにするのを見て、もうやめてもいいかと思ったけれど、親方はやはりもっとやれという目くばせをした。

わたしはおどり続(つづ)けた。そして二足三足カピのそばへ行きかけて、ぼうしがいっぱいになっていないこと

を見た。どうしていっぱいになるどころではなかった。
親方はやはりみいりの少ないのを見ると、立ち上がって、見物に向かって頭を下げた。
「紳士ならびに貴女がた。じまんではございませんが、本夕はおかげさまをもちまして、番組どおりとどこおりなく演じ終わりましたとぞんじます。しかしまだろうそくの火も燃えつきませんことゆえ、みなさまのお好みに任せ、今度は一番てまえが歌を歌ってお聞きに入れようと思います。いずれ一座のカピ丈はもう一度おうかがいにつかわしますから、まだご祝儀をいただきませんかたからも、今度はたっぷりいただけます

よう、まえもってご用意を願(ねが)いたてまつります」

親方はわたしの先生ではあったが、わたしはまだほんとうにかれの歌うのを開いたことはなかった。いや、少なくともその晩(ばん)歌ったように歌うのを開いたことがなかった。かれは二つの歌を選(えら)んだ。一つはジョセフの物語で、一つはリシャール獅子王(ししおう)の歌であった。

わたしはほんの子どもであったし、歌のじょうずへたを聞き分ける力がなかったが、親方の歌はみょうにわたしを動かした。かれの歌を聞いているうちに、目にはなみだがいっぱいあふれたので、舞台(ぶたい)のすみに引っこんでいた。

そのなみだの霧(きり)の中から、わたしは、前列のこしかけにすわっていた若(わか)いおくさんがいっしょうけんめい手をたたいているのを見た。わたしはまえから、この人が一人、今夜小屋に集まった百姓(ひゃくしょう)たちとちがっていることを見つけた。かの女は若(わか)い美しい貴婦人(きふじん)で、そのりっぱな毛皮の上着だけでもこの村一番の金持ちにちがいないとわたしは思った。かの女はいっしょに子どもを連(つ)れていた。その子もむちゅうでカピにかっさいしていた。ひじょうによく似(に)ているところを見れば、それはかの女のむすこであった。

初(はじ)めの歌がすむと、カピはまたどうどうめぐりをし

た。ところがそのおくさんはぼうしの中になにも入れなかったのを見て、わたしはびっくりした。

親方が第二の曲をすませたとき、かの女は手招(てまね)きをしてわたしを呼(よ)んだ。

「わたし、あなたの親方さんとお話ししたいんですがね」とかの女は言った。

わたしはびっくりした。（そんなことよりもなにかぼうしの中へ入れてくれればいい）とわたしは思った。

カピはもどって来た。かれは二度目のどうどうめぐりでまえよりももっとわずか集めて来た。

「あの婦人(ふじん)がなにか用があると言うのか」と親方がた

ずねた。

「あなたにお話がしたいそうです」

「わたしはなにも話すことなんかない」

「あの人はなにもカピにくれませんでした。きっといまそれをくれようというんでしょう」

「じゃあ、カピをやってもらわせればいい。わたしのすることではない」

そうは言いながら、かれは行くことにして、犬を連れて行った。わたしもかれらのあとに続いた。そのとき一人の僕（下男）が出て来て、ちょうちんと毛布を持って来た。かれは婦人と子どものわきに立っていた。

親方は冷淡に婦人にあいさつをした。

「おじゃまをしてすみませんでした。けれどわたくし、お祝いを申し上げたいと思いました」

でも親方は一言も言わずに、ただ頭を下げた。

「わたくしも音楽の道の者でございますので、あなたの技術の天才にはまったく感動いたしました」

技術の天才。うちの親方が。大道の歌うたい、犬使いの見世物師が。わたしはあっけにとられた。

「わたしのような老いぼれになんの技術がありますものか」とかれは冷淡に答えた。

「うるさいやつとおぼしめすでしょうが」と婦人はま

た始めた。

「なるほどあなたのようなまじめなかたの好奇心を満足させてあげましたことはなによりです」とかれは言った。「犬使いにしては少し歌が歌えるというので、あなたはびっくりしておいでだけれど、わたしはむかしからこのとおりの人間ではありませんでした。これでも若いじぶんにはわたしは……いや、ある大音楽家の下男でした。まあおうむのように、わたしは主人の口まねをして覚えたのですね。それだけのことです」

婦人は答えなかった。かの女は親方の顔をまじまじと見た。かれもつぎほののないような顔をしていた。

「さようなら、あなた」とかの女は外国なまりで言って、「あなた」ということばに力を入れた。「さようなら。それからもう一度今夜味わわせていただいた、このうえないゆかいに対してお礼を申し上げます」こう言ってカピのほうをのぞいて、ぼうしに金貨（きんか）を一枚（まい）落とした。

わたしは親方がかの女を戸口まで送って行くだろうと思ったけれど、かれはまるでそんなことはしなかった。そしてかの女がもう答えない所まで遠ざかると、わたしはかれがそっとイタリア語で、ぶつぶつごとを言っているのを聞いた。

「あの人はカピに一ルイくれましたよ」とわたしは言った。そのときかれは危(あぶ)なくわたしにげんこを一つくれそうにしたけれど、上げた手をわきへ垂(た)らした。

「一ルイ」とかれはゆめからさめたように言った。「ああ、そうだ、かわいそうに、ジョリクールはどうしたろう。わたしは忘(わす)れていた。すぐ行ってやろう」

わたしはそうそうに切り上げて、宿(やど)へ帰った。

わたしはまっ先に宿屋(やどや)のはしごを上がって部屋(へや)へはいった。火は消えてはいなかったが、もうほのおは立たなかった。

わたしは手早くろうそくをつけた。ジョリクールの

声がちっともしないので、わたしはびっくりした。

やがてかれが陸軍大将の軍服を着て、手足をいっぱいにつっぱったまま、毛布の上に横になっているのを見た。かれはねむっているように見えた。

わたしはからだをかがめて、優しくかれの手を取って引き起こそうとした。

その手はもう冷たかった。

親方がそのとき部屋にはいって来た。

わたしはかれのほうを見た。

「ジョリクールが冷たいんですよ」とわたしは言った。

親方はそばへ来て、やはりとこの上にのぞきこんだ。

「死んだのだ」とかれは言った。「こうなるはずであった。ルミや、おまえをミリガン夫人(ふじん)の所から無理(むり)に連れて来たのは悪かった。わたしは罰(ばっ)せられたのだ。ゼルビノ、ドルス、それから今度はジョリクール……だがこれだけではすむまいよ」

パリ入り

まだパリからはよほどはなれていた。

わたしたちは雪でうずまった道をどこまでも歩いて

行かなければならなかった。朝から晩（ばん）まで北風に顔を打たれながら、とぼとぼ歩いて行かなければならなかった。

この長いさすらいの旅はどんなにつらかったろう。親方が先に立って歩く。続（つづ）いてわたし、その後からカピがついて来た。こうして一列になって、わたしたちは何時間も、何時間も、ひと言も口をきかずに、寒さで血の気（け）のなくなった顔をして、ぬれた足と空っぽな胃（い）ぶくろをかかえて歩き続（つづ）けた。とちゅうで行き会う人はふり返って、わたしたちの姿（すがた）が見た。まさしくかれらはきみょうに思ったらしかった。このじいさん

は、子どもと犬をどこへ連れて行くのであろう。

沈黙はわたしにとって、つらくもあり悲しくも思われた。わたしはしきりと話をしたかったけれど、やっと口を切ると、親方はぷっつり手短に答えて、顔をふり向けもしなかった。うれしいことにカピはもっと人づき（人づき合い）がよかった。それでわたしが足を引きずり引きずり歩いて行くと、ときどきかれのぬくい舌が手にさわった。かれはあたかもお友だちのカピがここについていますよというように、優しくなめてくれた。そこでわたしもさすり返してやった。わたしたちはおたがいに心持ちをさとり合った。おたがいに

愛し合っていた。
わたしにとっては、これがなによりのたよりであったし、カピもそれをせめてものなぐさめとしているらしかった。物に感ずる心は犬の心も子どもの心もさしてちがいがなかった。
こうしてわたしがカピをかわいがってやると、カピもそれになぐさめられて、いくらかずつ仲間をなくした悲しみをまぎらしてゆくようであった。でも習慣の力はえらいもので、ときどき立ち止まっては、一座の仲間が後から来るのを待ちうけるふうであった。それはかれが以前一座の部長であったとき、座員を前に

やり過ごして、いちいち点呼する習慣があったからである。けれどそれもほんの数秒時間のことで、すぐ思い出すと、もうだれも後から来るはずがないと思ったらしく、すごすご後から追い着いて来て、ドルスもゼルビノも来ませんが、それでやはりちがってはいないのですというように親方をながめるのであった。その目つきには感情とちえがあふれていて、見ていると、こちらも引き入れられるように思うのであった。

　こんなことは、ちっとも旅行をゆかいにするものではなかったが、わたしたちの気をまぎらす種にはなった。

行く先ざきの野面（のづら）はまっ白な雪でおおわれて、 空には日の光も見えなかった。 いつも青白い灰（はい）色の空であった。 畑（はた）をうつ百姓（ひゃくしょう）のかげも見えなかった。 馬のいななきも聞こえなければ、 牛のうなりも聞こえなかった。 ただ食に飢（う）えたからすが、 こずえの上で虫を探（さが）しあぐねて悲しそうに鳴いていた。 村で戸を開けているうちはなくって、 どこもしんと静（しず）まり返っていた。なにしろ寒気がひどいので、 人間は炉（ろ）のすみにちぢかまっているか、 牛小屋や物置（ものお）き小屋（ごや）でこそこそ仕事をしていた。

でこぼこな、 やたらにすべる道をまっしぐらにわた

したちは進んで行った。
夜はうまややひつじ小屋で一きれのパン、晩飯(ばんめし)にはじつに少ない一きれのパンを食べてねむった。その一きれが昼飯と晩飯をかねていた。
ひつじ小屋に明かすことのできるのは、中での楽しい晩(ばん)であった。ちょうど雌(め)ひつじが子どもに乳(ちち)を飲ませる時節(じせつ)で、ひつじ飼(か)いのうちには、ひつじの乳をかってにしぼって飲むことを許(ゆる)してくれる者もあった。でもわたしたちはひつじ飼いに向かっていきなり、腹(はら)が減(へ)って死にそうだとも話しえなかったけれど、親方は例(れい)のうまい口調でそれとなしに、「この子どもはたい

へんひつじの乳が好きなのですよ。それというのが赤子のじぶん飲みつけていたものですから、それでよけい子どものじぶんが思い出されるとみえます」というように言うのであった。この作り話の効き目がいつもあるわけではなかったが、たまにそれが当たるといい一晩が過ごされた。そうだ、わたしはほんとにひつじの乳を好いていた。だからこれがもらえると、そのあくる日はずっと、元気になったように感じた。

パリに近づくにしたがって、いなか道がだんだん美しくなくなるのが、きみょうに思われた。もう雪も白くはないし、かがやいてもいなかった。わたしはどん

なにかパリをふしぎな国のように言い聞かされていたことであろう。そしてなにかとっぴょうしもないことが始まると思っていた。それがなんであるか、はっきりとは知らなかった。わたしは黄金の木や、大理石の町や玉でかざったご殿がそこにもここにも建っていても、ちっともおどろきはしなかったであろう。

われわれのようなびんぼう人がパリへ行って、いったいなにができるのであろう。わたしはしじゅうそれが気になりながら、それを親方に聞く勇気がなかった。かれはずいぶんしずみきってふきげんらしかった。

けれどある日とうとうかれのほうからわたしのほう

へ近づいて来た。そしてかれのわたしを見る目つきで、このごろしじゅう知りたいと思っていたことを知ることができそうだと感じた。

それはある大きな村から遠くない百姓家（ひゃくしょうや）にとまった朝のことであった。その村はブアシー・セン・レージェという名であることは、往来（おうらい）の標柱（ひょうちゅう）でわかった。

さてわたしたちは日の出ごろ宿（やど）をたって、別荘（べっそう）のへいに沿（そ）って、そのブアシー・セン・レージェの村を通りぬけて、とある坂の上にさしかかった。その坂のてっぺんから見下ろすと、目の前には果（は）てしもなく大きな町が開けて、いちめんもうもうと立ち上がった黒

けむりの中に、所どころ建物のかげが見えた。
わたしはいっしょうけんめい目を見張って、けむりやかすみの中にぼやけている屋根や鐘楼や塔などのごたごたした正体を見きわめようと努めていたとき、ちょうど親方がやって来た。ゆるゆると歩いて来ながら、いままでの話のあとを続けるというふうで、
「これからわたしたちの身の上も変わってくるよ。もう四時間もすればパリだから」と言った。
「へえ、ではあすこに遠く見えるのが、パリなんですか」とわたしは問うた。
「うん」

親方がそう言って指さしをしたとき、ちょうど日がかっとさして、ちらりと金色（こんじき）にかがやく光が目にはいったように思った。

まったくそのとおりであった。やがて黄金の木を見つけるであろう。

「わたしたちはパリへ行ったら別（わか）れようと思う」とかれはとつぜん言った。

すぐに空はまた暗（くら）くなった。黄金の木は見えなくなった。わたしは親方に目を向けた。かれもまたわたしを見た。わたしの青ざめた顔色とふるえるくちびるとは、わたしの心の中のあらしをはっきりと現（あらわ）して

いた。

「おまえ、心配しているとみえるね。悲しいか。わたしにはわかっているよ」

「別(わか)れるんですって」わたしはやっとつぶやいた。

「ああそうだよ。別れなければね」

こう言ったかれの調子がわたしの目になみだをさそった。もう久(ひさ)しくわたしはこんな優(やさ)しいことばを聞かなかった。

「ああ、あなたはじつにいい人です」とわたしはさけんだ。

「いや、いい子はおまえだよ。じつに親切ないい子だ。

人間は一生にしみじみ人の親切を感ずるときがあるものだ。何事もよくいっているときには、だれが自分といっしょにいるか、ろくろく考えることなしに世の中を通って行く。けれど物事がちょいちょいうまくいかなくなり、悪いはめには落ちてくるし、とりわけ人間が年を取ってくると、だれかにたよりたくなるものだ。わたしがおまえにたよると聞いたら、びっくりするかもしれないが、でもそれはまったくだよ。ただおまえがわたしのことばを聞き、わたしをなぐさめてくれて、なみだを流してくれると、わたしはたまらないほどうれしい。わたしも不幸せ（ふしあわ）な人間であったよ」

わたしはなんと言っていいかわからなかった。わたしはただかれの手をさすった。

「しかも不幸なことには、わたしたちはおたがいのあいだがだんだん近づいてこようというじぶんになって、別れなければならないのだ」

「でもあなたはわたしをたった一人パリへ捨てて行くのではないでしょう」とわたしはこわごわたずねた。

「いいや、けっしてそんなことはない。おまえはこの大きな町で自分一人なにができよう。わたしはおまえを捨てる権利がないのだ。それは覚えておいで。わたしはあの優しいおくさんが、おまえを引き取って自分

の子にして育てようというのを、聞かなかった。あの日からわたしはおまえのためにできるだけつくしてやる義務ができたのだ。だがわたしはいまの場合、なにもしてやることができない。それでわたしは別れるのがいちばんいいと考えたわけだ。それもほんのしばらくのあいだだ。わたしたちはこの時候の悪い二、三か月だけも別れているほうがいいのだ。カピのほかみんないなくなってしまった一座では、パリにいてもなにができよう」

かれの名が出ると、かわいいカピはわたしたちのそばへやって来た。かれは前足を右の耳の所へ上げて、

軍隊風の敬礼をして、それを胸に置いて、あたかもわたしたちはかれの誠実に信頼することができるというようであった。親方は犬の頭に優しく手を当ててそれをおさえた。

「そうだよ。おまえは善良な忠実な友だちだ。けれど情けないことにはほかのものがいないでは、もうたいしたことはできないのだ」

「でもわたしのハープは……」

「わたしもおまえのような子どもが二人あれば、うまくゆくのだ。けれど老人がたった一人、男の子を連れたのでは、ろくなことはない。わたしはまだ老いくち

たというのでもない。まあいっそめくらになるか、足の骨(ほね)でも折(お)れてくれればいいのだ。だがまだわたしは人びとの足を止めさせ、目をつけさせるほど情(なさ)けないありさまにもなってはいない。それにお上(かみ)の救助(きゅうじょ)を受けるようなはずかしいことはできない。そこでわたしはおまえを冬の終わりまで、ある親方の所へやろうと心を決めた。親方はおまえをほかの子どもたちの仲間(なかま)に入れてくれるだろう。そこでおまえはハープをひけばいいのだ」

「そうしてあなたは」とわたしはたずねた。

「わたしはパリでは顔を知られている。たびたびこち

らへは来ていたことがある。このまえおまえの村へ行ったときも、パリから行ったのだ。大道でハープやヴァイオリンをひくイタリアの子どもらにけいこをしてやる。わたしはただ広告(こうこく)をさえすれば欲(ほ)しいだけの弟子(でし)は集まるのだ。そこでそのあいだにゼルビノとドルスの代わりになる犬を二ひきしこもうと思う。それから春になってルミ、またいっしょに出かけようよ。まあ当分は勇気(ゆうき)と忍耐(にんたい)が必要(ひつよう)だ。わたしたちはこれまでちょうどつごうの悪い、間(あい)の時節(じせつ)ばかり通って来た。春になればだんだん境遇(きょうぐう)も楽になる。そこでわたしはおまえを連(つ)れて、ドイツとイギリスを回るつもりだ。

そのうちおまえも大きくなるし、考えも進んでくる。わたしはおまえにたくさんのことを教えて、りっぱな人間にしてやる。わたしはそれをミリガン夫人（ふじん）とやくそくした。おまえにイギリス語を教えだしたのもそのわけだ。おまえはフランス語とイタリア語を話すことができる。これはおまえの年ごろの子どもとしてはえらいことだ。おまえはからだもじょうぶだし、どうしてこの先、運の開ける望（のぞ）みはじゅうぶんある」

たぶん親方がこう言ってわたしのために計画してくれたことは、みんないちばんいいことにちがいなかった。けれどそのときにはわたしはただ二つのことだけ

しか考えられなかった。
わたしたちは別(わか)れなければならない。そしてわたしはよその親方の所へ行かなければならない。流浪(るろう)のあいだにわたしはいくたりかの親方に会ったが、いつもほうぼうからやとい入れて使っている子どもたちをひどく打ったりたたいたりする者が多かった。かれらはひじょうに残酷(ざんこく)であった。ひどく口ぎたなかったり、いつも酔(よ)っぱらっていた。わたしはそういうおそろしい人間の一人に使われなければならないのであろうか。

それでもし運よく親切な親方に当たるとしても、こ

れはまた一つの変化（へんか）であった。初（はじ）めが養母（ようぼ）、それから親方、それからまた一人――それはいつでもこうなのであろうか。わたしはいつまでもその人を愛（あい）して、その人といっしょにいることのできる相手（あいて）を見つけることができないのであろうか。

　だんだんわたしは親方に引きつけられるようになっていた。かれはほとんど父親というものはこんなものかとわたしに思わせた。

　でもわたしはほんとうの父親を持つことがないのだ。うちを持つことがないのだ。この広い世界に、いつも独（ひと）りぼっちなのだ。だれの子でもないのだ。

わたしにも言うことはあった。だが親方は「勇気を持て」とわたしに求めた。わたしはこのうえかれに苦労を加えることを望まなかった。けれどつらいことであった。かれと別れるのはまったくつらいことであった。

かれも重ねてわたしに泣きつかれるのがうるさいと思ったように、かまわずどんどん歩きだした。わたしは引きずられるようにして後に続いた。

わたしはその後について行くと、まもなく橋をわたって川をこした。その橋はこのうえなくきたなくって、どろが深く積もっていた。その上を黒い石炭くず

のような雪がかぶさって、そこにふみこむとくるぶしまでずぶりとはいった。

橋のたもとからは、村続(つづ)きでせまい宿場(しゅくば)があった。村がつきると、また野原になって、野原にはこぎたない家が散(ち)らばっていた。往来(おうらい)には荷車がしじゅう行ったり来たりしていた。わたしは、親方の右手に寄(よ)りそって歩いた。カピは後からついて来た。

いよいよ野原がおしまいになって、わたしたちは果(は)てしのない長い町の中にはいった。両側(りょうがわ)には見わたすかぎり家が建(た)てこんでいた。それもボルドーや、ツールーズや、リヨンなどに比(くら)べては、ずっとびんぼ

うらしいあわれな小家（こいえ）ばかりであった。
　雪がほうぼうにうず高く積（つ）み上げられていて、黒く固（かた）まったかたまりの上に、灰（はい）やくさった野菜（やさい）や、いろいろのきたない廃物（はいぶつ）が投げ捨（す）てられてあった。空気はいやなにおいにむせるようであった。その中を荷車がごろごろ通って行くが、人びとはそれをうまくかわしかわし歩いていた。
「ここはどこです」とわたしは言った。
「パリだよ」
　どこに大理石のうちがあるか。それから黄金の木が。そしてりっぱに着かざった人たちが。これが見たい見

たいとあこがれていたパリであったか。わたしはこんな場所で、親方に別(わか)れて……カピに別れて、この冬じゅうくらさなければならなかったのか。

ルールシーヌ街(まち)の親方

いま、わたしのぐるりを取(と)り巻(ま)いているものは、気味の悪いものばかりであったが、わたしはいっしょうけんめい好奇(こうき)のの目を見張(みは)って新しい周囲(しゅうい)を見回した。そのためにいまの身の上にさしせまっただいじのこと

は忘(わす)れるくらいであった。

パリの町の中に深くはいればはいるほど、見るものごとにわたしの幼(おさな)い夢想(むそう)とだんだんへだたるようになった。こおりついたみぞからは、なんともいえないくさいいきれが立っていた。雪と氷がいっしょにとけて固(かた)まったいうす黒いどろが、荷車の輪(わ)にはねとばされて、そこらの小店のガラス戸に厚板(あついた)のようにへばりついていた。確(たし)かにパリはボルドーにもおよばなかった。

これまで通って来た町に比(くら)べては、だいぶんりっぱな広い町で、いくらかきれいな店もならんだ通りを長

いこと歩いて、親方はついと右へ曲がると、急にみすぼらしい町に出た。高い黒い家のならんだまん中に、例のいやなにおいのするどぶがあった。たくさんある居酒屋の店先で、おおぜいの男女ががやがや言いながら、お酒を飲んでいた。

町の角には、ルールシーヌ街と書いた札が打ってあった。

親方は案内を知っているらしくせまい通りにこみ合う往来の人の群れを分けて進んだ。わたしはそのそばに寄りそって歩いた。

「おい、気をつけて、わたしの姿を見失わないように」

と親方が注意した。けれどかれの注意は必要がなかった。なぜといって、わたしはかれの後にくっついて歩いたうえ、おまけにかれの上着のすそをしっかりとおさえていたのであった。

　わたしたちは大きな路地をつっ切って、もう一日じゅう日の光がけっしてもれたことのないような、きたならしい、じめじめした一けんの家にはいった。それはこれまでわたしの見たかぎりのいちばんひどい家であった。

「ガロフォリさんはいるかね」と親方が、ランプの光で、ぼろをドアにぶら下げていた男にたずねた。

「知らねえや。上がって見て来い」とその男はうなった。「はしごだんのいちはんてっぺんだ。それおまえの鼻っ先に見えてるじゃないか」

「ガロフォリというのは、ルミ、おまえに話した親方だよ。ここが住まいだ」階段を上がりながら親方はこう言った。その階段は厚いどろがこちこちに積もって、ややもするとすべって足を取られそうになった。街といい、家といい、はしご段といい、いよいよわたしを安心させる性質のものではなかった。いったい今度の親方というのはどんな男であろう。

四階のてっぺんに上がって、ドアをたたくことなし

に親方はすぐ前のドアをおし開けて、穀物倉(こくもつぐら)のような大きな屋根裏(やねうら)の部屋(へや)にはいった。部屋のまん中はがらんとしていて、四方のかべにぐるりと寝台(ねだい)みんなで十二ならべてあった。一度は白かったことのあるかべと天井が、いまではけむりとすすとちりでよごれきって、なんとも知れない色をしていた。かべの上にはすみで人間の首だの、花や鳥だのが落書きしてあった。

「ガロフォリさん、いるのかい」と親方がたずねた。

「あんまり暗くってだれも見えない。ヴィタリスだよ」

かべにかけたうす暗いランプの明かりですかすと、部屋(へや)にはだれもいないらしかった。すると弱いのろの

ろした声が、親方のことばに答えた。

「ガロフォリさんは出かけましたよ。二時間ほどしなければ帰りませんよ」

こう言いながら十三ばかりの子どもが出て来た。わたしはその子のきみょうな様子におどろいた。いまでもそのとき見たとおりを目にうかべることができる。いわば胴体(どうたい)がなくって、足からすぐ首が生えているように見えた。その大きな頭は、まるでつり合いもなにもとれていなかった。そんなふうなからだつきでけっしてりっぱとは言えなかったが、その顔にはしかしきみょうに人をひきつけるものがあった。悲しみと優(やさ)し

みの表情（ひょうじょう）、そしてそれから……たよりなげな表情で
あった。かれの大きな目は同情（どうじょう）をふくんで、相手（あいて）の
目をひきつけずにはおかないのであった。
「確（たし）かに二時間すれば帰って来るのかね」と親方がた
ずねた。
「確かですよ。もう昼飯（ひるめし）の時間ですからね。ここで食
べるのはガロフォリさんばかりですから」
「そうかい。もしそのまえに帰って来たら、ヴィタリ
スという人が来て、二時間たつとまた来ると言って
帰ったと言ってください」
「かしこまりました」

わたしも親方について行こうとすると、かれはわたしを止めた。

「おまえはここにおいで」とかれは言った。「少し休んでいるがいい」

「……」

「おお、わたしは帰って来るよ」とかれはわたしの心配そうな顔つきを見て安心させるようにまた言った。わたしは例の服従の習慣から、それをいやとは言えなかった。

「きみはイタリア人かい」

親方の重い足音がもうはしご段の上に聞こえなく

なったときに、イタリア語で子どもがたずねた。親方といっしょにいるあいだにわたしはイタリア語がぽつぽつわかっていたが、まだ自由には使えなかった。

「いいえ」と、わたしはフランス語で答えた。

「おやおや、つまらないなぁ。きみがイタリアだといいんだがなぁ」とかれは大きな目で見ながら、ほんとにつまらなそうに言った。

「きみはどこ」

「リユッカだよ。きみもそうだと、いろいろ聞きたいと思ったのだ」

「ぼくはフランス人です」

「そう、それはいいね」

「おや、きみはイタリア人よりも、フランス人のほうが好きなの」

「おお、そうじゃない。ぼくがそれはいいねと言ったのは、きみのことを考えて言ったのだ。だってきみがイタリア人だったら、きっとガロフォリ親方に使われにここへやって来たのだろうから、そうすると気のどくだと思ってね」

「じゃあ、あの人悪い人なんですか」

子どもは答えなかった。けれどわたしにあたえた目つきはことばよりも多くを語った。かれはこの話を続

けるのを好まないように炉のほうへ行った。炉のたなの上に大きななべがあった。わたしは火に当たろうと思ってそばへ寄ると、このなべがなんだか変わった形をしているのに気がついた。なべのふたにはまっすぐな管がつき出して、蒸気がぬけるようになっていた。そのふたはちょうつがいになっていて、一方には錠がかかっていた。

「なぜ錠ががかかっているの」と、わたしはふしぎそうにたずねた。

「ぼくがスープを飲まないようにさ。ぼくはなべの番を言いつかっているけれど、親方はぼくを信用しない

のだ」

　わたしはほほえまずにはいられなかった。

　するとかれは悲しそうに言った。

「きみは笑（わら）うね。ぼくが食いしんぼだと思うからだろう。でもきっときみがぼくの境遇（きょうぐう）だったら、ぼくと同じことをしたかもしれないよ。ぼくはぶたではないけれど、腹（はら）が減（へ）っている。だからなべの口からスープのにおいがたてば、ますます腹が減ってくるのだ」

「ガロフォリさんはきみにじゅうぶん食べるものをくれないの」

「ああ、それが罰（ばつ）なんだ……」

「まあ……」

「そうだ。それにこれだけのことは話してもいい」と少年は続けた。「きみももしあの人を親方に持つんだったら、心得になることだからね。ぼくの名前はマチアと言うよ。ガロフォリはぼくのおじさんだ。ぼくの母さんはいるが、六人の子どもをかかえているし、たいへんびんぼうでくらしがたたないでいる。ガロフォリが去年来たとき、ぼくをいっしょに連れて帰ったのさ。いったいぼくよりはつぎの弟のレオナルドを連れて行きたかったのだ。レオナルドはぼくとちがって器量がいいのだからね。お金をもうけるには不器量

ではだめだよ。ぶたれるか、ひどく悪口を言われるだけだ。でもぼくの母さんはレオナルドが好(す)きで手ばなさないから、やはりぼくが来ることになったのだ。ああ、うちをはなれて、親兄弟や、小ちゃな妹に別(わか)れるのはどんなにつらかったろう。

　ガロフォリ親方はこのうちへ子どもをたくさん置(お)いてあって、中にはえんとつそうじもあれば、紙くず拾いもある。働(はたら)くだけの力のない者は町で歌を歌ったりこじきをしている。ガロフォリはぼくに二ひき小さな白いはつかねずみをくれて、それを往来(おうらい)で見世物に出させて、毎晩(まいばん)三十スー持って帰って来なければなら

ないと言いわたした。三十スーに一スーでも不足があれば、不足だけむちでぶたれるのだ。きみ、三十スーもうけるにはずいぶん骨が折れる。けれどぶたれるのはもっとつらい。とりわけガロフォリが自分で手を下ろすときはよけい痛いのだ。それでぼくは金を取るためいろんなことをしてみるが、よく不足なことがあった。たいていほかの子どもたちが夜帰って来て、決められた金を持って来たとき、ぼくは自分の分に足りないとガロフォリは気ちがいのようにおこった。もう一人仲間にやはりはつかねずみの見世物を出す子どもがある。このほうは四十スーと決められているのだが、

毎晩（まいばん）きっとそれだけの金を持って帰る。そんなときぼくはその子がどんなふうにして金をもうけるか見たいと思って、いっしょについて行った……」

かれはことばを切った。

「それで」とわたしはたずねた。

「おお、見物のおくさんたちは決まってこう言うのだ。きれいな子のほうへおやりよ。みっともない子どものほうでなく、と。そのみっともない子どもというのはむろんぼくだった。そこでぼくはもうその子とは行かないことにした。ぶたれるのは痛（いた）いけれど、そんなことをしかもおおぜいの人の前で言われるのはもっとつ

らい。きみはだれからも、おまえはみにくいと言われたことがないから知るまい。だがぼくは……さてとうとうガロフォリは、ぶってもたたいてもぼくには効き目がないのをみて、ほかのしかたを考えた。それは毎晩ぼくの晩飯のいもを減らすのだ。きさまの皮はいくらひっぱたいても平気で固いが、胃ぶくろはひもじいだろうと言った。それはつらいが、でもぼくのねずみの見世物を見ている往来の人に向かって、どうか一スーください、くださらないと、今夜はおいもが食べられませんとは言われない。人はそんなことを言ったって、なにもくれるものではないよ」

「じゃあ、どうするとくれるの」

「それはきみ、だれだって自分の心を満足（まんぞく）させるためにくれるのだ。なんでもなく人に物をくれるものではないよ。その子どもがかわいらしくって、きれいであるか、あるいはその人たちの亡（な）くした子どものことを思い出させるとかいうならくれる。子どもはおなかがすいているからかわいそうだと思って、くれる者はない。ああ、こんなことで長いあいだにぼくは世の中の人の心持ちがわかってきた。ねえ、きょうは寒いじゃないか」

「ああ、ひどい寒さだね」

「ぼくはこじきをしてから、だんだん太れないで青くなった」と少年は続いて言った。「ぼくはずいぶん青い顔をしている。それでぼくはたびたび人が、あのびんぼう人の子どもはいまに飢えて死ぬだろうと言っているのを聞いた。だが苦しそうな顔つきは、楽しそうな顔つきではできないことをしてくれる。その代わりひじょうにひもじい目をこらえなければならない。とにかくおかげでだんだんぼくを気のどくがる人が近所にできた。みんな、ぼくのもらいの少ないときにはパンやスープをめぐんでくれる。これはぼくのいちばんうれしいときで、ガロフォリにぶたれもしないし、

晩飯(ばんめし)にいもがもらえなくっても、どこかでなにか昼飯(ひるめし)にもらって食べて来るから苦しいこともなかった。けれどある日ガロフォリが、ぼくが水菓子屋(みずがしや)にもらった一さらのスープを飲んでいるところを見つけると、なぜぼくがうちで晩飯(ばんめし)をもらわずに平気で出て行くか、そのわけを初(はじ)めて知った。それからはぼくにうちで留守番(るすばん)させて、このスープの見張(みは)りを言いつけた。毎朝出て行くまえに肉と野菜(やさい)をなべに入れて、ふたに錠(じょう)をかってしまう。そしてぼくのすることはそのにえたつのを見るだけだ。ぼくはスープのにおいをかいでいる。だがそれだけだ。スープのにおいでは腹(はら)は張(は)

らない。どうしてよけい空腹（くうふく）になる。ぼくはずいぶん青いかい。ぼくはもう外へ出ないから、みんながそう言うのを聞かないし、ここには鏡（かがみ）もないのだからわからない」

「きみはほかの人よりかよけい青いとは思えないよ」

とわたしは言った。

「ああ、きみはぼくを心配させまいと思ってそう言うのだ。けれどぼくはもっともっと青くなって、早く病気になるほうがうれしいのだ。ぼくはひじょうに悪くなりたいのだ」

わたしはあきれて、かれの顔をながめた。

「きみはわからないのだ」とかれはあわれむような微笑(びしょう)をふくんで言った。「ひどく加減(かげん)が悪くなればみんなが世話をしてくれる。さもなければ死なせてくれる。ぼくを死なせてくれればなにもかもおしまいだ。もう腹(はら)を減(へ)らすこともないし、ぶたれることもないだろう。それにぼくたちは死ねば天にのぼって神様といっしょに住むことになるのだ。そうだ、そうなればぼくは天にのぼって、上から母さんや、クリスチーナを見下ろすことができる。神様にたのんで妹を不幸(ふしあわ)せにしないようにしてもらうこともできる。だからぼくは病院へやられればうれしいと思うよ」

病院――というとわたしはむやみにおそろしい所だと思いこんでいた。わたしはいなか道を旅をして来たあいだ、どんなに気分が悪く思うときでも、病院へやられるかもしれないと思い出すといつでも力が出て、無理（むり）にも歩いたものだった。マチアのこういうことばにわたしはおどろかずにはいられなかった。

「ぼくはいままではずいぶんからだの具合が悪くなっている。だがまだガロフォリのじゃまになるほど悪くはなっていない」と、かれは弱い、ひきずるような声で話を続（つづ）けた。「でもぼくはだんだん弱くなってきたよ。ありがたいことにガロフォリはまるっきりぶつことを

やめずにいる。八日まえにもぼくの頭をうんとひどくぶった。おかげでこのとおりはれ上がった。見たまえ、この大きなこぶを。あいつはきのうぼくに、これはできものだと言った。そう言ったあの人の様子はなんだかまじめだった。おそろしく痛むのだ。夜になるとひどく目がくらんでまくらに頭をつけるとぼくはうなったり泣いたりする。それがほかの子どものじゃまになるのをガロフォリはひどくきらっている。だから二日か三日のうちにいよいよあの人もぼくを病院へやることに決めるだろうと思う。ぼくは先に慈恵病院にいたことがある。お医者さんはかくしに安いお菓子をいつ

も入れているし、看護婦の尼さんたちがそれは優しく話をしてくれるよ。こう言うんだ。ぼうや、舌をお出しとか、いい子だからねとかなんでもなにかしたいたんびに、『ああ、おしよ』と言ってくれる。それがうちにいる母さんと同じ調子なんだ。ぼくはどうも今度は病院へ行くほど悪くなっていると思う」

かれはそばへ寄って来て、大きな目でじっとわたしを見た。わたしはかれの前に真実をかくす理由はなかったが、しかしかれの大きなぎょろぎょろした目や、くぼんだほおや、血の気のないくちびるがどんなにおそろしく見えるかということを、かれに語ることを好

まなかった。

「きみは病院へ行かなければならない。ずいぶん悪いと思うよ」

「いよいよかね」

かれは足を引きずりながらのろのろ食卓のほうへ行って、それをふき始めた。

「ガロフォリがまもなく帰って来る」とかれは言った。

「ぼくたちはもう話をしてはいけない。もうこれだけぶたれているのだ。このうえよけいなぐられるのは損だからね。なにしろこのごろいただくげんこは先よりもずっと効くからね。人間はなんでも慣れっこになる

なんて言うが、それはお人よしの言うことだよ」

びっこひきひきかれは食卓(しょくたく)の回りを回って、さらやさじならべた。勘定(かんじょう)すると二十枚(まい)さらがあった。そうするとガロフォリは二十人の子どもを使っているのだ。でも寝台(ねだい)は十二しか見えなかったから、かれらのある者は一つの寝台に二人ねむるのだ。それにとにかくなんという寝台であろう。なんというかけ物であろう。かけ物の毛布(もうふ)はうまやから、もう古くなって馬が着ても暖(あたた)かくなくなったようなしろものを、持って来たにちがいない。

「どこでもこんなものかしら」と、わたしはあきれて

たずねた。
「なにがさ」
「子どもを置く所は、どこでもこんなかしら」
「そりゃ知らないがね、きみはここへは来ないほうがいいよ」と、少年は言った。「どこかほかへ行くようにしたまえ」
「どこへ」
「ぼくは知らない。どこでもかまわない。ここよりはいいからねえ」
どこへといって、どこへわたしは行こう。――ぼんやり当てもなしに考えこんでいると、ドアがあいて、

一人の子どもが部屋の中にはいって来た。かれは小わきにヴァイオリンをかかえて、手に大きな古材木を持っていた。わたしはガロフォリの炉にたかれている古材木の出所と値段もわかったように思った。

「その木をくれよ」とマチアは子どものほうへ寄って行った。けれど子どもは材木を後ろにかくした。

「ううん」とかれは言った。

「まきにするんだからおくれよ。するとスープがおいしくにえるから」

「きみはぼくがこれをスープをにるために持って来たと思うか。ぼくはきょうたった三十六スーしかもらえ

なかった。だからこの材木をぶたれないおまじないにするのだ。これで四スーの不足の代わりになるだろう」

「やっぱりやられるよ。なんの足しになるものか。順ぐりにやられるんだ」

　マチアはそう機械的に言って、あたかもこの子どもも罰せられると思うのがかれに満足をあたえるもののようであった。わたしはかれの優しい悲しそうな目のうちに、険しい目つきの表れたのを見ておどろいた。だれでも悪い人間といっしょにいると、いつかそれに似てくるということは、わたしがのちに知ったことで

あった。

一人一人子どもたちは帰って来た。てんでんにはいって来ると、ヴァイオリン、ハープ、ふえなど自分の楽器を寝台（ねだい）の上のくぎにかけた。音楽師（おんがくし）でなく、ただ慣（な）らしたけものの見世物をやる者は、小ねずみやぶたねずみをかごの中に入れた。

それから重い足音がはしご段（だん）にひびいて、ねずみ色の外とうを着た小男がはいって来た。これがガロフォリであった。

はいって来るしゅんかん、かれはわたしに目をすえて、それはいやな目つきでにらめた。わたしはぞっと

した。

「この子どもはなんだ」と、かれは言った。

マチアはさっそくていねいにヴィタリス親方の口上(こうじょう)をかれに伝(つた)えた。

「ああ、じゃあヴィタリスが来たのか」とかれが言った。「なんの用だろう」

「わたしはぞんじません」とマチアが答えた。

「おれはきさまに言っているのではない。この子どもに話しているのだ」

「親方がいずれもどって来て、用事を自分で申し上げるでしょう」と、わたしは答えた。

「ははあ、このこぞうはことばの値打(ねう)ちを知っている。要(い)らぬことは言わぬ。おまえはイタリア人ではないな」

「ええ、わたしはフランス人です」

ガロフォリが部屋(へや)にはいって来たしゅんかん、二人の子どもがてんでんにかれの両わきに席(せき)をしめた。そしてかれのことばの終わるのを待っていた。やがて一人がそのフェルト帽(ぼう)をとって、ていねいに寝台(ねだい)の上に置(お)くと、もう一人はいすを持ち出して来た。かれらはこれを同じようなもったいらしさと、行儀(ぎょうぎ)よさをもって、寺小姓(てらこしょう)が和尚(おしょう)さんにかしずくようにしていた。ガ

ロフォリがこしをかけると、もう一人の子どもがたばこをつめたパイプを持って来た。すると第四の子どもがマッチに火をつけてさし出した。

「いおうくさいやい。がきめ」とかれはさけんで、マッチを炉の中に投げこんだ。

この罪人はあわてて過失をつぐなうために、もう一本のマッチをともして、しばらく燃やしてから主人にそれをささげた。けれどもガロフォリはそれを受け取ろうとはしなかった。

「だめだ。とんちきめ」とかれは言って、あらっぽく子どもをつきのけた。それからかれはもう一人の子ど

ものほうを向いて、おせじ笑い（わら）をしながら言った。
「リカルド、おまえはいい子だ。マッチをすっておくれ」
　この「いい子」はあわてて言いつけどおりにした。
「さて」とガロフォリは具合よくいすに納（おさ）まって、パイプをふかしながら言った。
「おこぞうさんたち、これから仕事だ。マチア、帳面だ」
　こう言われるまでもなく、子どもたちはガロフォリのまゆの動き方一つにも心を配っていた。そのうえにガロフォリがわざわざ口に出して用向きを言いつけて

くれるのは、たいへんな好意（こうい）であった。

ガロフォリはマチアの持って来たあかじみた小さな帳面には目もくれなかった。初（はじ）めのいおうくさいマッチをつけた子どもに、来いと合図をした。

「おまえにはきのう一スー貸（か）してある。それをきょう持って来るやくそくだったが、いくら持って来たな」

子どもは赤くなって、当惑（とうわく）を顔に表して、しばらくもじもじしていた。

「一スー足りません」とかれはやっと言った。

「はあ、おまえは一スー足りないのかね。それでいいのだね」

「きのうの一スーではありません。きょう一スー足りないのです」

「それで二スーになる。おれはきさまのようなやつを見たことがない」

「わたしが悪いんではないんです」

「言い訳をしなさんな。規則は知っているだろう。着物をぬぎなさい。きのうの分が二つ、きょうの分が二つ。合わせて四つ。それから横着の罰に夕食のいもはやらない。リカルド、いい子や。おまえはいい子だから、気晴らしをさせてやろう。むちをお取り」

二本目のマッチをつけた子どものリカルドが、かべ

から大きな結び目のある皮ひもの二本ついた、柄の短いむちを下ろした。そのあいだに二スー足りない子どもは上着のボタンをはずしていた。やがてシャツまでぬいでからだをこしまで現した。

「ちょっと待て」とガロフォリがいまいましい微笑を見せて言った。

「たぶんきさまだけではあるまい。仲間のあるということはいつでもゆかいなものだし、リカルドにたびたび手数をかけずにすむ」

　子どもたちは親方の前に身動きもせずに立っていたが、かれの残酷なじょうだんを開いて、みんな無理に

笑（わら）わされた。

「いちばん笑ったやつはいちばん足りないやつだ」とガロフォリが言った。「きっとそれにちがいない。いちばん大きな声で笑ったのはだれだ」

みんなは例（れい）の大きな材木（ざいもく）を持って、まっ先に帰って来た子どもを指さした。

「こら、きさまはいくら足りない」とガロフォリがせめた。

「わたしのせいではありません」

「わたしのせいではありませんなんかと言うやつは、一つおまけにぶってやろう。いくら足りないのだ」

「わたしは大きな材木を一本持って来ました。りっぱな材木です」
「それもなにかになる。だがパン屋へ行ってその棒(ぼう)でパンにかえてもらって来い。いくらにかえてくれるか。いくら足りないのだ。言ってみろ」
「わたしは三十六スー持って来ました」
「この悪者め、四スー足りないぞ。それでいて、そんなしゃあしゃあした面(つら)をして、おれの前につっ立っている。シャツをぬげ。リカルドや、だんだんおもしろくなるよ」
「でも材木(ざいもく)は」と子どもがさけんだ。

「晩飯の代わりにきさまにやるわ」

この残酷なじょうだんが罰せられないはずの子どもたちみんなを笑わせた。それからほかの子どもたちも一人一人勘定をすました。リカルドがむちを手に持って立っていると、とうとう五人までの犠牲者が一列にかれの前にならべられることになった。

「なあ、リカルド」とガロフォリが言った。「おれはこんなところを見るといつも気分が悪くなるから、見ているのはいやだ。だが音だけは聞ける。その音でおまえのうでの力を聞き分けることができる。いっしょうけんめいにやれよ。みんなきさまたちのパンのために

働(はたら)くのだ」

かれは炉(ろ)のほうへからだを向けた。それはあたかもかれがこういう懲罰(ちょうばつ)を見ているにしのびないというようであった。

わたしは一人すみっこに立って、いきどおりとおそれにふるえていた。これがわたしの親方になろうとする男なのである。わたしもこの男に言いつけられた物を持って帰らなければ、やはりリカルドに背中(せなか)を出さねばならなかった。ああ、わたしはマチアがあれほど平気で死ぬことを口にしているわけがわかった。

ぴしり、第一のむちがふるわれて、膚(はだ)に当たったと

き、もうなみだがわたしの目にあふれ出した。わたしのいることは忘(わす)れられていたと思っていたけれど、それは考えちがいで、ガロフォリは目のおくからわたしを見ていた。

「人情(にんじょう)のある子どもがいる」とかれはわたしを指さした。「あの子はきさまらのような悪党(あくとう)ではない。きさまらは仲間(なかま)が苦しんでいるところを見て笑(わら)っている。この小さな仲間を手本にしろ」

わたしは頭のてっぺんから足のつま先までふるえた。ああ、かれらの仲間か……。

第二のむちをくって犠牲(ぎせい)はひいひい泣(な)き声(ごえ)を立てた。

三度目には引きさかれるようなさけび声を上げた。ガロフォリが手を上げたむちを上げたむちを上げた。リカルドはふり上げたむちをひかえた。わたしはガロフォリがさすがに情けを見せるのだと思ったが、そうではなかった。

「きさまらの泣き声を聞くのはおれにはどのくらいつらいと思う」とかれはねこなで声で犠牲に向かって言いかけた。「むちがきさまらの皮をさくたんびにさけび声がおれのはらわたをつき破るのだ。ちっとはおれの苦しい心も察して、気のどくに思うがいい。だからこれから泣き声を立てるたんびによけいに一つむちをくれることにするからそう思え。これもきさまらが悪

いのだ。きさまらがおれに対してちっとでも情(なさ)けや恩(おん)を知っているなら、だまっていろ。さあ、やれ、リカルド」

リカルドがむちをふり上げた。皮ひもは犠牲(ぎせい)の背中(せなか)でくるくる回った。

「おっかあ。おっかあ」とその子どもがさけんだ。

ありがたい。わたしはこのうえこのおそろしい呵責(かしゃく)を見ずにすんだ。なぜといってこのしゅんかんドアがあいて、ヴィタリス親方がはいって来たからである。

人目でかれはなにもかも了解(りょうかい)した。かれははしご段(だん)を上がりながらさけび声を聞いたので、すぐリカル

ドのそばにかけ寄(よ)って、むちを手からうばった。それからガロフォリのほうへくるりと向いて、うで組みをしたままかれの前につっ立った。

これはいかにもとっさのあいだに起こったので、しばらくはガロフォリもぽかんとしていた。けれどもすぐ気を取り直しておだやかに言った。

「どうもおそろしいようじゃないか。なにね、あの子どもは気がちがっているのだ」

「はずかしくはないか」ヴィタリスがさけんだ。

「それ見ろ、わたしもそういうことだ」とガロフォリがつぶやいた。

「よせ」とヴィタリス親方が命令(めいれい)した。「とぼけるなよ。おまえのことだ。子どもではない。こんな手向かいのできないかわいそうない子どもらをいじめるというのは、なんというひきょうなやり方だ」
「この老(お)いぼれめ。よけいな世話を焼(や)くな」とガロフォリが急に調子を変(か)えてさけんだ。
「警察(けいさつ)ものだぞ」とヴィタリスが反抗(はんこう)した。
「なに、きさま、警察でおどすのか」とガロフォリがさけんだ。
「そうだ」と、わたしの親方は乱暴(らんぼう)な相手(あいて)の気勢(きせい)にはちっともひるまないで答えた。

「ははぁ」とかれはあざ笑った。「そんなふうにおまえさんは言うのだな。よしよし、おれにも言うことがあるぞ。おまえのしたことはなにも警察に関係はないが、おまえさんに用のあるという人が世間にはあるのだ。おれがそれを言えば、おれが一度名前を言えば……はてはずかしがって頭をすぼめるのはだれだろうなあ。世間が知りたがっているその名前を言い回っただけでも、はじになる人がどこかにいるぞ」

親方はだまっていた。はじだ。親方のはじだ。なんだろう。わたしはびっくりした。けれど考えるひまのないうちに、かれはわたしの手を引っ張った。

「さあ、行こう、ルミ」とかれは言った、そうして戸口までぐんぐんわたしを引っ張った。

「まあ、いいやな」ガロフォリが今度は笑（わら）いながらさけんだ。「きみ、話があって来たんだろう」

「おまえなんぞに言うことはなにもない」

それなり、もうひと言も言わずに、わたしたちははしご段（だん）を下りた。かれはまだしっかりわたしの手をおさえていた。なんというほっとした心持ちで、わたしはかれについて行ったろう。わたしは地獄（じごく）の口からのがれた。わたしが思いどおりにやれば、親方の首に両手をかけて、強く強くだきしめたところであったろう。

（つづく）

底本：「家なき子（上）」春陽堂少年少女文庫、春陽堂
　１９７８（昭和53）年１月30日発行
※底本中、難解な語句の説明に使われた括弧内の文章は、割り注になっています。
入力：京都大学電子テクスト研究会入力班（大石尺）
校正：京都大学電子テクスト研究会校正班（大久保ゆう）
２００４年４月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。